

## 第4章 梅田東前谷中峯遺跡の調査

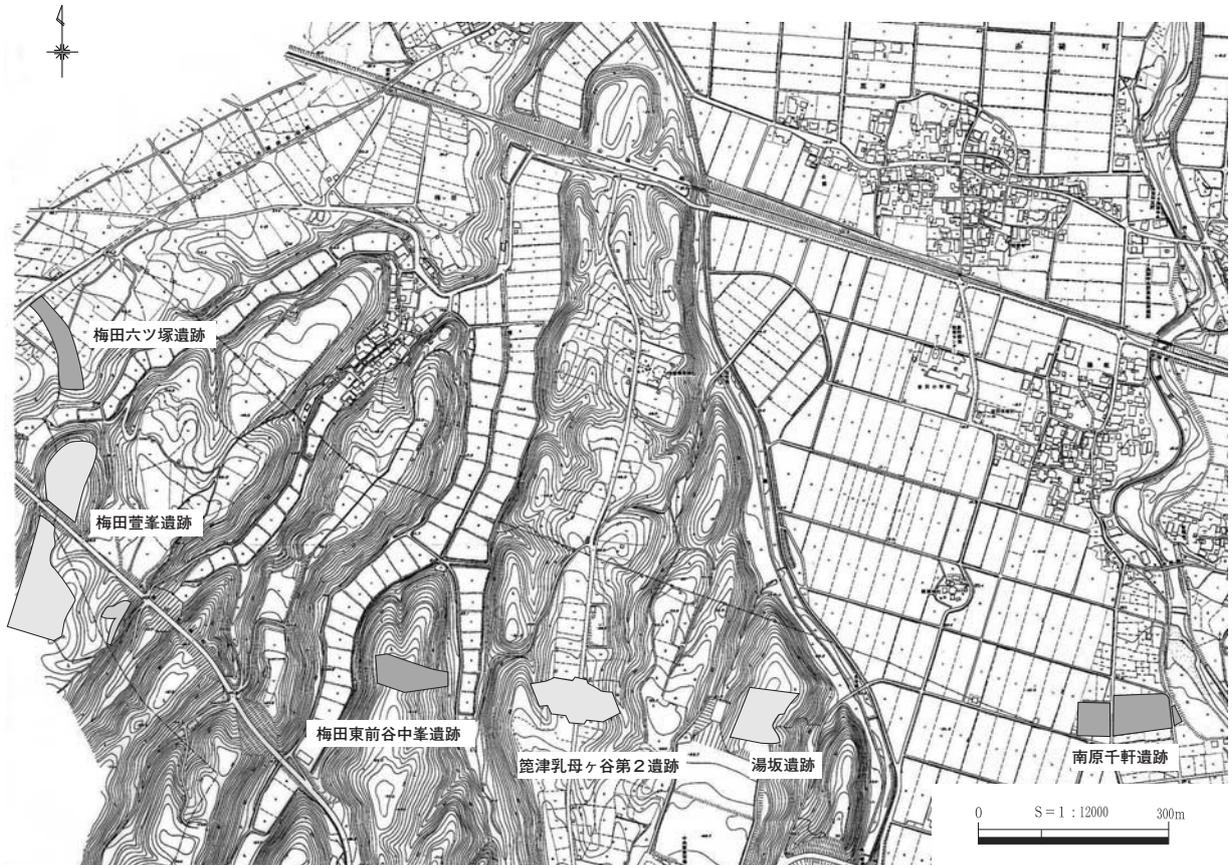
### 第1節 遺跡の立地と層序

#### 1 遺跡の立地

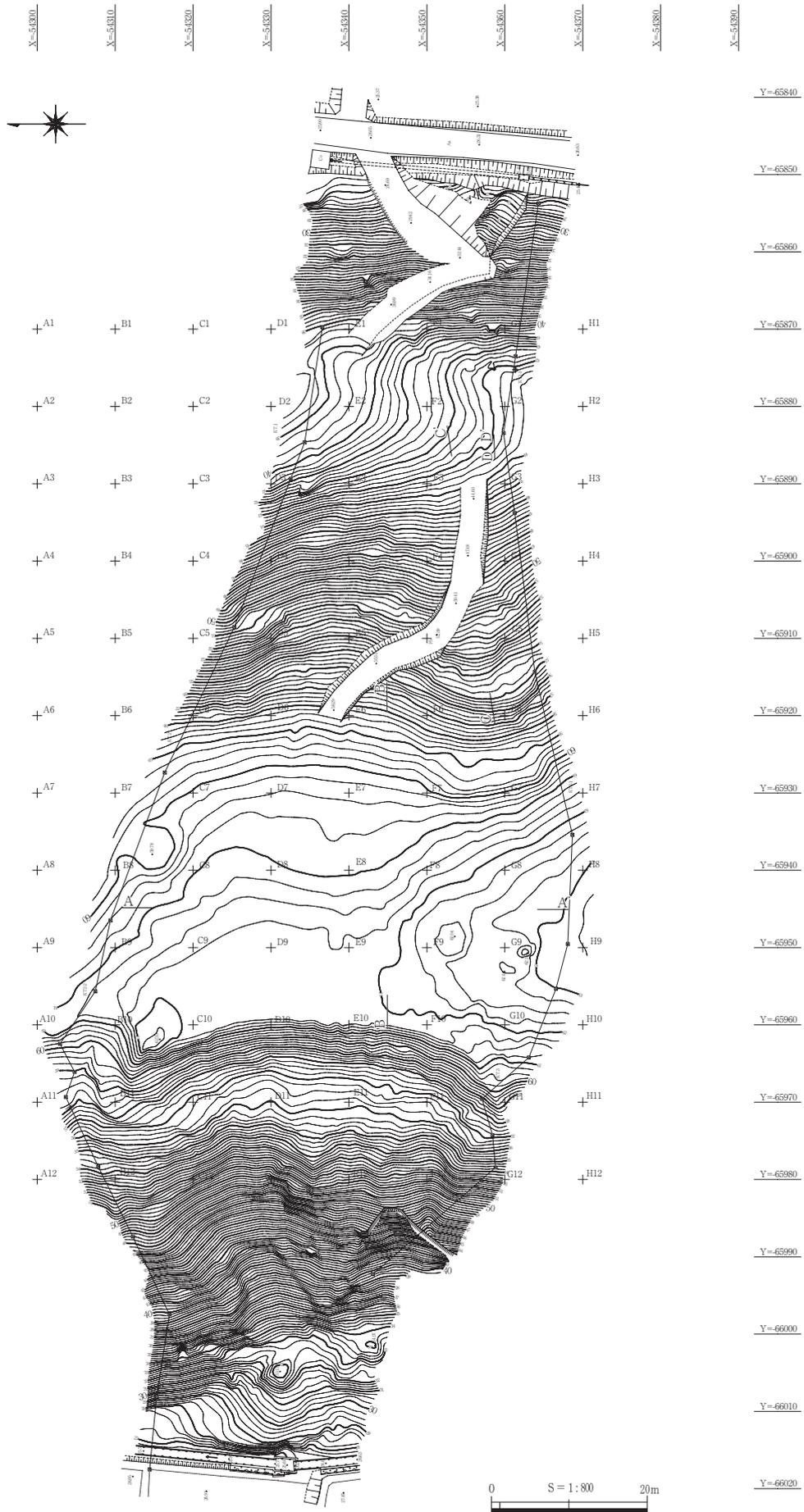
**遺跡周辺の地形(第66図)** 火山麓扇状地をなす大山北麓は多数の中小河川によって放射状に開析されており、幾条もの谷と侵食されずに残った台地状の丘陵が繰り返す地形となっている。本遺跡はこうした開析作用によって形成された小丘陵の先端部に立地する。

遺跡周辺は船上山から北に延びる丘陵群の先端部にあたり、周辺は中小の丘陵と開析谷が複雑に入り組んでいる。遺跡の載る丘陵は、梅田川によって開析された谷の奥に位置する小規模な丘陵で、狭い谷を隔てて東に位置する丘陵から分岐したものである。この東の丘陵は笠津乳母ヶ谷第2遺跡などが所在する比較的大きな丘陵で、その東側には黒川が流れ、さらに東には沖積平野が広がっている。梅田東前谷中峯遺跡の西側は、谷を隔てて小丘陵があり、その西には小さな谷を隔てて梅田萱峯遺跡の所在する丘陵がある。このさらに西側は大山町域で、開析が進行していないなだらかな台地状の火山麓扇状地が広がっている。

**調査地の地形(第67図)** 調査地は痩せ尾根状の丘陵先端にあり、丘陵上平坦面の幅は約30メートルで、尾根頂部の調査前の標高は南端で約63メートル、北端で約61メートルであった。平坦面は西側が高く、東に向かって緩やかに下っている。丘陵上平坦面の東は急傾斜の斜面となっている。この斜面は標高42メートル付近で一旦終わっており、その東側は南北に緩い傾斜をもった平坦面となっている。この平坦面の東は急斜面となって谷に続いている。丘陵尾根の西側は急勾配の崖で、崖面にわずかに被る表土を除去すると地山の火山碎屑物層の露頭が確認できた(PL.43-3)。崖の下は狭い平坦面



第66図 調査地位置と周辺地形



第67図 調査前地形測量図

になっており、この面に堆積した表土および薄い流土を除去すると岩盤が露出した。このような堆積の薄さから判断して、この崖は比較的近年に形成されたものと考えているが、その成因が自然崩落なのか人為的な掘削なのかは明らかにできていない。その西側は急斜面となって谷に続いている。丘陵の東西の谷の標高は調査地付近で約26メートルから約28メートルを測り、尾根頂部との比高差は約35メートルである。

調査前の現況は檜林または雑木林であったが、地表面にすでに遺構の落ち込みが表れていた。丘陵上で確認した竪穴住居はすべて円形の落ち込みとして認識できたほか、東斜面部で確認した段状遺構も狭いテラス地形として認識可能であった。

## 2 調査地内の土層堆積(第68～70図、PL.43)

本丘陵は火山碎屑物堆積層を基盤としており、丘陵上平坦部、東斜面部ともこの基盤層上に二次堆積層や遺物包含層が載っている。丘陵上と斜面部では異なった堆積層が見られるものの、堆積層順を整合的に確認できたので、調査地内の土層すべてに通し番号の層名を付した。

II層～V層が弥生時代から古代にかけての遺物包含層で、II・III層が丘陵上平坦部に堆積し、II'層・IV・V層が東斜面部・平坦部に堆積する。VI層以下は遺跡形成以前の堆積層である。VI層が東斜面部・平坦部に自然堆積した流土層、VII層以下が主にローム層からなる火山碎屑物堆積層である。VII～IX層は丘陵上平坦部のみに堆積するが、X層は東斜面部・平坦部でも基盤層となっている。

以下に各層の特徴を示す。

表土：堆積は薄く、層厚は丘陵上で3～5cm前後、東斜面部・平坦部で10cm前後である。黒褐色～暗褐色の腐植土。

I層：赤橙褐色土。しまりやや弱、粘性やや強。径3～5mmの炭化物粒、径0.5～1cmの焼土粒を多く含む。地山ローム層(X層中心)を人為的にII層上に掘り上げて形成された盛土状の土層。丘陵上北西部に広がる。調査地北西部の掘削に伴う上げ土と考え、近年のもの判断した。

II層：黄褐色土。にぶくくすんだ色調。しまりやや強、粘性やや弱。部分的に径2～3mmの炭化物粒を含む。丘陵上・東斜面肩部に堆積する。弥生時代～古代の遺物包含層。

II'層：暗褐色土。しまりやや強、粘性やや弱。マンガン粒および部分的に径5mm前後の炭化物粒を含む。東斜面部・平坦部に堆積する。丘陵上II層に対応。弥生時代～古代の遺物包含層。

III層：暗黄褐色土。しまり弱、粘性強。マンガン粒を多く含む。丘陵上中央部の窪地に堆積する。弥生時代～古代の遺物包含層。

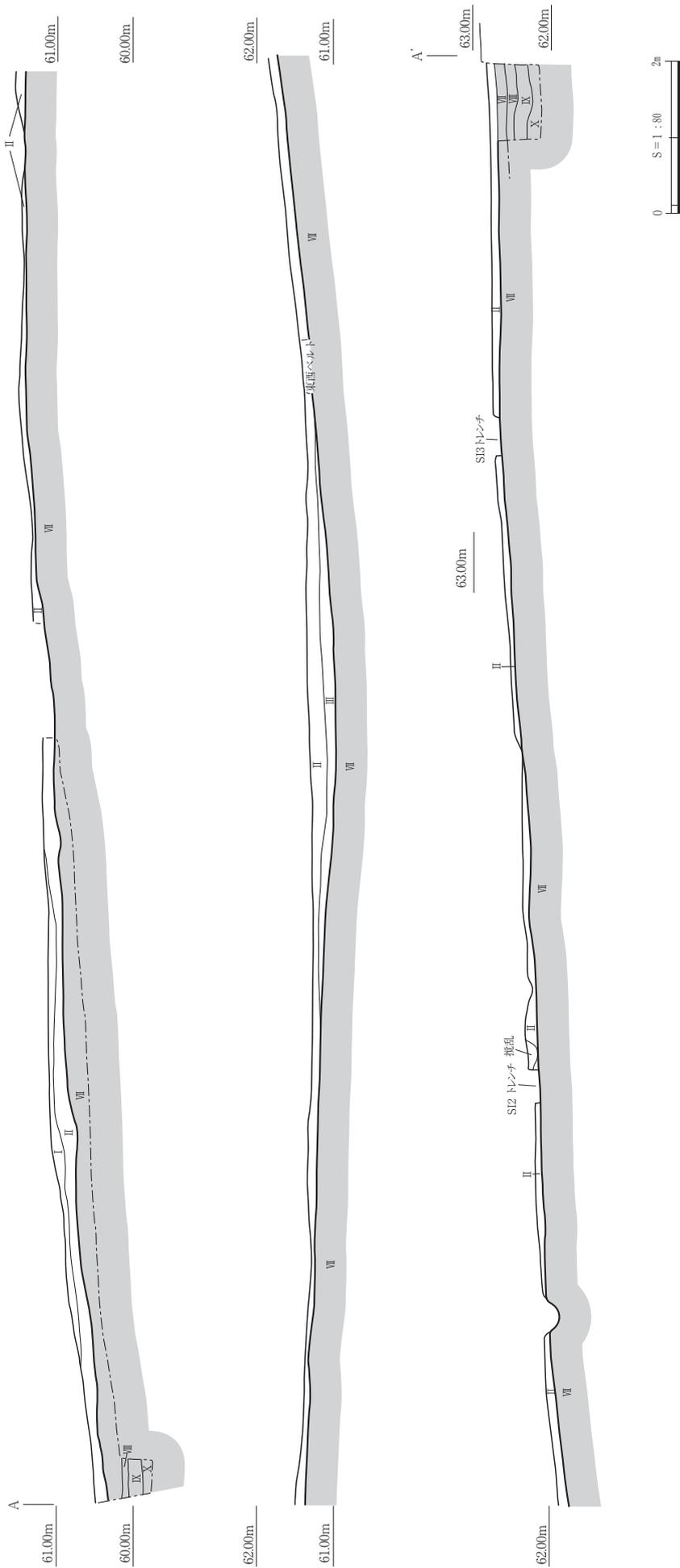
IV層：暗褐色土。しまりやや弱、粘性強。マンガン粒を多く含む。東斜面部南側の谷状窪地に堆積する。弥生時代～古代の遺物包含層。

V層：暗橙褐色土。粘性強。マンガン粒を多く含み、径1cm以下の黄色土・赤色土粒を含む。東斜面平坦部に堆積する。弥生時代～古代の遺物包含層。

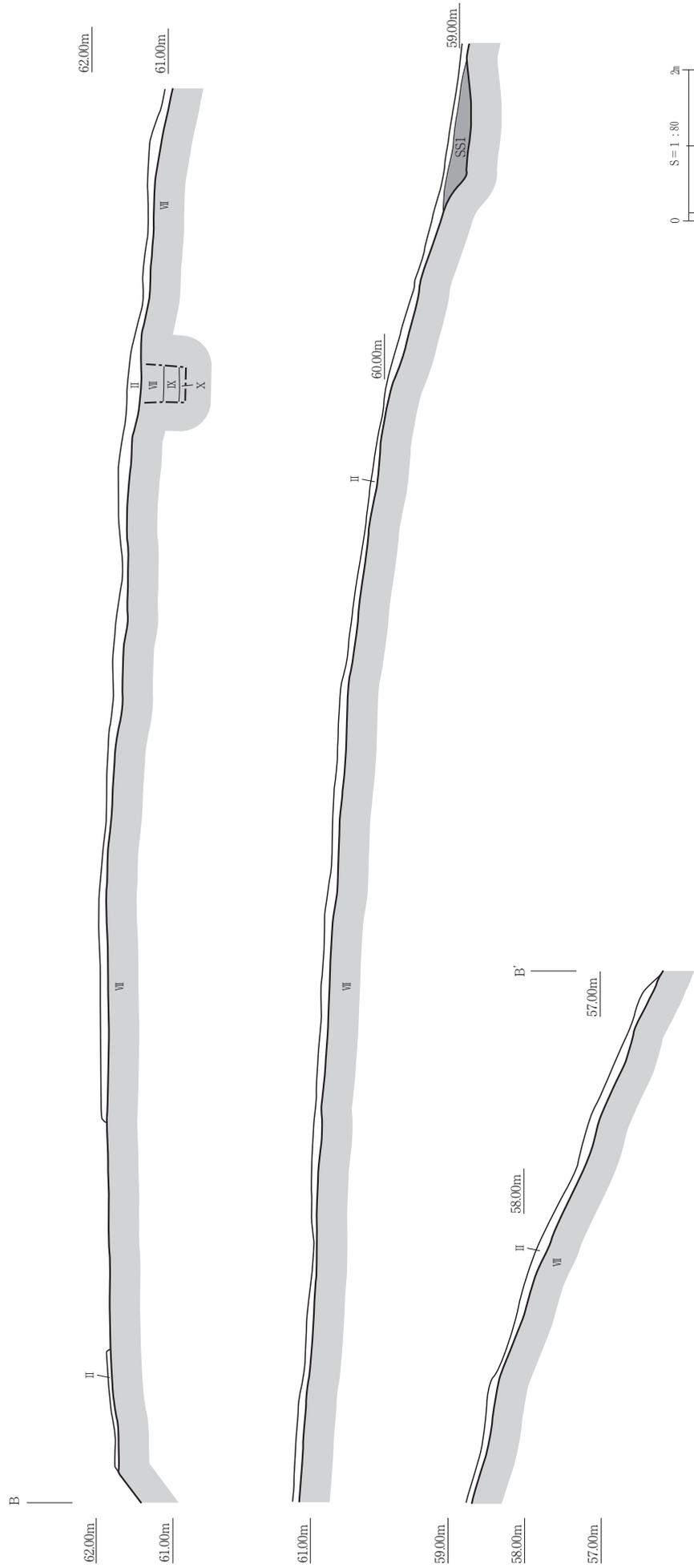
VI層：暗灰褐色土。しまり、粘性強。マンガン粒を多く含み、径10cm以下の礫、径1cm以下の黄色土・赤色土粒を含む。東斜面部の一部と東斜面平坦部に堆積する自然堆積の流土層である。

VII層：赤橙褐色粘質土。しまりやや弱、粘性強。いわゆるソフトローム層。丘陵上に堆積する。

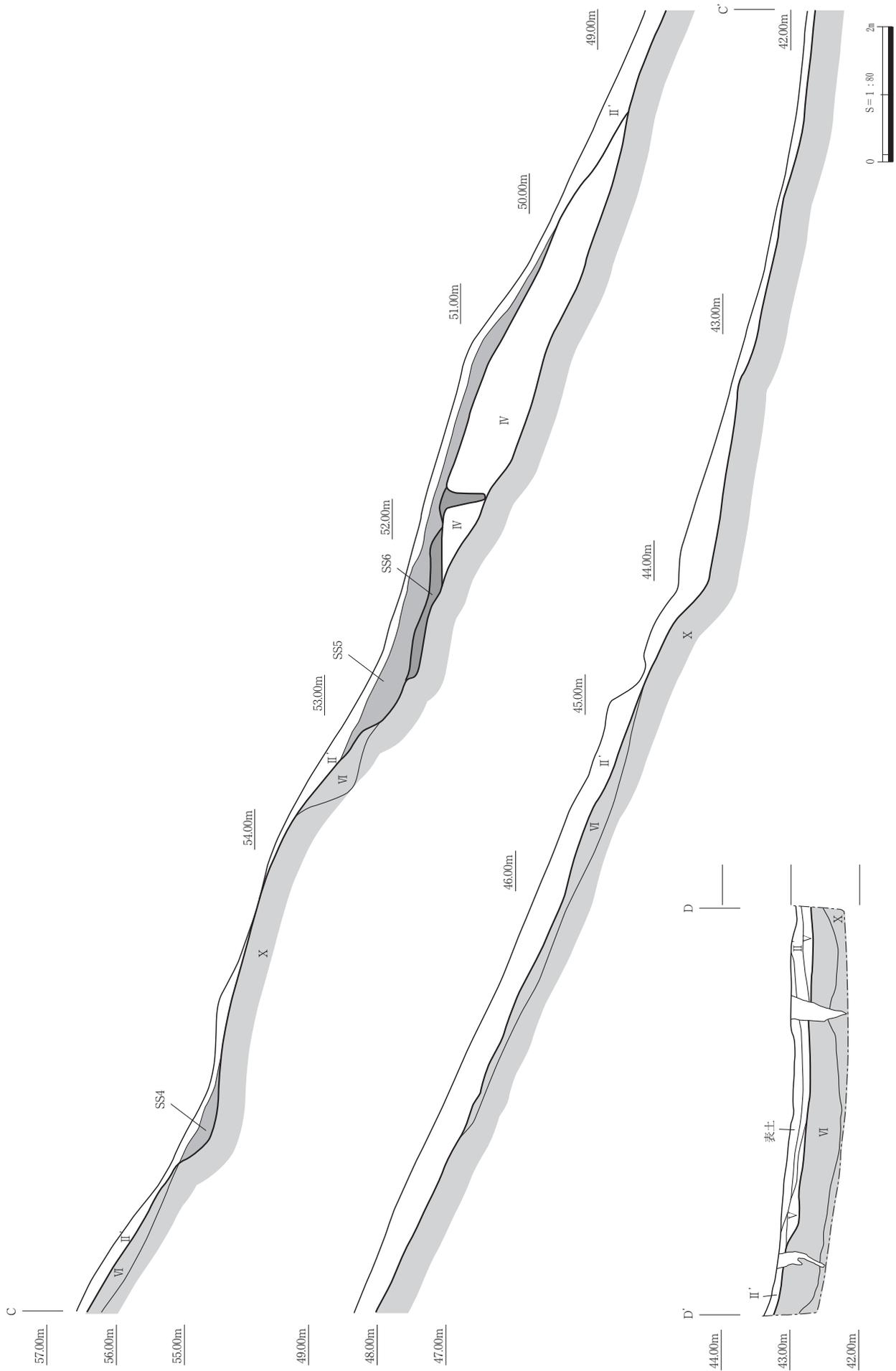
VIII層：橙褐色砂質土。しまり、粘性やや弱。黄～黄灰色の粗粒火山灰(火山砂)のブロックをベースに、橙色の火山灰ブロックを部分的に含む。前者が上または下のホーキ火山灰に、後者が始



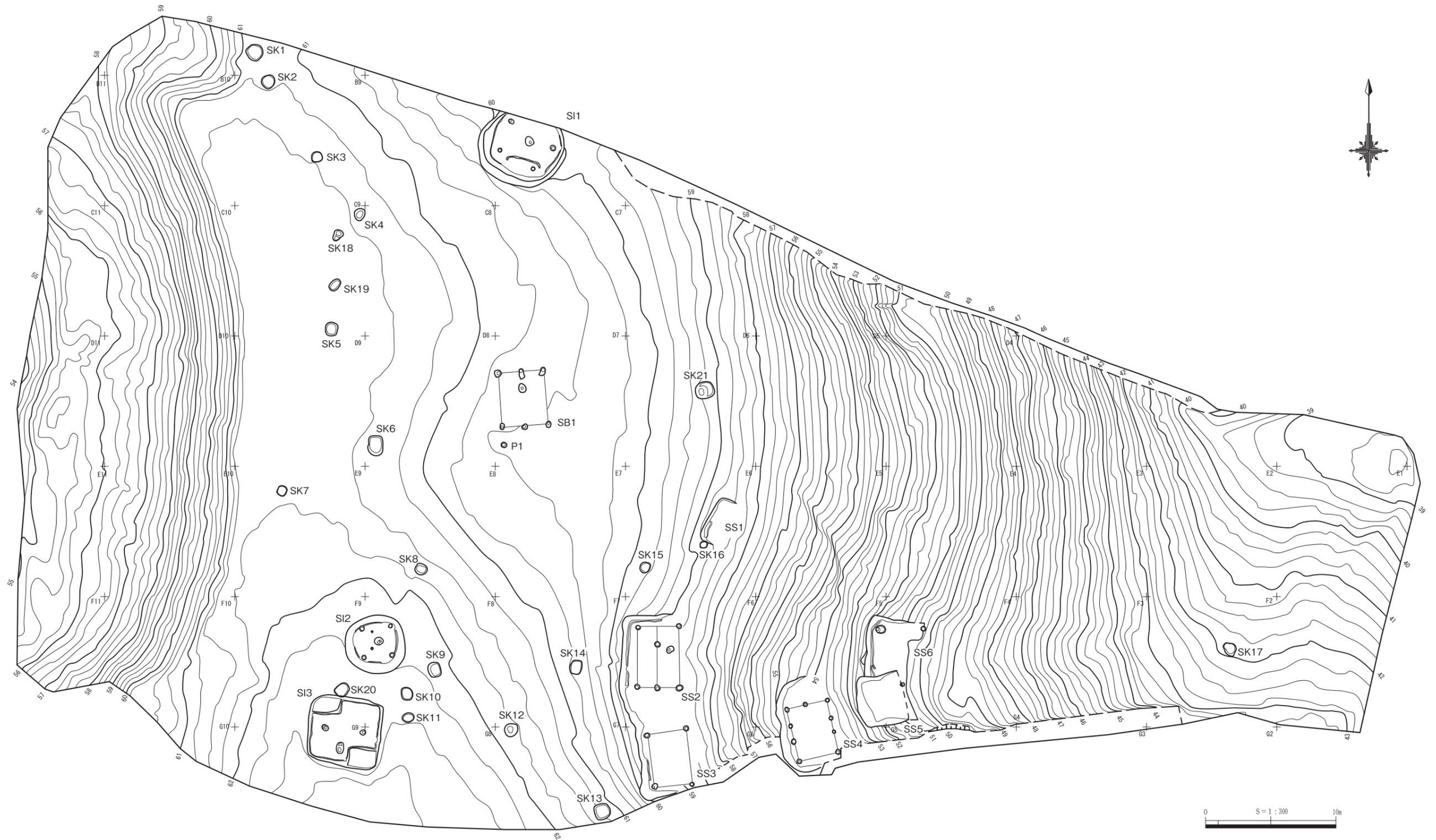
第68図 丘陵上平坦部南北土層断面



第69図 丘陵上平坦部東西土層断面



第70図 丘陵東斜面・平坦面土層断面



第71図 遺構の配置

良丹沢火山灰に対応するものと考えられる。丘陵上に堆積するが、明確な層を成さない部分もある。

Ⅸ層：淡黄褐色粘質土。しまり、粘性強。白色のローム層。丘陵上に堆積する。

Ⅹ層：赤橙褐色粘質土。しまり、粘性非常に強。赤橙色のローム層。調査地全体で確認できる。

### 3 調査の概要

梅田東前谷中峯遺跡では弥生時代から古代にかけての遺構と遺物を確認した。確認した遺構検出面は1面のみであった。この検出面は丘陵上平坦部ではⅡ層またはⅢ層の下面にあり、遺構掘り込み面はⅦ層の上面にある。東斜面部・平坦部ではⅡ'層またはⅣ層、Ⅴ層の下面で遺構を検出しており、遺構掘り込み面はⅥ層またはⅩ層の上面にある。

検出した遺構は、竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、段状遺構6基(うち掘立柱建物を伴うもの4基)、土坑21基、ピット1基である。これらの遺構は時期的なまとまりから大きく二つに分けられる。ひとつは3棟の竪穴住居を中心とした弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構群で、丘陵上平坦部に展開している。もうひとつは掘立柱建物やそれをとともなう段状遺構および土坑群からなる古代の遺構群で、掘立柱建物と土坑は丘陵上平坦部に、段状遺構は東斜面部に展開している。

遺物の出土量は遺構の内外ともに少なく、総量でコンテナ15箱程度であった。包含層からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古代の須恵器・土師器、石器類が出土しているが、いずれの時代の遺物とも包含層の上部から下部まで満遍なく出土している。ただし、場所によって主体的に出土する遺物の時期に差があって、丘陵上平坦部は弥生時代の遺物が、東斜面部・平坦部は古代の遺物がそれぞれ中心となり、遺構立地の時期差を反映している。

表29 梅田東前谷中峯遺跡新旧遺構名対照表

種類	本書での名称	調査時名称	種類	本書での名称	調査時名称	種類	本書での名称	調査時名称
竪穴住居	SI 1	SI 1	土坑	SK 1	SK 3	土坑	SK11	SK14
	SI 2	SI 2		SK 2	SK 4		SK12	SK16
	SI 3	SI 3		SK 3	SK 5		SK13	SK24
掘立柱建物	SB 1	SB 1		SK 4	SK 6		SK14	SK17
段状遺構	SS 1	SS 4		SK 5	SK11		SK15	SK18
	SS 2	SS 1・2		SK 6	SK 8		SK16	SK20
	SS 3	SS 3		SK 7	SK 1		SK17	SK23
	SS 4	SS 5		SK 8	SK12		SK18	SK 9
	SS 5	SS 6		SK 9	SK15		SK19	SK10
	SS 6	SS 7		SK10	SK13		SK20	SK 7
							SK21	SK19

## 第2節 弥生時代から古墳時代の調査成果

### 1 概要

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構として、竪穴住居3棟、段状遺構1基を確認した(第71図)。このうち、弥生時代後期に属する遺構は竪穴住居2棟(SI1・SI2)で、古墳時代前期に属する遺構は竪穴住居1棟(SI3)である。段状遺構1基(SS1)はいずれの時期とも判断しがたいが、弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅に収まるものである。

竪穴住居はすべて尾根上に立地しており、調査区北端で検出したSI1は尾根先端の傾斜変換部付近に、調査区南部で近接して検出したSI2とSI3は尾根頂部に立地している。SI1とSI2の間の尾根上には当該期の遺構は存在せず、広い遺構空白地となっている。段状遺構は丘陵上平坦部から東斜面にかけての傾斜変換部に位置している。ここより東の急斜面地および東斜面下の平坦部には遺構は見られなかった。

### 2 竪穴住居

#### SI1(第72～74図、表30・41・45・46、PL.45・61・62・71)

<位置と調査経過> B7・B8グリッドに位置し、遺構の北端は調査範囲外となっている。遺構付近は丘陵上平坦面の北端部にあっており、この北側は緩斜面となる。付近の標高は60m前後を測る。

本遺構は調査前の段階から深さ20～50cmの掘り鉢状の窪みとして地表面に表れていた。また、事前の試掘調査の際にもこの窪みを狙ったトレンチ調査が行われており、遺構であることは既に確認されていた。このため、この窪地周辺は重機による表土剥ぎを行わず、すべて人力掘削による調査を行うこととした。調査は、表土・包含層の掘り下げ以前に窪地の形態に合わせて土層観察用ベルトを設定し、これに沿って先行トレンチを掘削した。これによって遺構の規模や埋土の堆積状況を確認した後、全面での遺構埋土の掘り下げを行った。

<形態と構造> 遺構の平面形は四角形以上の隅丸多角形と推定でき、全体形は五角形になる可能性が高い。遺構の規模は、遺構上場の最長部で東西6.7m、南北5.2m(検出部分)、床面の最長部で東西5.2m、南北4.8m(同)、床面積は18.9㎡(検出部分。推定21㎡)を測る。遺構検出面からの深さは、最も深い南壁付近で約0.9m、中央部や東壁部で約0.4～0.5mであった。

床面で周壁溝、ピット5基、床溝を確認した。周壁溝は、南壁際の大部分と東壁際の一部を除いた壁際で確認しており、幅約10～20cm、深さ約5～10cmを測る。ピットは支柱穴を4基(P1～P4)、中央ピットを1基(P5)確認している。支柱穴の柱穴間距離は、P1-P2が2.3m、P2-P3が2.9m、P3-P4が2.4mである。なお、P4-P1間の距離は約4mと他と比べて明らかに離れているので、未発掘部分にもう1基支柱穴がある可能性が高い。支柱穴の規模は径約30～40cm、深さ約60～70cmほどである(表30)。これらの埋土は基本的に共通しており、上部に流入土、下部に柱痕の可能性のある⑱層があり、P3・P4には裏込め土の可能性のある⑳層が見られる。中央ピットのP5は断面形が上方に開く掘り鉢形で、径約60～70cm、深さ約40cmを測る。埋土には炭化材・炭化物粒、焼土粒が多く含まれていた。なお、この炭化材の放射性炭素年代を測定した結果、60AD-180AD(91.4%)の暦年較正值が得られた(第5節1参照)。このほか、南壁寄りの床面ではほぼ東西方向に走る床溝を検出している。床溝は、長さ約2.8m、幅15～20cm、深さ約5cmで、底面に深さ4～5

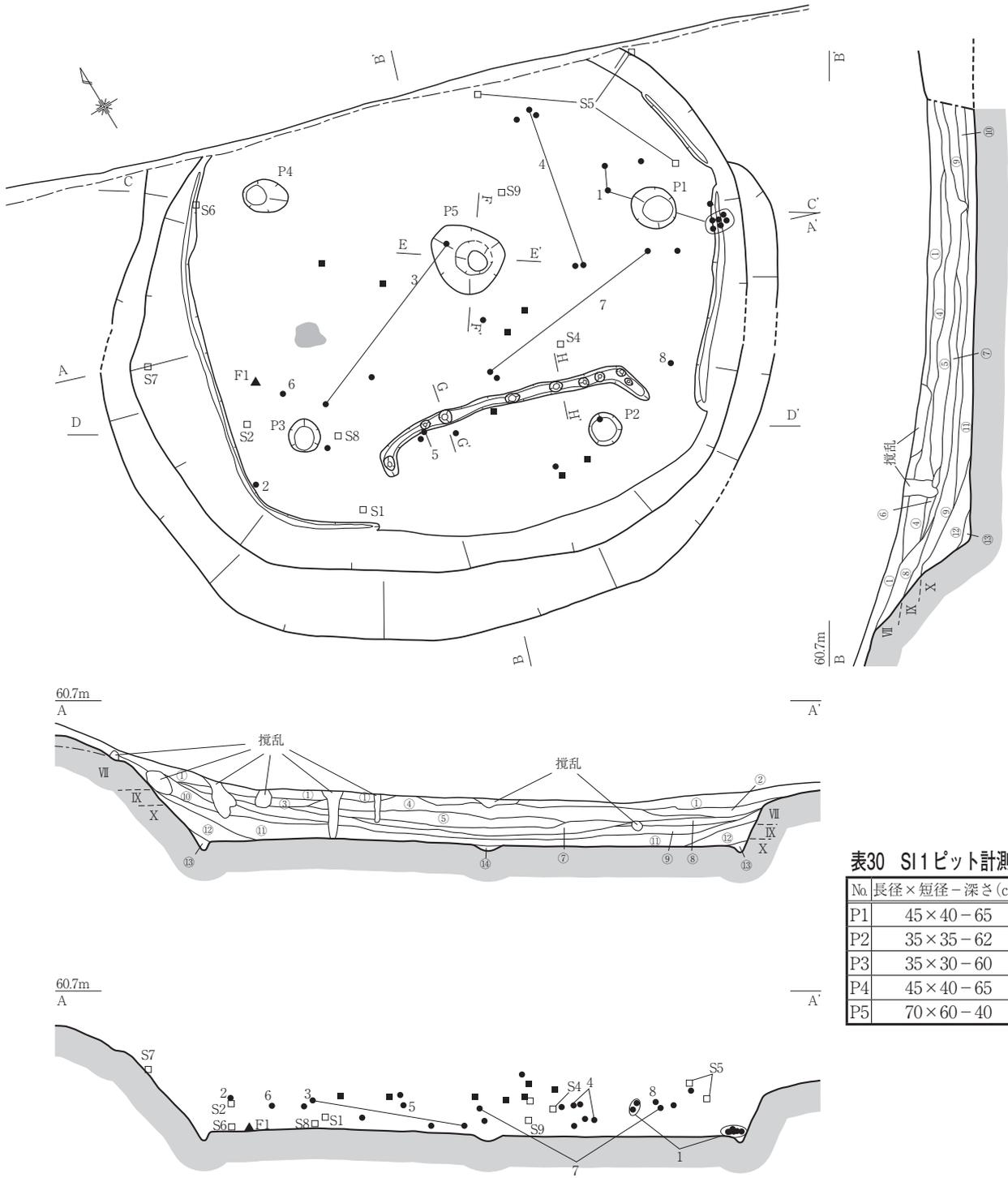
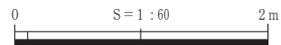


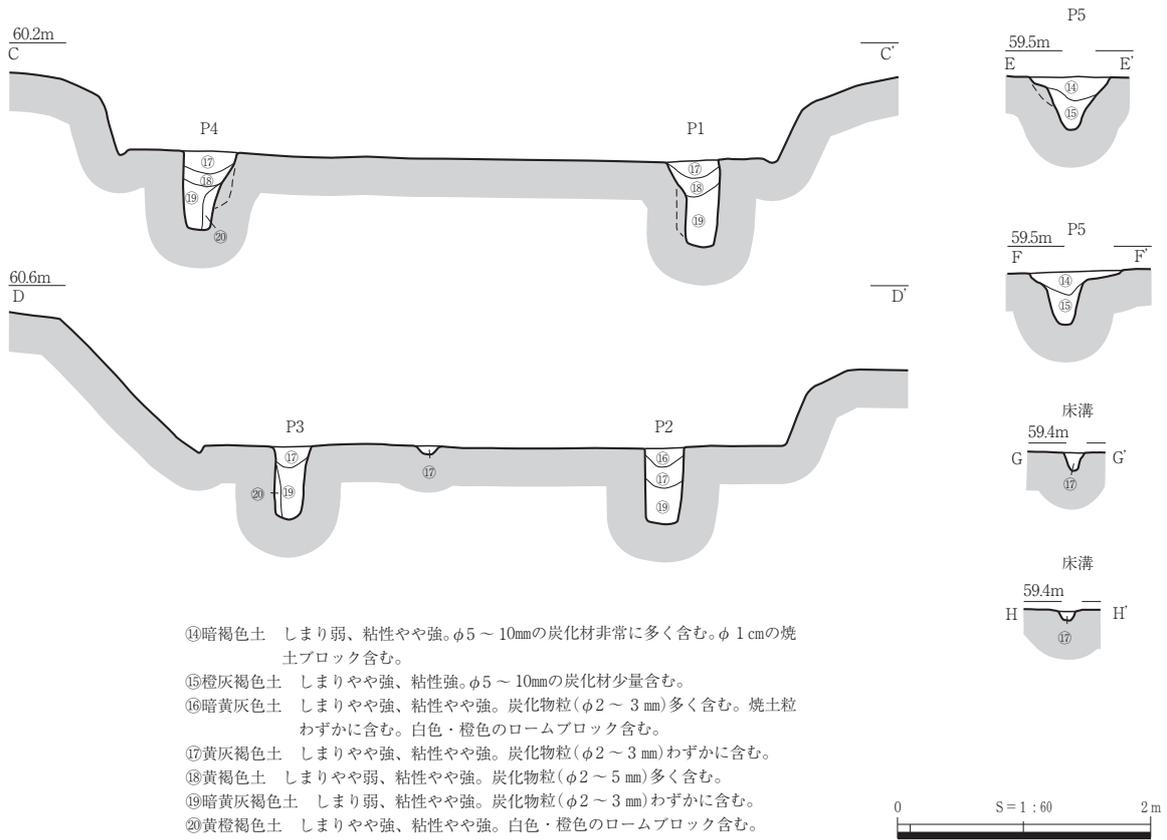
表30 SI1ピット計測表

No.	長径×短径-深さ(cm)
P1	45×40-65
P2	35×35-62
P3	35×30-60
P4	45×40-65
P5	70×60-40

- ①黄橙褐色土 しまりやや強、粘性弱。包含層(II層)に対応、やや赤みが強い色調。
- ②暗黄褐色土 しまりやや強、粘性弱。炭粒(φ2~3mm)少量含む。
- ③暗黄褐色土 しまりやや強、粘性弱。炭粒(φ2~3mm)多く含む。
- ④暗褐色土 しまり弱、粘性やや強。φ2~5mmの炭粒、φ5mm~1cmの焼土粒多く含む。
- ⑤黒褐色土 しまり弱、粘性やや強。φ2mm~1cmの炭化物、φ5mm~1cmの焼土粒非常に多く含む。炭化材含む。
- ⑥暗褐色土 しまり弱、粘性やや強。φ2mm~1cmの炭化物多く含む。φ5mm~1cmの焼土粒少量含む。
- ⑦黒色土 しまり弱、粘性強。φ2mm~1cmの炭化物含む。黒色帯。旧表土状の堆積で土質はきめ細かい。
- ⑧暗褐色土 しまり弱、粘性やや強。φ2~5mmの炭化物多く含む。
- ⑨黄灰色土 しまり弱、粘性強。きめ細かく均質な土質。
- ⑩にぶい黄灰色土 しまり弱、粘性強。きめ細かく均質な土質。マンガン粒含む。
- ⑪橙灰色土 しまり弱、粘性強。φ3mm~5mmの焼土粒少量含む。
- ⑫黄橙褐色土 しまりやや強、粘性強。φ2mm~5mmの炭化物粒含む。
- ⑬黄褐色土 しまり弱、粘性強。φ2~3mmの炭粒少量含む。



第72図 SI1(1)



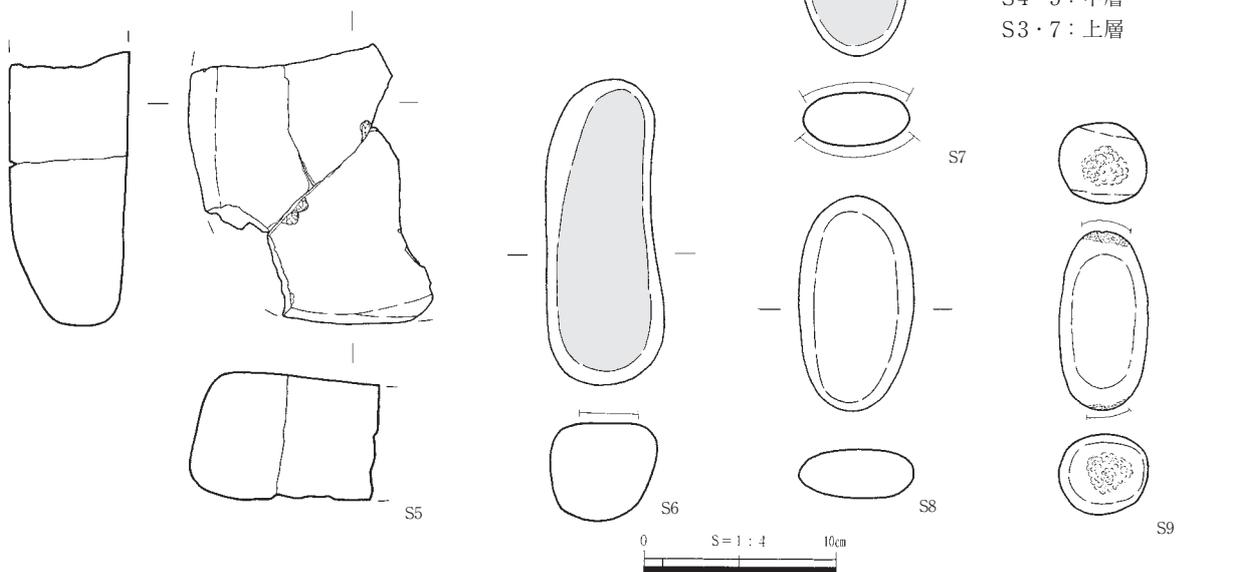
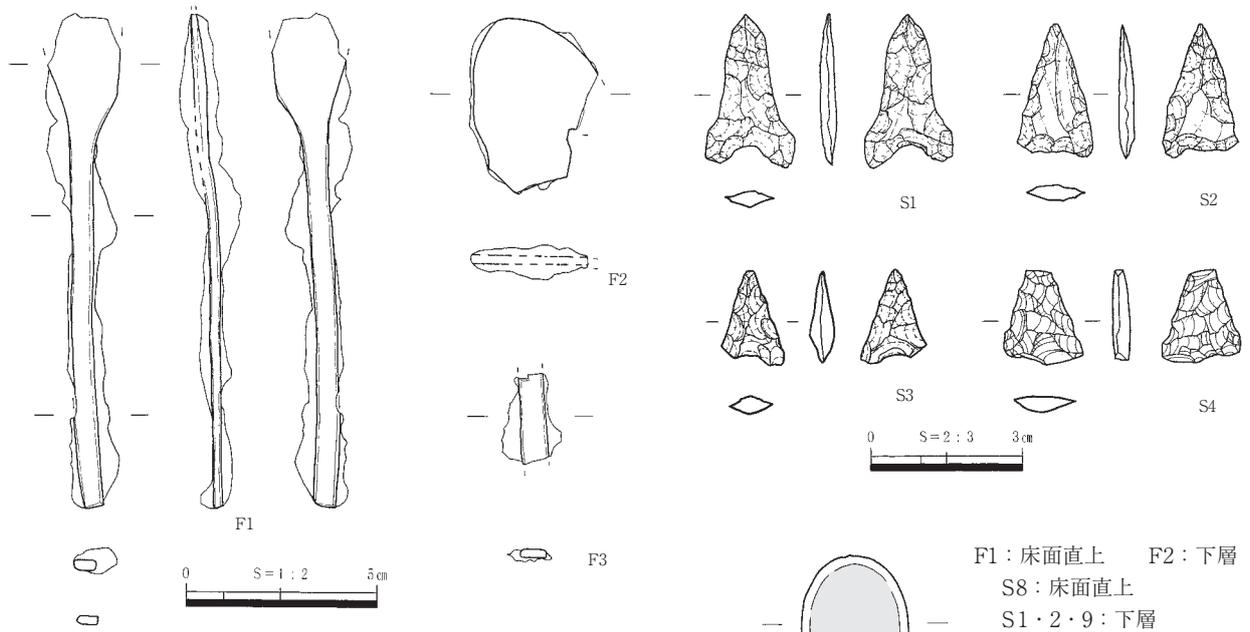
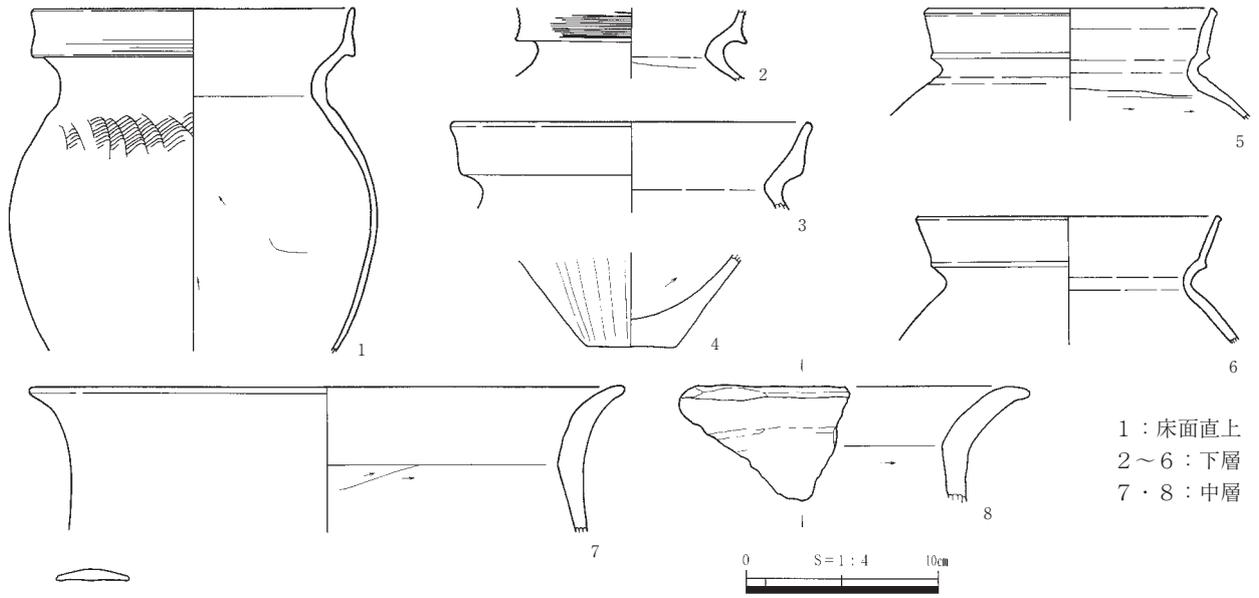
第73図 SI1(2)

cmほどの小ピットを9基掘り込んでいる。この溝や小ピットを用いて構造物が造られていた可能性も考えられる。なお、床溝と平行関係にある南壁際では、これとほぼ同じ長さで周壁溝が途切れていることから、床溝と壁溝との機能上の関連性を考えても良いかもしれない。

<埋土の堆積状況と遺物出土状況> 遺構埋土は大きく3つに分けることができ、下層(⑨層以下)は流入土の自然堆積層、中層(⑦・⑧層)は旧表土と考えられる黒色帯、上層(②～⑤層)は炭化材を多く含んだ人間活動に伴う堆積層およびこれの二次堆積層である。上層は炭化材・炭化物粒、焼土粒を極めて多く含む層で、特に⑤層包含の炭化材は後述する製炭土坑出土の炭化材と類似している。このことから上層は、堆積が一旦安定して表土が発達した段階で、遺構の窪みを利用して炭焼きを行ったか、あるいは近辺で炭焼きを行った際の排土を投げ込んで形成されたと考えている。⑤～⑧層出土の土師器(7・8)からみて、上層の堆積は奈良時代後半以降にあると考えられる。下層は、弥生時代後期および古墳時代前期の土器(2～6)が出土していることから(3のみ⑪層出土。他は⑨・⑩層出土)、この時期以降に堆積したと考えられる。

遺構内から出土した遺物量は少なく、その大半が埋土中の出土である。土器のうち、床面直上で出土したものは比較的残存状態の良い弥生土器甕1のみで、この個体の大半の破片は東壁際の床付近で見つっている。ただし、その多くが埋没した周壁溝上に載っていたので、遺構廃絶直後の原位置を保ったものではない。また、破片の一部が上層からも出土していることや、SK16からも接合する同一個体片が1点出土したことも考え合わせると、遺構外から残存状態の良い個体が初期流入土とともに落ち込んだ可能性が高いだろう。ただし、遺構の時期を判断する上では、この土器が最も有用である。他の床面直上出土遺物には鉄器1点(F1)、磨石2点(S6・S8)がある。

<出土遺物> 1～3は弥生土器甕で、いずれも清水編年V-3期(後期後葉)のものである。4は弥



F1: 床面直上 F2: 下層  
S8: 床面直上  
S1・2・9: 下層  
S4・5: 中層  
S3・7: 上層

第74図 SI 1 出土遺物

生土器底部で、調整・胎土からみて1～3と同時期のものの可能性が高い。5・6は古墳時代前期の土師器甕、7・8は奈良時代後半頃の土師器甕である。F1は一端に刃部をもつ細長い棒状鉄製品で、柄部が非常に薄いつくりだが、鉈と考えている。F2は床付近で出土した不明板状鉄製品で、板状鉄斧片の可能性などが考えられる。F3は工具などの柄部と思われる不明棒状鉄製品である。S1～S4は石鏃で、S4のみ黒曜石製、他はサヌカイト製である。S5～S9は安山岩の自然礫利用の礫石器で、S5は破片となって出土した台石、S6～S8は磨石、S9は敲石である。

本遺構は出土土器などから見て、弥生時代後期後葉頃に廃絶し、埋没し始めたものと考えられる。

## SI2 (第75～77図、表31・41・46、PL.46～48・62)

<位置と調査経過> 丘陵上平坦面南部のF8・F9グリッドの尾根頂部に立地し、付近の標高は約62mを測る。本遺構の約2m南にはSI3が位置する。

本遺構もSI1と同じく、調査前から最大約40cmの深さのある掘り鉢状の窪みとして地表面に表れていた。調査方法もSI1同様、表土・包含層の掘り下げ以前に土層観察用ベルトを設定した後、先行トレンチを掘削した。その際埋土下層で大量の炭化材を検出したことから、焼失住居であることが判明し、これらの炭化材を残しながら埋土を掘り下げた。

<形態と構造> 遺構の平面形は円形に近い隅丸方形で、遺構上場の最長部で東西4.6m、南北4.5mを測る。床面積は8.5㎡である。遺構検出面からの深さは、最も深い南壁付近で約1m、中央部や北壁部では約0.6～0.7mであった。

床面で周壁溝、ピット5基、小ピット2基を確認した。周壁溝の規模は幅15cm～30cm、深さ約5cmで、壁際を一周せず4箇所途切れている。ピットは支柱穴と考えられるものを4基(P1～P4)、中央ピットを1基(P5)確認している。支柱穴はいずれも床面隅にかなり寄った位置にあり、これらの柱穴間距離はいずれも2.2mで揃う。支柱穴の規模は径約30～40cm、深さ約50～70cmほどである(表31)。P1～P4の土層はいずれも共通しており、中央に柱痕と考えられる⑬層が、その周りに裏込め土と考えられる⑭層が見られる。なお、P4上からは柱材と考えられる径15cm前後の丸木の炭化材が立った状態で検出されている。この柱材と⑬層は位置、大きさともに合致することから、⑬層が柱痕であることは確実であろう。中央ピットのP5は上面径約60cm、深さ約40cmを測る。埋土には炭化材・炭化物粒、焼土粒が多く含まれていた。このほか、P5の西側で南北に並ぶ径15cm前後の小ピットを2基確認した。これらと支柱穴は規則的な配置関係にあるように見える。

<埋土の堆積状況> 遺構埋土は大きく2つに分けられ、上層(⑫～⑬層)は流入土の自然堆積層、下層(⑭～⑱層)は火災によって上屋構造材が崩落することで形成された堆積層と判断した。このうち、⑰層は炭化材および土壌化した炭化物に焼土ブロックが混ざる土層で、上屋の植物質部材が焼け崩れたものと考えている。この上に被る⑭・⑮層は焼土を多く含んでいること、中央で厚く堆積することなどから、屋根に葺かれた土が焼けながら崩落したものと考えている。特に、ドーナツ状に分布する⑭層は焼土ブロックのみで構成されているので、強く受熱して焼けた部分と考えている。

<遺物・炭化材検出状況> 木材の形態を留めた炭化材は、各支柱穴間に集中してドーナツ形の平面分布を見せており、そのほとんどが床面からわずかに浮いて出土した。材の形態が分かったものほとんどは丸太材で、一部に板材も見られる。丸太材は径10cm未満の細いものがほとんどで、わずかに径15cm前後の大型材がある。板材は概して遺存状態が悪く、大きさを知りうる資料はないが、その厚

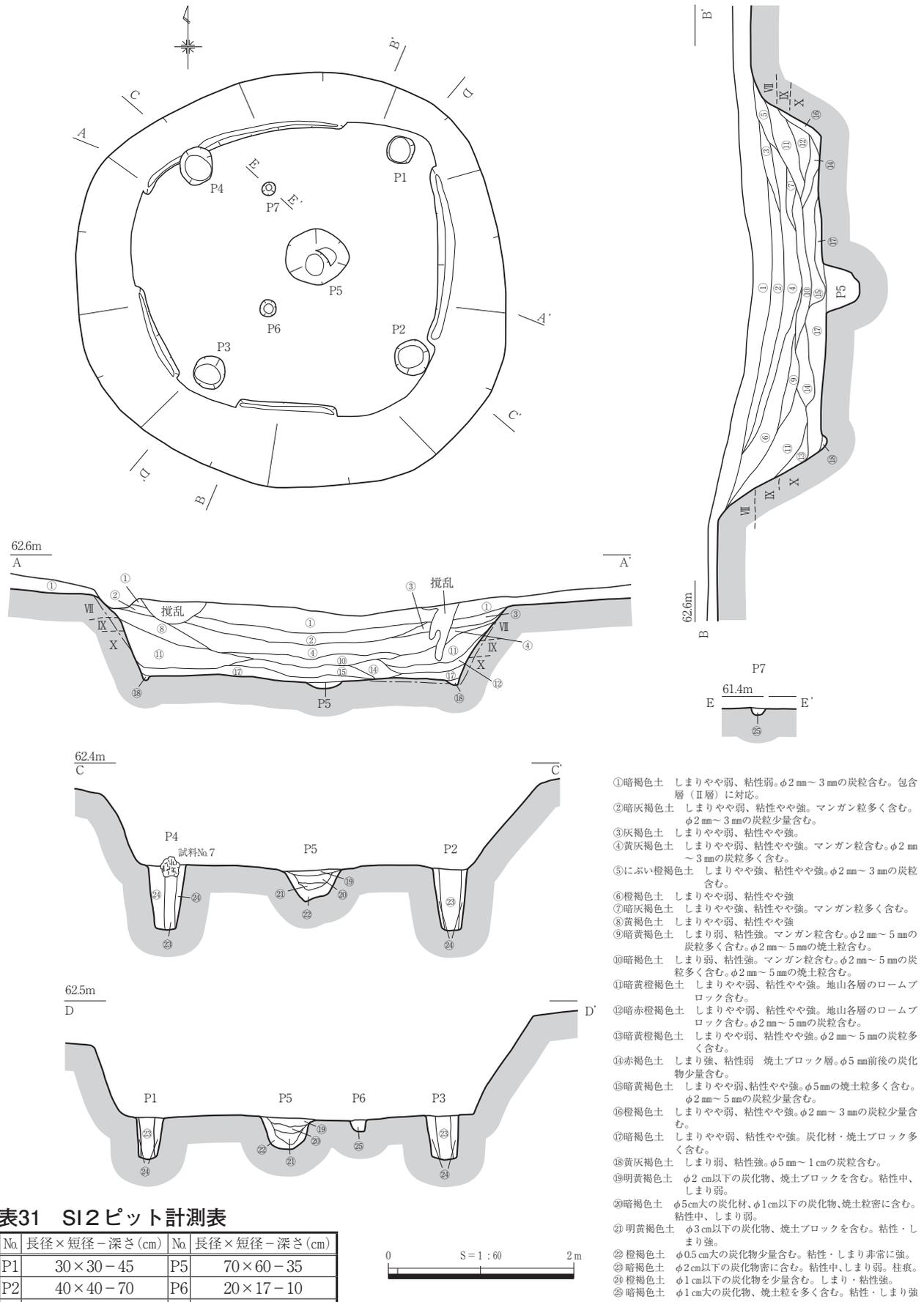
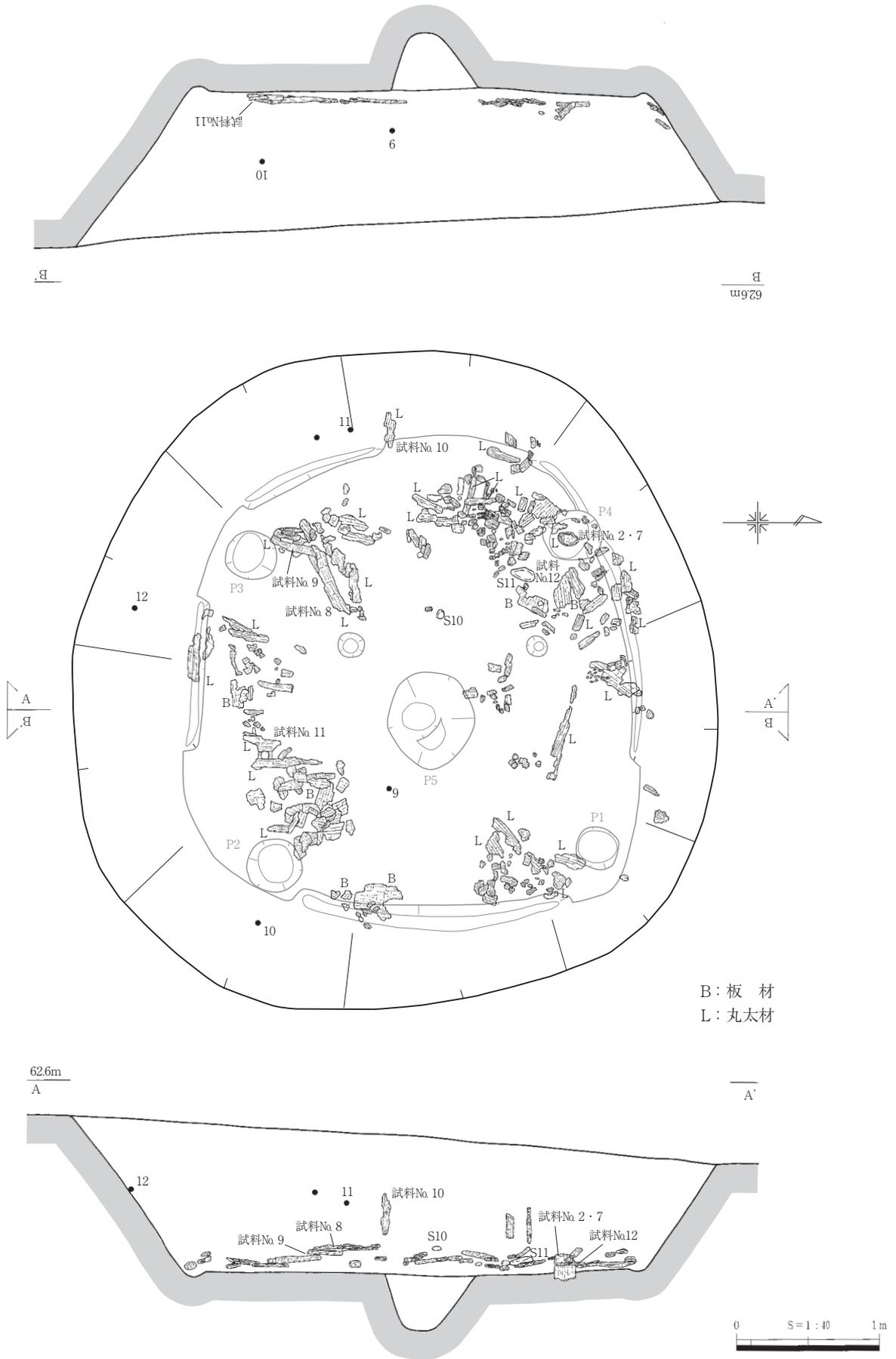


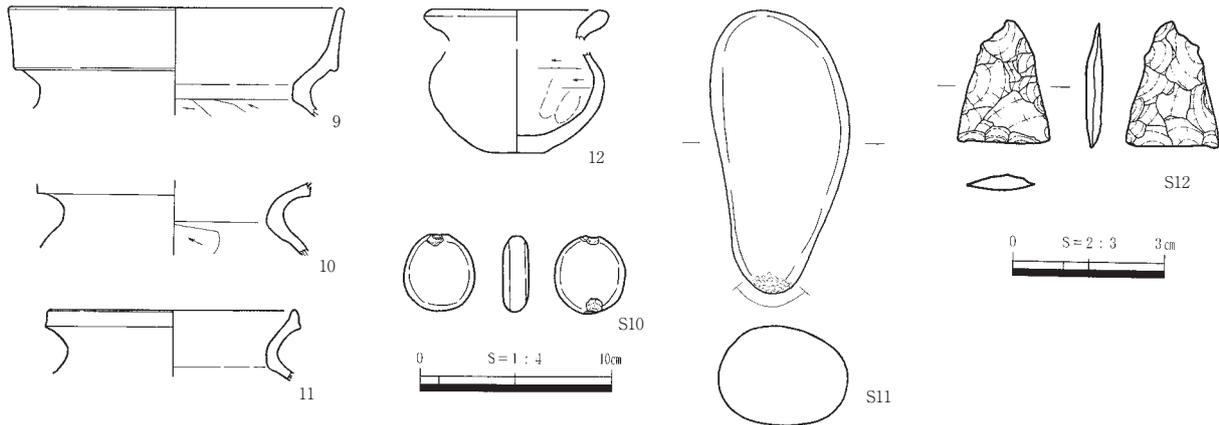
表31 SI2ピット計測表

No.	長径×短径-深さ(cm)	No.	長径×短径-深さ(cm)
P1	30×30-45	P5	70×60-35
P2	40×40-70	P6	20×17-10
P3	35×35-50	P7	16×14-7
P4	40×35-70		

第75図 SI2



第76図 SI2炭化材検出状況



第77図 SI 2 出土遺物

さはいずれも1cm前後であった。これらのうち、上屋部位が推定できるものは、先述のP 4上の主柱材以外には確実なものはほとんどないが、中央部から壁に向かって放射状に向く丸太材は、壁に倒れ掛かった状態で検出したものもあることから、その多くが垂木材であると考えている。ほかに柱穴を結ぶ軸線上で見つかった丸太材もあり、これは桁梁材の可能性が考えられる。板材はわずかししか検出しておらず、遺存状態も悪いため部位を特定しうる状態にはない。これらの材のなかで状態の良いものを用いて樹種同定を行った結果によると、P 4柱材(試料No.7)がクスノキ、壁に倒れかかった垂木材(試料No.10)がクワ属、板材(試料No.12)がスギと判定された。その他(試料No.8・9・11)は、サイズや検出状況の異なったものを含んでいるが、すべてシノキ属であった(第5節2参照)。なお、調査地近隣で現在見られる雑木林内には、これらの樹種すべてが自生している。

出土遺物は極めて少なく、大半が埋土中の出土である。土器には床面直上で出土したものはなく、石錘S 10と敲石S 11のみが床面直上で出土した遺物である。土器のうち弥生土器甕口縁部片2点(9・10)は土屋根崩落土と想定している⑭層からの出土である。他に図化した土器(11・12)はいずれも自然流入土のうち初期に堆積した⑪層からの出土である。床面直上出土の遺物がほとんどないことから、本遺構は焼失する前に既に廃絶しており、その際には「片付け」が行われて生活用具の一切が搬出されていたと考えられる。あるいは廃絶に際して故意に上屋を燃やした可能性もあろう。

<出土遺物> 9～11は弥生土器の甕でいずれも後期のものである。最も遺存状態の良い9は口縁部外面の調整が風化のためまったく不明ながら、形態から見て清水編年V-3期と考えられる。12は小形の壺。口縁は単純口縁で「く」の字に強く外反しており、内面は頸部までケズリによって調整される。これも弥生時代後期のものであろう。

本遺構の時期は、9・10が遺構構築時に土屋根に混入したと考えれば、遺構構築時が弥生時代後期後葉以降となる。これが崩落過程で混入したと考えれば、遺構の廃絶時期が弥生時代後期後葉以降となる。いずれの場合でも、遺構内の土器が弥生時代後期のものに限られること、遺構周辺で比較的多数出土した土器もすべて弥生時代後期後葉であること(p.126参照)を考えると、本遺構の機能した時期は弥生時代後期後葉の可能性が高いと考えられる。なお、P 4柱材を用いた放射性炭素年代測定では、この想定と整合する50BC-60AD(95.4%)の暦年較正值が得られている(第5節1参照)。

### SI 3 (第78～80図、表32・41・46、PL.49・63)

<位置と調査経過> 丘陵上平坦面南端部F 8・9、G 8・9グリッドの、尾根頂部に位置する。付

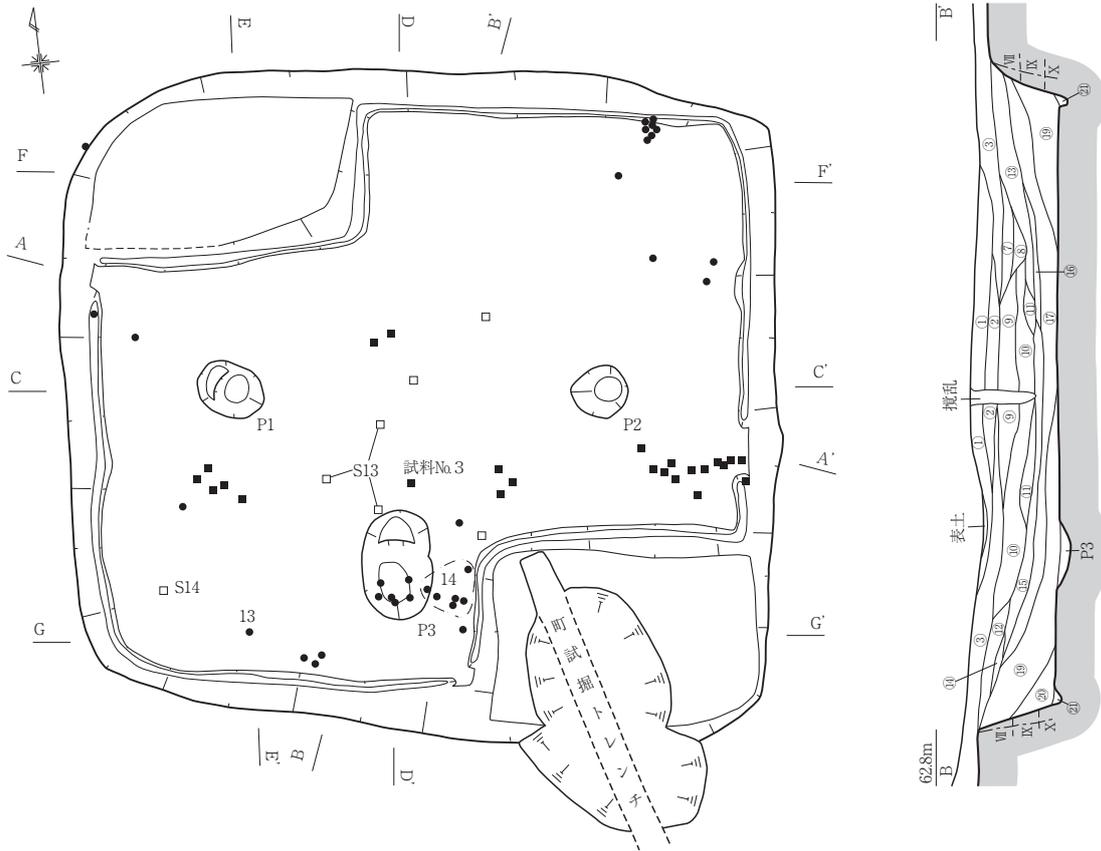
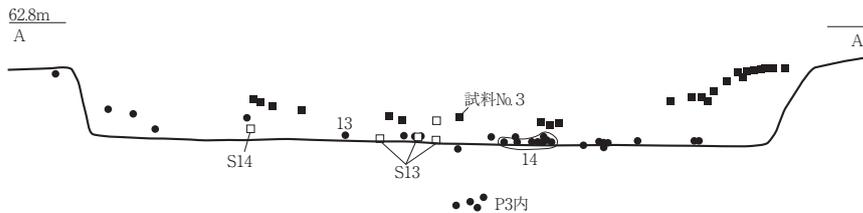
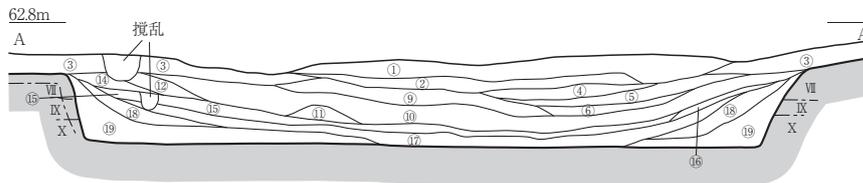
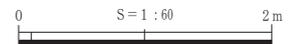


表32 SI3ピット計測表

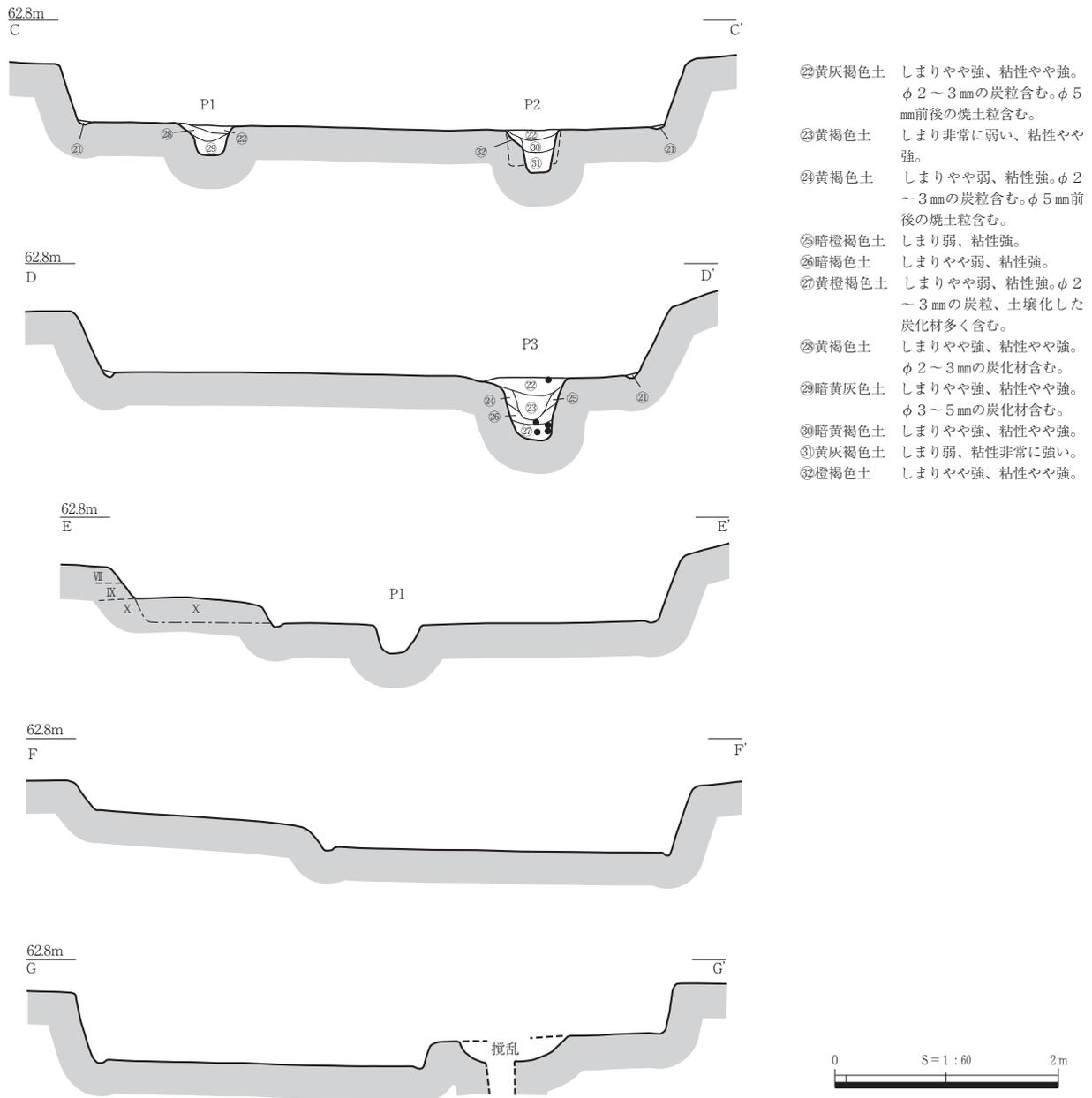
No.	長径×短径-深さ(cm)
P1	55×40-25
P2	45×40-38
P3	85×55-55



- ①赤褐色土 しまり弱、粘性やや弱。上げ土。攪乱(炭窯)に伴うものか。
- ②黄褐色土 しまり弱、粘性やや弱。上げ土。攪乱(炭窯)に伴うものか。
- ③暗黄褐色土 しまりやや弱、粘性やや弱。包含層(II層)に対応。
- ④暗黄褐色土 しまりやや弱、粘性やや弱。包含層に近似。
- ⑤暗橙褐色土 しまりやや弱、粘性やや弱。
- ⑥暗灰褐色土 しまりやや弱、粘性やや弱。φ2~3mmの炭粒少量含む。
- ⑦暗灰褐色土 しまりやや弱、粘性やや弱。φ2~5mmの炭粒、φ5mmの焼土粒多く含む。
- ⑧暗灰褐色土 しまりやや弱、粘性やや弱。φ2~5mmの炭粒、φ5mmの焼土粒多く含む。⑦層より暗い。
- ⑨暗褐色土 しまり弱、粘性やや弱。φ2~5mmの炭粒、φ2~5mmの焼土粒多く含む。
- ⑩暗褐色土 しまり弱、粘性やや弱。φ2~10mmの炭粒・炭化材、φ3~10mmの焼土粒・焼土ブロック非常に多く含む。⑨層より暗い。
- ⑪明赤褐色土 しまり弱、粘性弱。焼土ブロック層
- ⑫暗褐色土 しまりやや強、粘性やや弱。
- ⑬暗黄褐色土 しまりやや弱、粘性やや強。
- ⑭黄灰褐色土 しまり弱、粘性強。きめ細かく均質な土質。
- ⑮黒褐色土 しまり弱、粘性強。きめ細かく均質な土質。黒色帯。旧表土状堆積。
- ⑯暗灰褐色土 しまり弱、粘性強。⑮層と同じ土質で、黒色が薄い土層。
- ⑰黄灰褐色土 しまり弱、粘性強。マンガン多く含む。きめ細かく均質。
- ⑱黄褐色土 しまりやや強、粘性やや強。
- ⑲黄橙褐色土 しまりやや強、粘性やや強。ロームブロック含む。
- ⑳黄橙褐色土 しまりやや強、粘性強。ロームブロック含む。
- ㉑黄灰色土 しまり弱、粘性強。φ3~5mmの炭化物多く含む。ホーキ・AT火山灰ブロックを含む。



第78図 SI3(1)



第79図 SI3 (2)

近の標高は62.5m前後を測る。本遺構の北2mにSI2があるほか、遺構の北側の肩がSK20にわずかに切られている。なお、遺構南東部には近年の炭焼き窯と考えられる大きな攪乱坑がある。

本遺構もSI1・2同様、調査前から平均20cm前後の深さのある窪地として地表面に表れていた。調査方法も同じく、表土・包含層の掘り下げ以前に土層観察用ベルトを設定した後、先行トレンチによって埋土の堆積や遺構規模を確認し、全面の掘り下げを行った。

<形態と構造> 遺構の平面形は東西5.6m、南北5.2mの方形で、床面積は23.0㎡（高床部含む）を測る。遺構検出面からの深さは0.5m前後である。

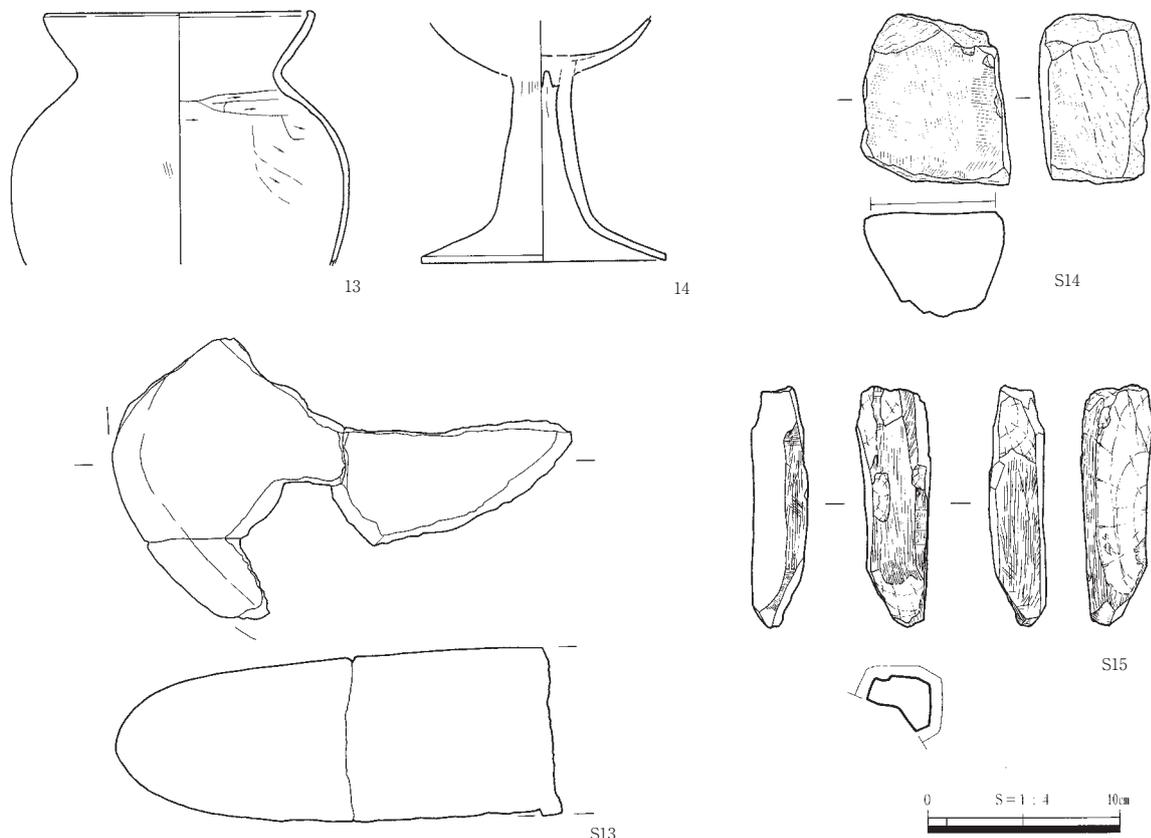
床面は地山X層の削り出しで、硬化した範囲などは確認していない。この面で、高床部（いわゆるベッド状遺構）、周壁溝、ピット3基を確認した。高床部は、床面の北西隅と南東隅の2ヶ所において、点对称の関係になっている。両者とも地山X層の削り出しで造られており、規模もほぼ同じで、東西長約2m、南北幅1～1.3m、高さ20～25cmを測る。周壁溝は、北西隅と南東隅では壁際ではなく高床部の内側をめぐる、数ヶ所で短く途切れるものの、ほぼ一周する。P1・P2は支柱穴と考えられ

るもので、径は50cm前後、深さは約25～35cmで、柱穴間距離は2.9mである(表32)。いずれも明確な柱痕は確認できなかった。P3は主柱穴の倍ほどの深さのあるピットで、南壁寄りの中央部で検出した。埋土下層に炭化材、焼土粒を多く含んでいた。

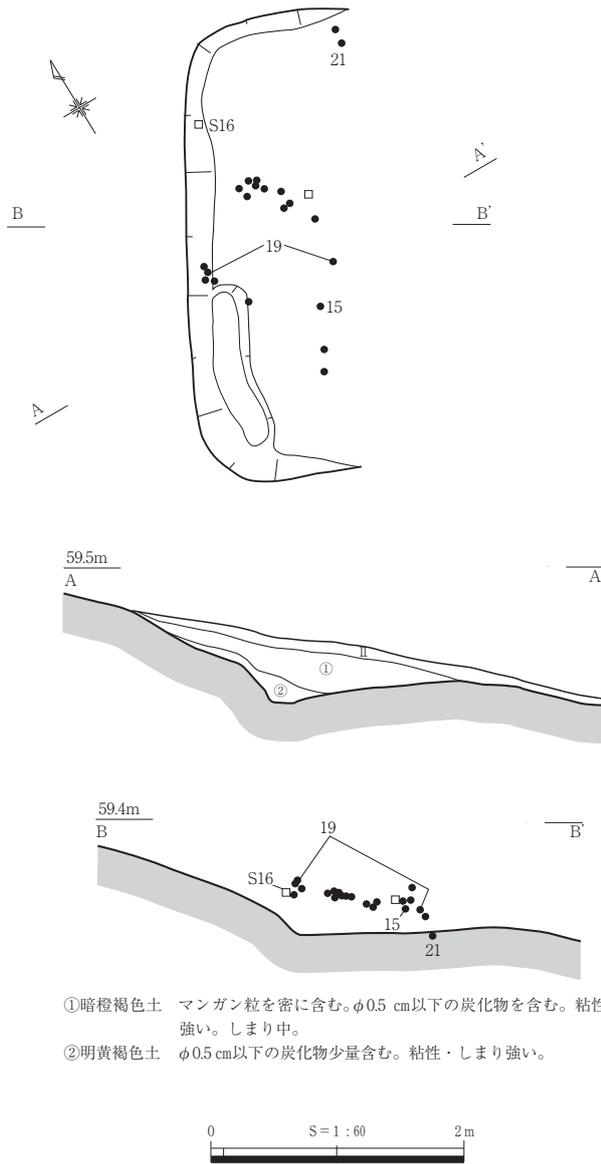
<埋土の堆積状況と遺物出土状況> 遺構埋土はSI1の埋土堆積状況と極めて類似している。これを大きく3つに分けると、下層(⑰層以下)は自然流入土の堆積層、中層(⑫～⑯層)は旧表土と考えられる黒色帯とその後に堆積した自然流入土、上層(⑤～⑪層)は炭化材を多く含んだ人間活動に伴う堆積層およびその二次堆積層である。上層は炭化材・炭化物粒、焼土ブロック・焼土粒を極めて多く含む層で、特に⑩層からはSI1と同様の炭化材が多く見つかったほか、堆積状況もSI1に近似する。したがって、これらはSI1と同様、製炭に関連して形成されたと考えており、特に⑩層が焼土の単純層であることから、この場所で炭焼きを行った可能性が高いと考えている。なお、⑩層出土の炭化材は放射性炭素年代測定を行っており、その結果、990AD-1050AD(67.7%)の暦年較正值を得ている(第5節1参照)。

遺構内から出土した遺物は少ないものの、大半が床面直上での出土であった。ただし、ほとんどが土器小片で、帰属時期の分かる遺物は限られる。土師器甕13は全形の2分の1ほどが残る良好な個体で、南壁際付近の床面上で見つかったほか、土師器高坏14の破片がP3と南東高床部の間の床面上で出土した。石器は、台石S13の破片が床中央部で出土したほか、砥石S14・S15が埋土下層から出土している。

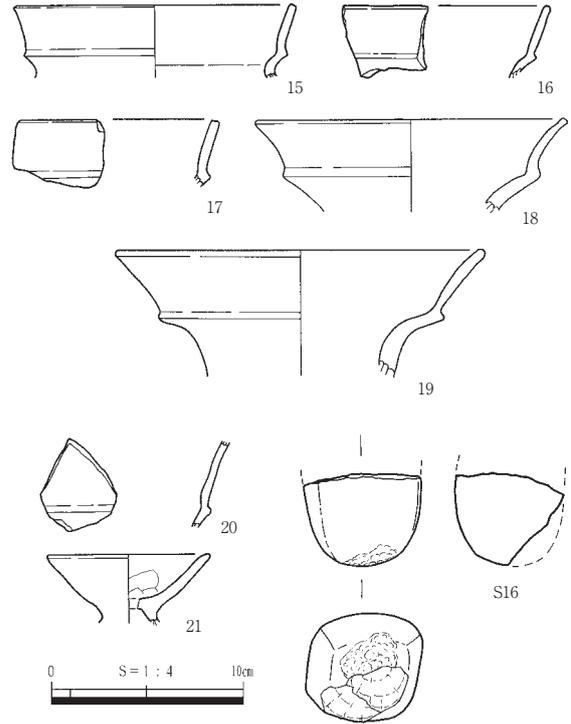
<出土遺物> 13は土師器甕で、単純口縁の布留系甕である。14は土師器高坏で、坏部の大半を欠くが、残存部分の立ち上がりからは碗形に近い坏部が想定できる。いずれも天神川編年Ⅲ～Ⅳ期頃のものと考えており、古墳時代前期中葉～後葉に比定される。S13は安山岩製の台石、S14は細粒花崗岩



第80図 SI 3 出土遺物



第81図 SS 1



第82図 SS 1 出土遺物

製の砥石、S15は流紋岩質凝灰岩製の砥石である。

本遺構は出土土器から見て、古墳時代前期中葉～後葉に廃絶し、埋没を始めたものと考えられる。

### 3 段状遺構

#### SS 1 (第81・82図、表41・46、PL.50・64)

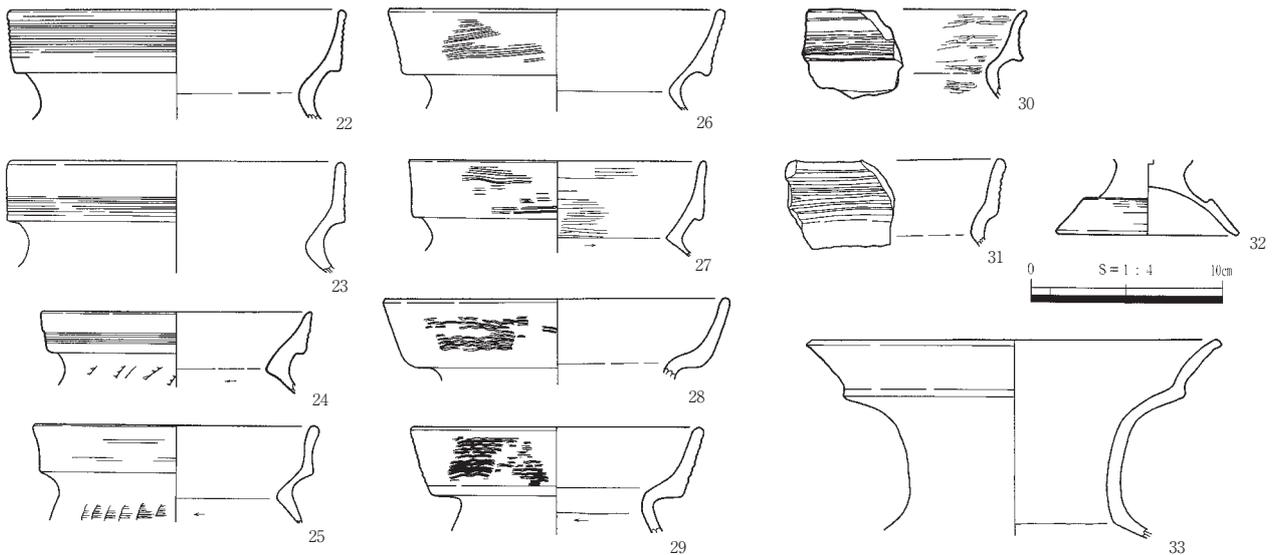
丘陵上平坦面の東側肩部にあたるE 6グリッドに位置する。周辺は東に下る緩斜面地で、標高は約58.5mを測る。遺構南肩の一部をSK16に切られる。

本遺構は緩斜面を「コ」の字形に段切りして形成しており、長さ3.2m、幅1.3mの方形プランをもつ。検出面からの深さは西側壁際で30～40cmほどである。底面には西壁際の南半部に深さ10cmほどの壁溝が見られる。埋土はすべて自然堆積で、西側の丘陵上方からの流入によるものであろう。

遺物は、古墳時代前期中葉から後葉にかけての土師器甕15～17、土師器壺18・19、直口壺20などが、遺構検出面から①層にかけて出土している。このほかの図化していない破片もほぼすべてが古墳時代前期のものである。弥生土器低脚坏21は唯一の底面直上出土遺物で、後期後葉のものと思われる。ほかに、安山岩製敲石S16が遺構検出面から出土している。

本遺構は、土器の出土状況から見て、古墳時代前期以降にほぼ完全に埋没している。底面直上出土の21を積極的に評価すれば、遺構の時期を弥生時代後期後葉と考えてもよいかもしれない。ただし、包含層にほとんど遺物を含まない本遺跡にあって、これだけまとまった量の古墳時代土師器が遺構と無関係とは考えにくい。あるいは埋没過程で土器が投棄されたのであろうか。

遺構の機能していた時期は判然としないが、弥生時代後期後葉～古墳時代前期のものと考えておく。



第83図 遺構外出土遺物(弥生時代～古墳時代)

#### 4 遺構外の遺物(第83図、表41・42、PL.64・65)

包含層出土の弥生時代～古墳時代の土器は、ほとんどが丘陵上平坦部からの出土である。図示したもので丘陵上平坦部以外から出土したものは、東斜面平坦部から出土した32のみである。

22～31は弥生土器甕で、いずれも清水編年V－3期にあたり、後期後葉に属するものである。このうち、22・23・28・29はSI2周辺からの出土である。32は弥生土器高坏脚部で、これも後期後葉のものである。33は土師器壺で、古墳時代前期後葉のものである。

### 第3節 古代の調査成果

#### 1 概要

古代の遺構には、掘立柱建物1棟(SB1)、段状遺構5基(SS2～SS6)、土坑17基(SK1～SK17)がある(第71図)。これらの遺構は丘陵上平坦部と東斜面部・平坦部に分かれて立地しており、前者には掘立柱建物1棟と土坑16基が、後者には段状遺構5基と土坑1基がそれぞれ立地している。

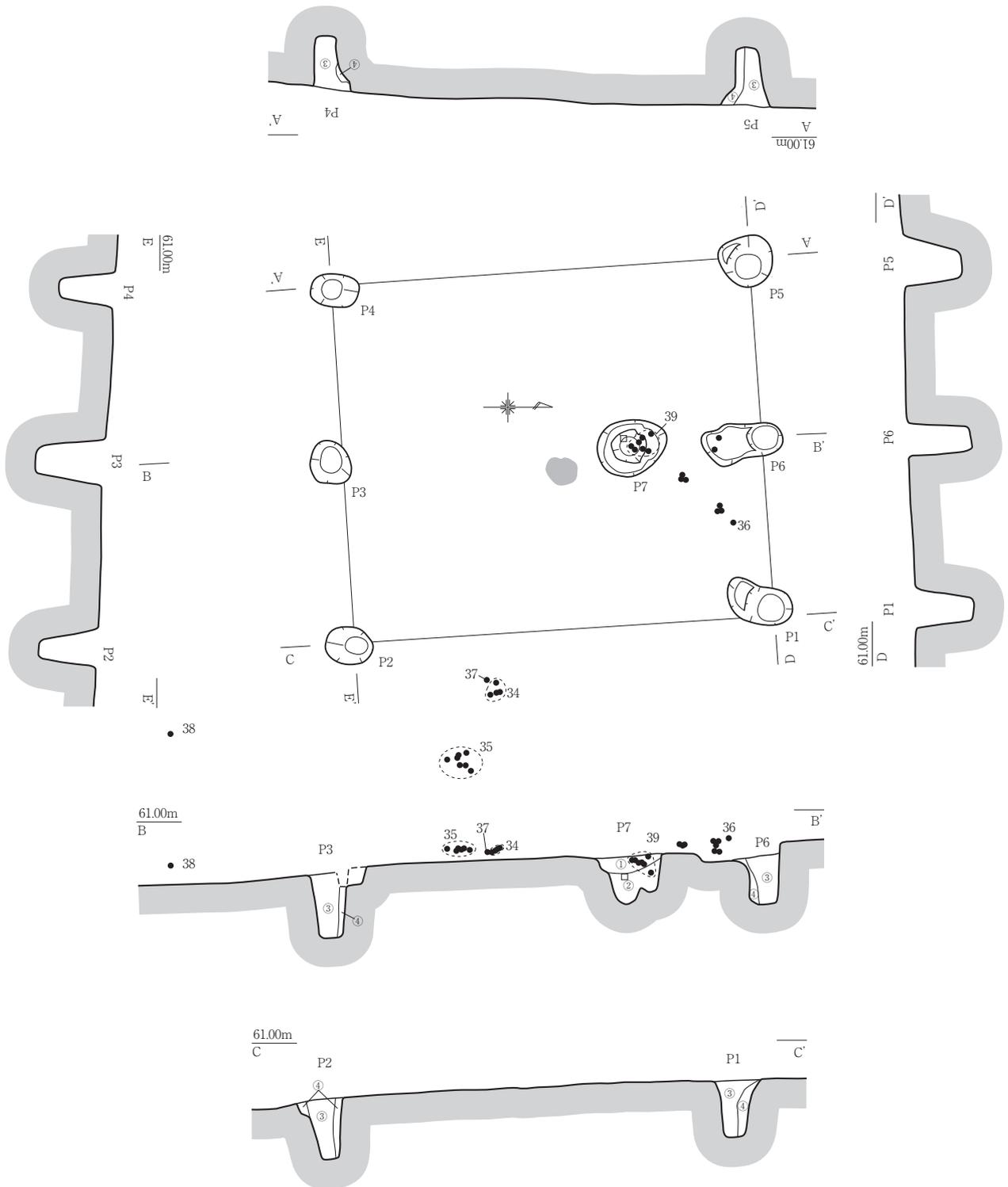
丘陵上平坦面では、尾根筋に沿って並ぶように土坑が展開しており、尾根頂部からいくらか東に下った平坦面に掘立柱建物が位置する。このほか、一部の土坑が平坦面東端部の斜面肩付近に位置している。

東斜面部では調査地南端部に段状遺構が3段にわたって並んでおり、上段に掘立柱建物をともなう段状遺構が2基(SS2・SS3)、中段に掘立柱建物をともなう段状遺構が1基(SS4)、下段に切り合い関係をもつ段状遺構が2基(SS5・SS6)位置している。また、東斜面下の平坦面には土坑が1基のみ見られる。

#### 2 掘立柱建物

##### SB1(第84・85図、表33・42、PL.51・66)

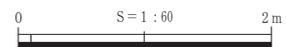
丘陵上平坦面の中央部東寄りにあたるD7グリッドに位置する。周辺の標高は約60.5mを測る。SB1-P4の南1mの位置に、試掘時に調査されたピットが1基ある。



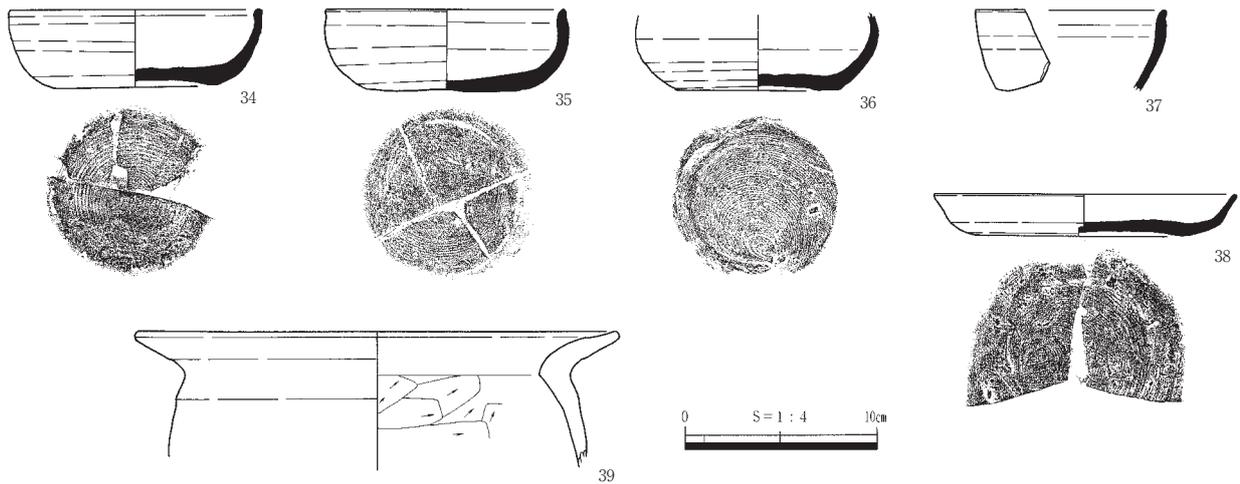
- ①灰褐色土 φ1cm以下の炭化物含む。粘性、しまり弱い。
- ②暗褐色土 しまり弱、粘性強。
- ③暗灰褐色土 φ1cm以下の炭化物含む。粘性、しまり弱い。
- ④明黄褐色土 φ0.5cm以下の炭化物少量含む。粘性、しまり弱い。

表33 SB1ピット計測表

No.	長径×短径-深さ(cm)
P1	70×40-50
P2	48×40-62
P3	45×45-70
P4	50×35-55
P5	55×52-57
P6	75×33-63
P7	70×55-45



第84図 SB1



第85図 SB 1 出土遺物

本遺構は、D 7 グリッドの包含層の掘り下げ中に遺存状態の良い須恵器が数個体出土したことから、IV層上面で精査を行い、方形に並ぶピット 6 基とこれと関連すると思われるピット 1 基を確認した。

遺構の規模は、桁行 1 間×梁間 2 間で、西桁行 4.15m、北梁間 3.5m である。主軸方向は N - 3° - W である。P 1 ~ P 6 は柱穴で、径 30 ~ 50cm、深さ 55 ~ 65cm と、いずれもほぼ同規模である。埋土は共通しており、柱痕の可能性が高い③層と、裏込め土と思われる④層から構成される。P 6 の南に位置する P 7 は、柱穴以外の機能が考えられ、径 55×70cm、深さ約 45cm のやや不整形を呈している。埋土は自然堆積層と考えており、古代の土師器片を多く含んでいた。P 7 のすぐ南には床面が被熱して赤化した範囲がある。このことから、この掘立柱建物は土間床で、中央に火処をもっていた可能性が考えられる。なお、SB 1 - P 4 の南に位置するピット (P 1・第 71 図参照) は、西桁の延長線上に位置し、その規模も SB 1 柱穴に近いことから (径 45×40cm・深さ 42cm・底面標高 60.015m)、SB 1 に関連する柱穴の可能性がある。

遺物は、須恵器 34 ~ 38 が床面から 10cm 程度浮いた状態で II 層中から出土したほか、P 7 内から土師器甕 39 が出土している。34 ~ 37 は須恵器坏身、38 は須恵器皿で、34 ~ 36・38 は底部に回転糸切り痕が残る。これらの出土遺物から、本遺構は 8 世紀後半のものと考えられる。

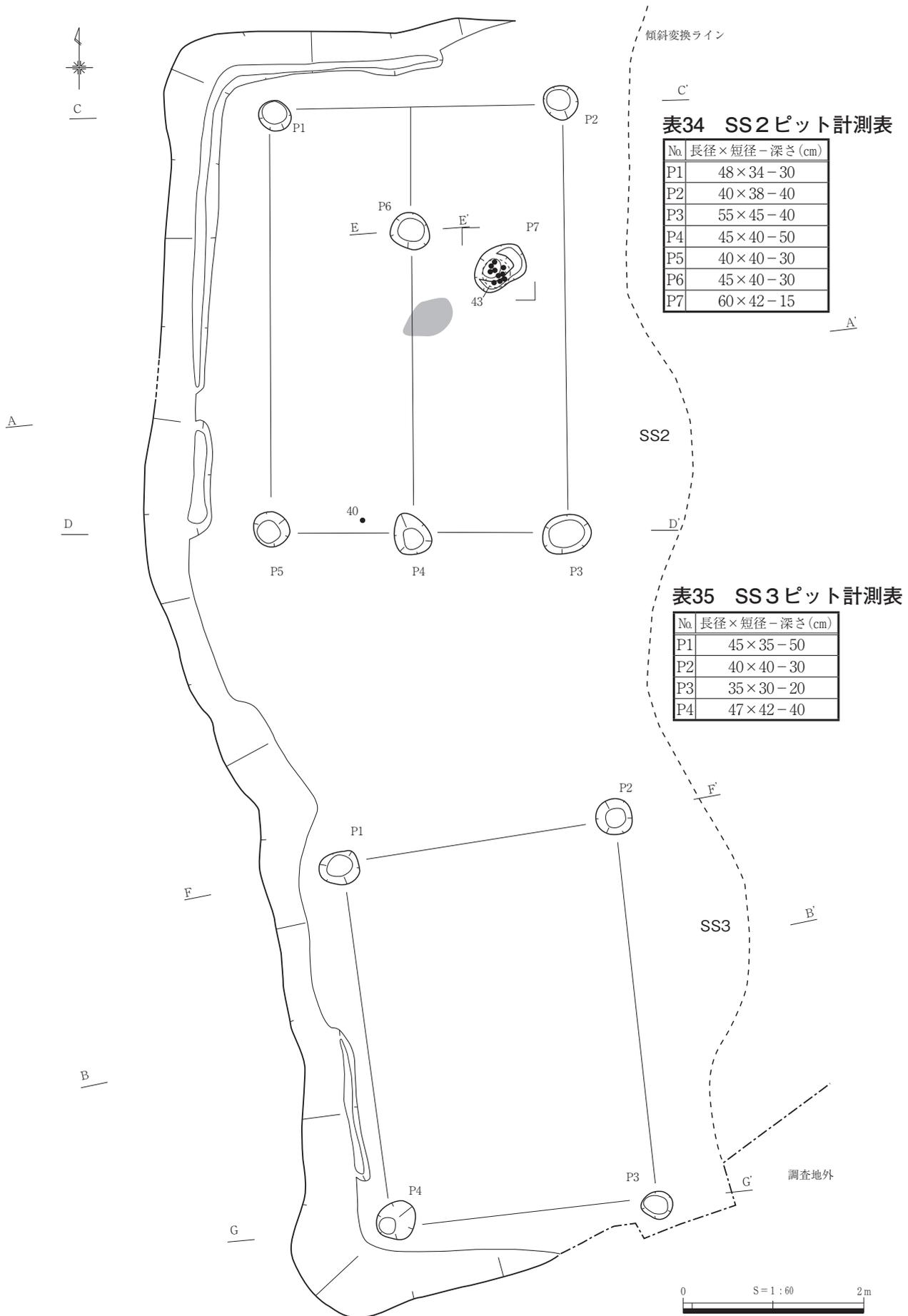
### 3 段状遺構

#### SS 2・SS 3 (第 86 ~ 88 図、表 34・35・42・43・46、PL.51・67・68)

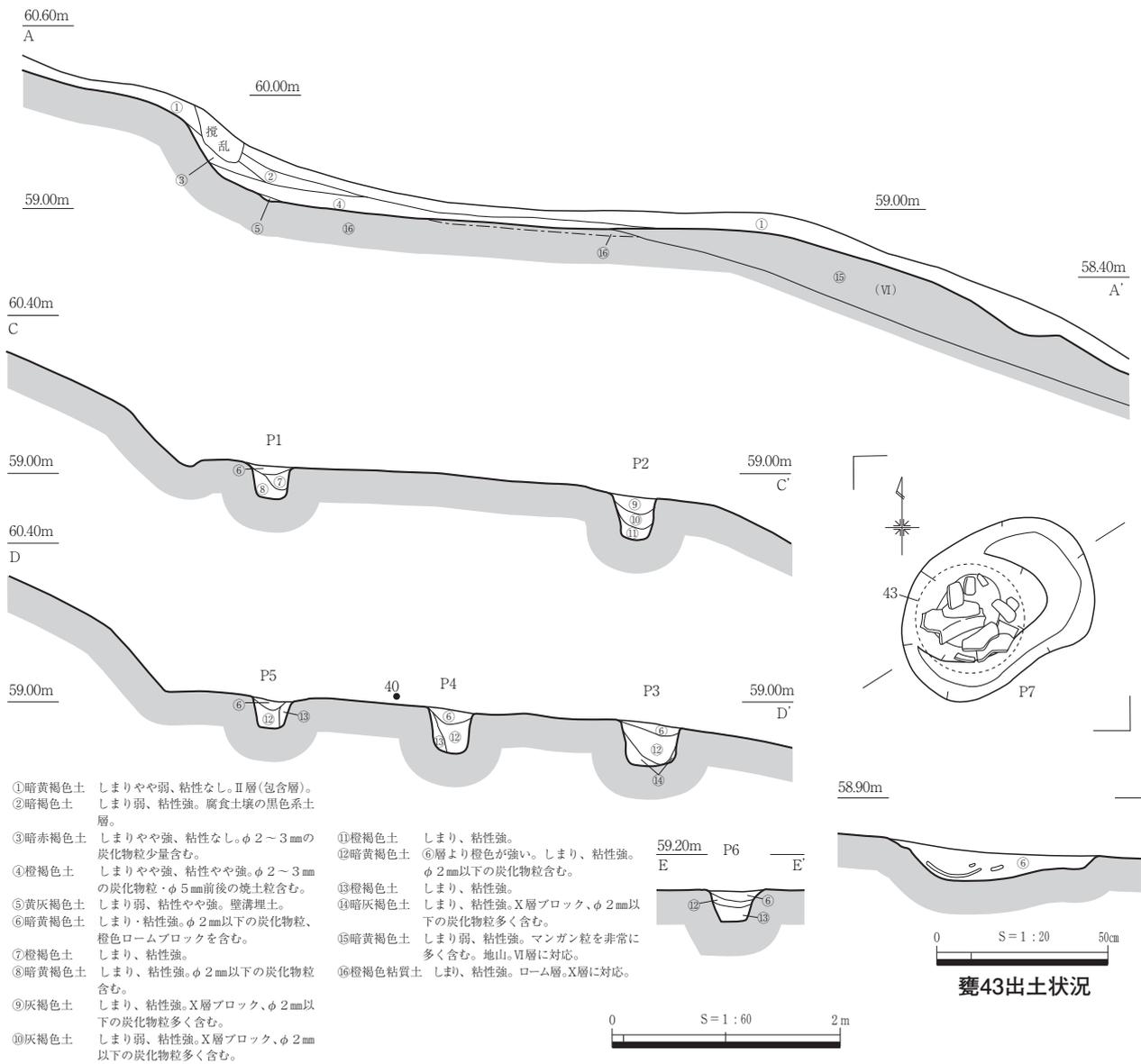
丘陵東斜面の上部、F 6・G 6 グリッドに位置しており、周辺の標高は約 59m を測る。

本遺構は調査前からテラス状の地形として地表に表れており、その存在が予想できた。そこで、包含層掘削以前に東西方向の土層観察ベルトを 2 本設け、これに沿ってトレンチを掘削して規模や埋土の状況を確認した後、全面で掘り下げを行った。当初は地表で確認したテラスの規模や形態から見て、切り合いをもつ複数の段状遺構が存在する可能性を考えていたが、段状遺構の平坦面は連続する 1 つの面としてしか捉えられなかった。だが、この平坦面には南北 2 つの掘立柱建物が存在することが判明したため、北側の掘立柱建物とその周辺を SS 2 とし、南側のそれを SS 3 とした。

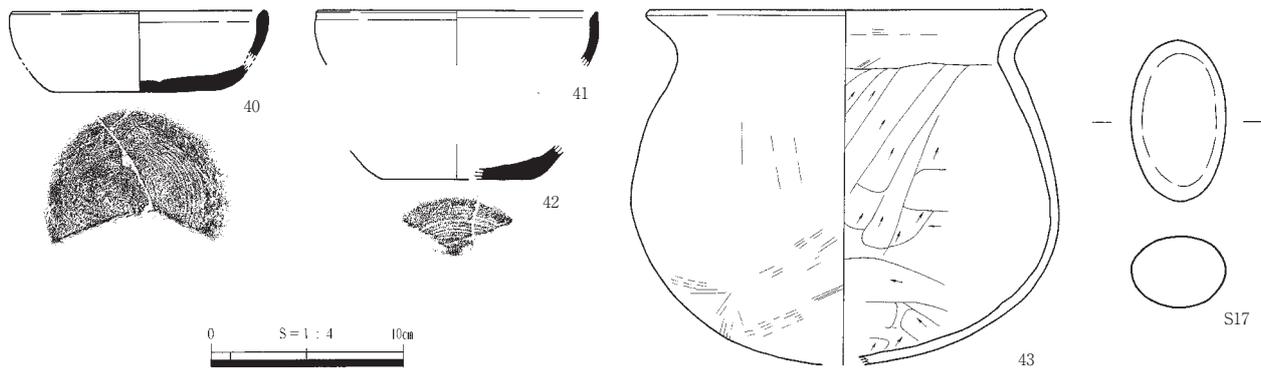
本遺構は東斜面肩部のやや下側に、大きく「コ」字形の段切りを行って平坦面を造成している。全体の規模は南北約 14.5m、東西約 5 ~ 6 m で、西壁での遺構肩から床面までの深さは平均で約 50 ~ 60



第86図 SS2・3

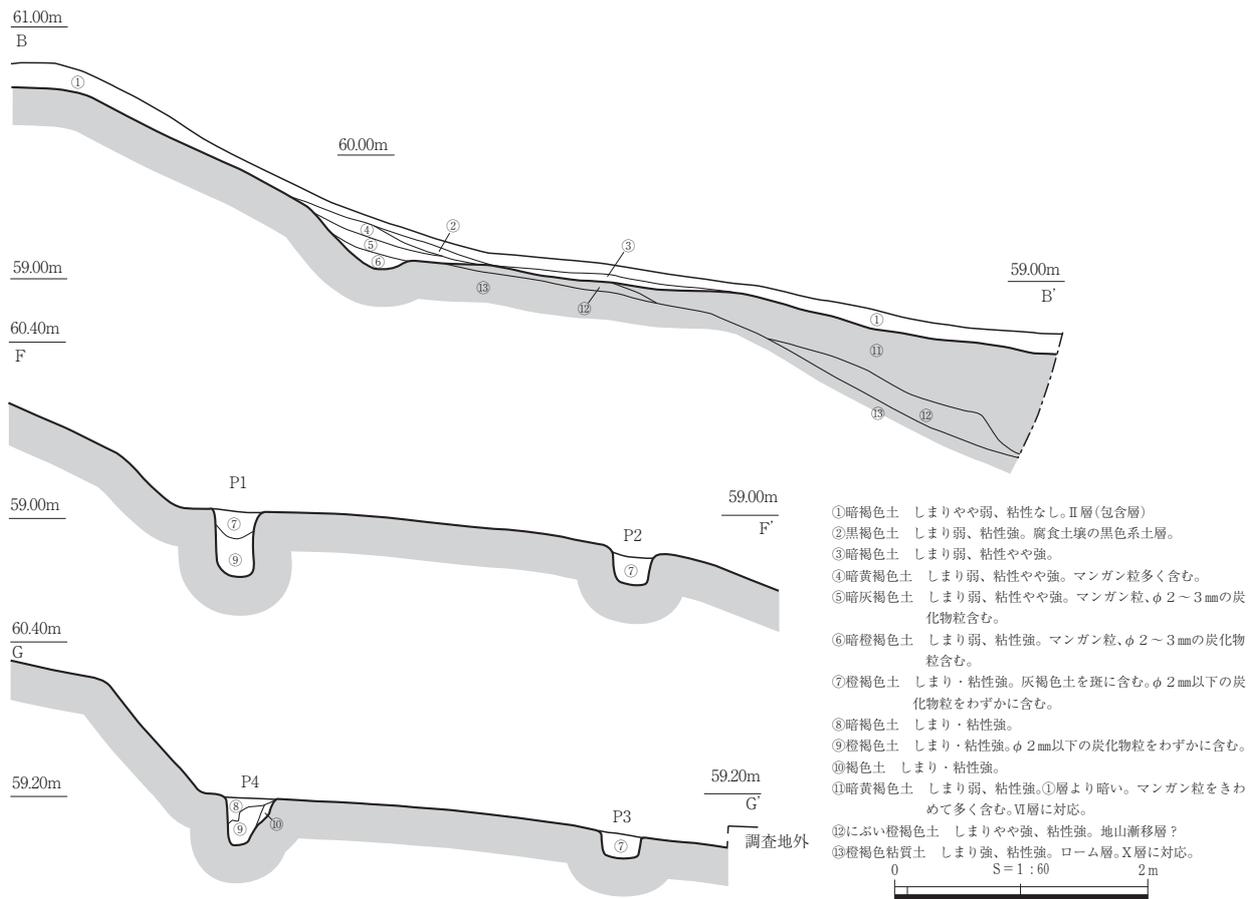


甕43出土状況



第87図 SS2

cm程度である。壁際の一部には壁溝が見られる。SS2とSS3の境付近では段切りの壁が屈曲しているため、それぞれの掘立柱建物構築にあわせて平坦面を造成したと思われるが、これが一回で行われたか、時間的に前後して行われたかは判断できない。少なくとも、平坦部の埋土はともに自然堆積で、埋土の土質や堆積状況に大きな違いがないことから、埋没時期はほぼ同時と考えており、遺構が機能していた段階でも両者が並存していた可能性が高いと考えている。



第88図 SS3

### SS2

SS2の掘立柱建物は、桁行が1間(約4.7m)、梁間が南側で2間(3.3m)、北側で1間(3.3m)となり、主軸は座標南北軸に載る。P1~P6は径40~55cmとほぼ同規模であるが、深さはP1・P5・P6が約30cm、P2・P3・P4が約40cmで、東側の柱穴がやや深くなる。側柱の柱穴ではないP6は、P4と対になって棟持柱の柱穴として機能したものであろうか。埋土は、P3~P5で柱痕および裏込め土とも考えられる土層が見られるが、確実なものではない。P6の南東に位置するP7は、柱穴以外の機能をもっていた可能性を考えており、径60×45cm、深さ約10cmの浅い不整形ピットである。埋土は自然堆積層と考えており、土師器甕43の破片を多く含んでいた。また、建物中央部の床面には被熱して赤化した範囲がみられた。このことから、この掘立柱建物は土間床で、その中央に火処があったと推定できる。

SS2では、平坦部の埋土中から須恵器坏身40~42・磨石S17などが出土したほか、P7からはほぼ完形に復元できた土師器甕43が出土した。40・42は底部に回転糸切り痕が残る。これらの出土遺物はいずれも8世紀後半のもので、遺構の時期を示すものと考えている。

### SS3

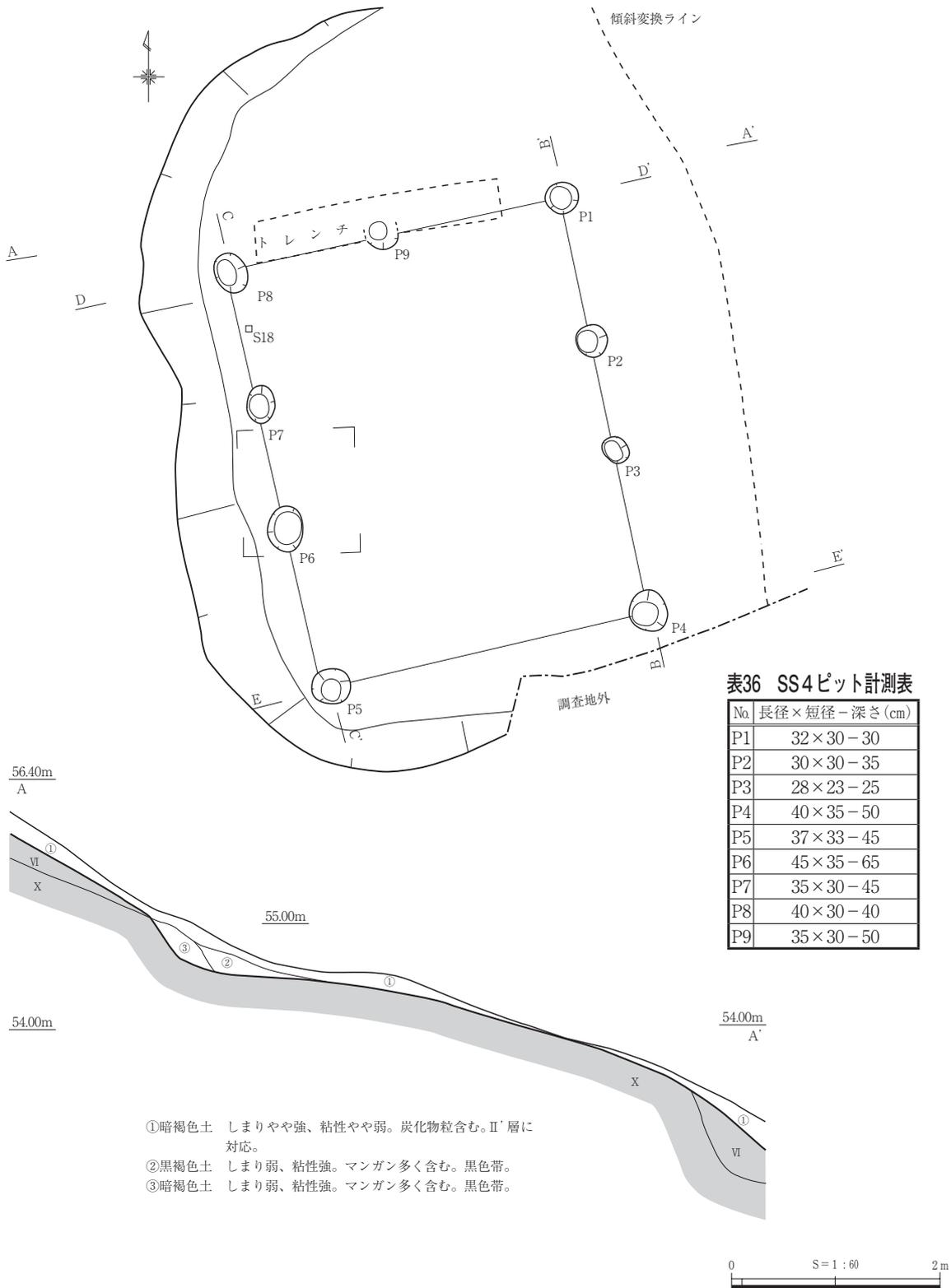
SS3の掘立柱建物は、桁行1間(西側4.3m)、梁間1間(3.1m)で、主軸方向はN-7°-Wである。柱穴は径35~45cmとほぼ同規模で、深さは西側のP1が約50cm、P2・P3が約20cm、P4が約40cmである。埋土はいずれも自然堆積の可能性が高い。

SS3からはほとんど遺物が出土しておらず、実測に耐えうるような遺物はなかった。SS3は、SS2とほぼ同時期に機能し、廃絶された可能性が高いため、8世紀後半の遺構と考えられる。

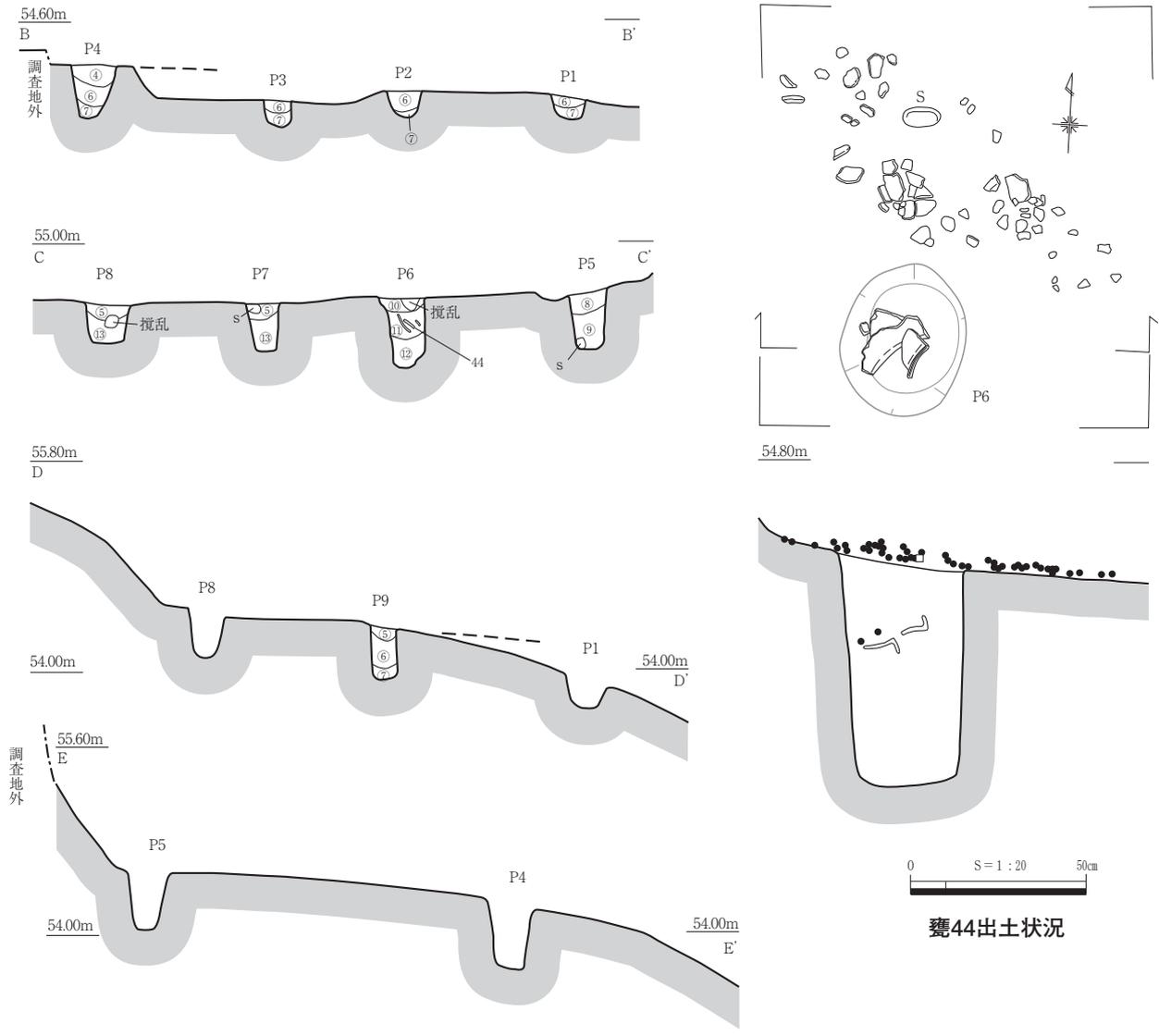
SS4 (第89・90図、表36・43、PL.52・67)

丘陵東斜面の中腹上部、F5・G5グリッドに位置しており、周辺の標高は54～55mを測る。

本遺構もSS2・3同様、調査前にその存在が予想できたため、包含層掘削以前に土層観察ベルトを設けてトレンチを掘削し、規模や埋土の状況を確認した後、全面で掘り下げを行った。

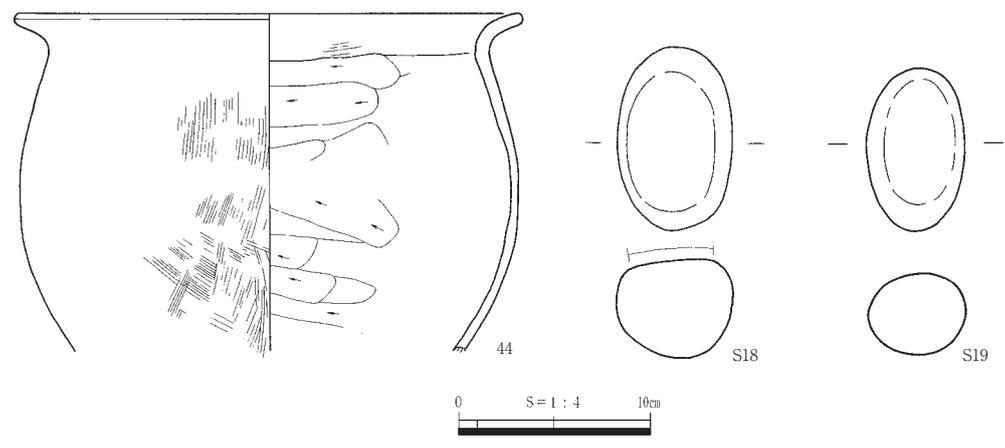
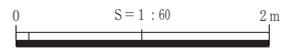


第89図 SS4(1)



甕44出土状況

- ④赤灰褐色土 しまり弱、粘性やや強。地山小礫含む。
- ⑤暗黄褐色土 しまりやや弱、粘性強。φ1~2mmの炭化物粒含む。
- ⑥赤褐色土 しまり弱、粘性強。地山礫(φ1cm)含む。
- ⑦暗褐色土 しまり弱、粘性強。マンガンを含む。
- ⑧赤褐色土 しまり弱、粘性強。地山礫(φ3~6cm)含む。
- ⑨暗黄灰褐色土 しまり弱、粘性強。
- ⑩暗橙褐色土 しまり弱、粘性強。マンガンを少量含む。小礫含む。
- ⑪暗黄灰褐色土 しまり弱、粘性強。マンガンを少量含む。土器包含。
- ⑫暗褐色土 しまり弱、粘性やや弱。
- ⑬暗褐色土 しまり弱、粘性強。



第90図 SS4(2)

本遺構は、掘立柱建物をともなう段状遺構で、丘陵の東斜面に「コ」字形に段切りを行って、平坦面を造成している。段状遺構全体の規模は南北長約7.3m、東西幅約5.5mで、西壁での遺構肩から平坦面までの深さは約50cmである。平坦面は、東半の一部を若干掘り過ぎてしまったが、本来はほぼ水平に整えられていたものと思われる。

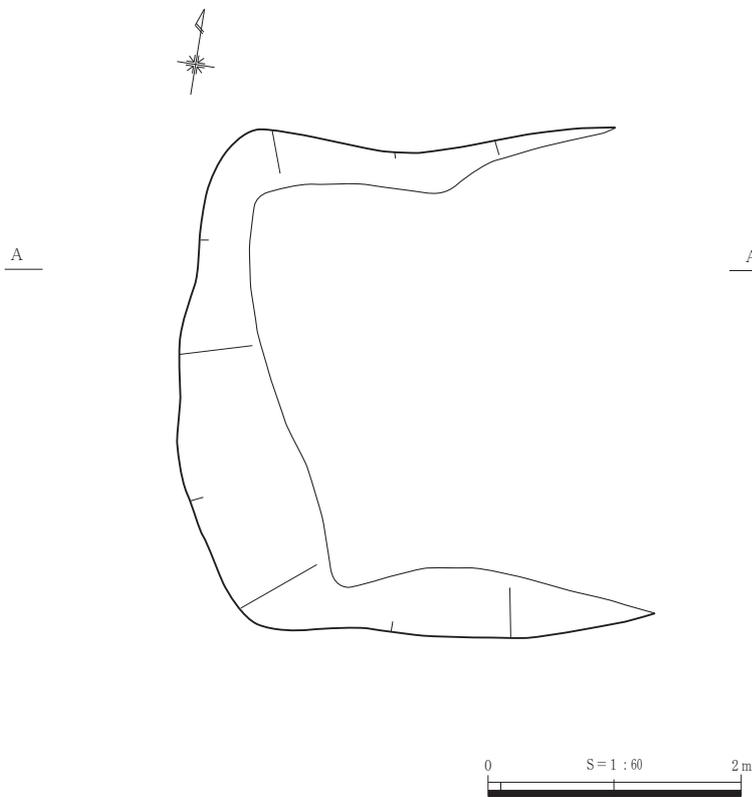
この平坦面に築かれた掘立柱建物は、桁行が3間(約4.1m)、梁間が北側で2間(3.2m)、南側で1間(3.2m)となり、主軸方向はN-12°-Wである。柱穴は、径約20～40cmと小さく、深さは検出面からの深さでは20～60cmとばらつきがあるが、本来は深さ50～60cmほどで揃っていたと推定できる。埋土はいずれも流入土の自然堆積と考えている。このうち、P6の埋土には土師器甕44の破片が多く含まれている。この甕は、同一個体片がP6周辺の床面からも多数出土していることから、P6の埋没過程で流土とともに流れ込んだものと思われる。

出土遺物は、土師器甕44、安山岩製磨石2点(S18・S19)である。44は接合しなかった同一個体片も多数あり、完形に近い状態で平坦面に残されていたか、上方から転落してきたものと思われる。口縁が「く」の字に外反し、体部が球形となる形態を呈す。奈良時代後半のものと思われる。

本遺構は、出土遺物からみて、奈良時代後半以降に廃絶、埋没を開始したものと考えられる。

### SS5 (第91・92図、PL.53)

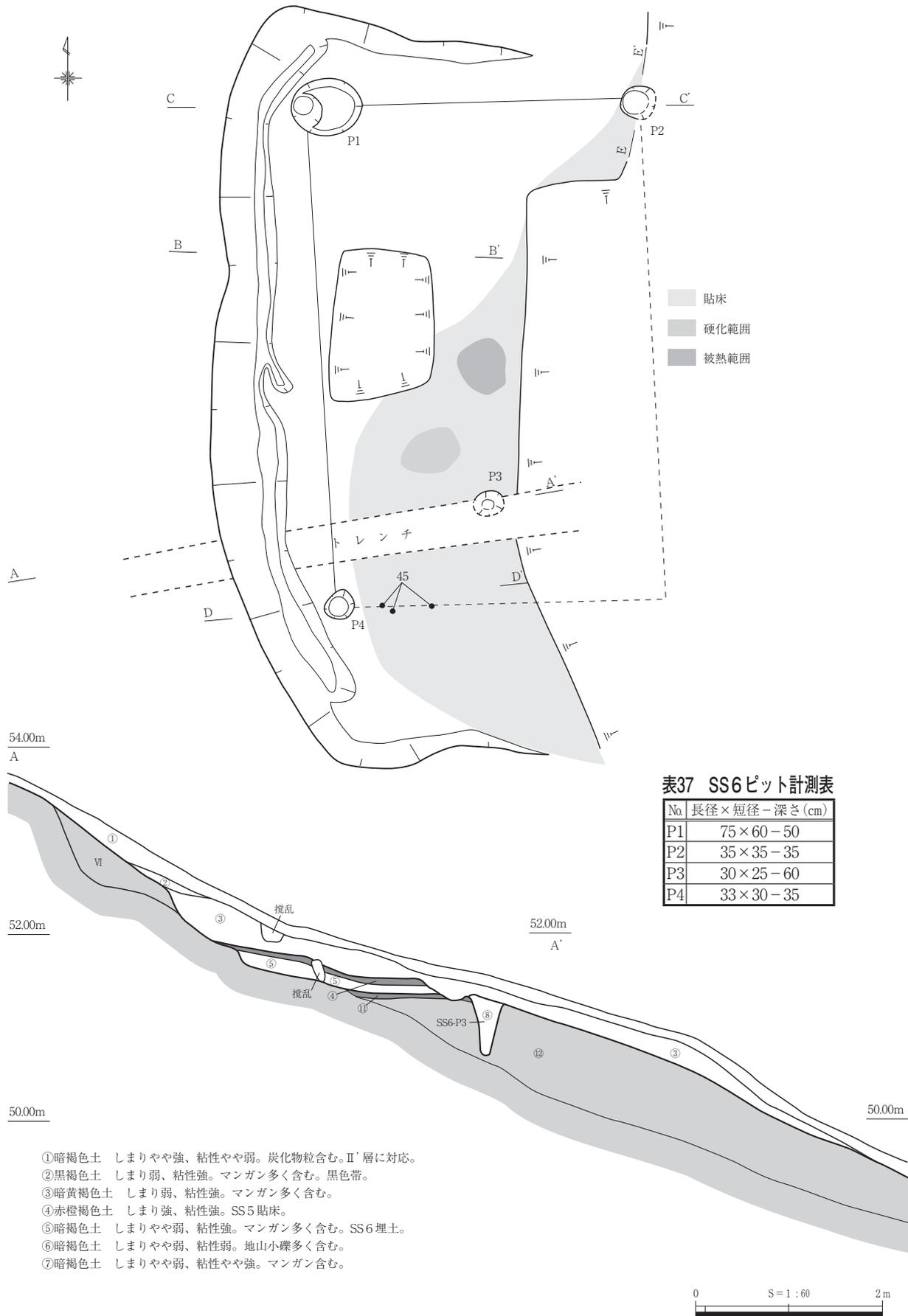
丘陵東斜面の中腹、F4・F5グリッドに位置しており、周辺の標高は51～53mを測る。SS6の南半に大きく重なっている。本遺構も、調査前にその存在が予想できたため、包含層掘削以前に土層観察ベルトを設けてトレンチを掘削した。その際、SS6との重複を確認し、SS5はSS6埋土を削平して造られていることが分かった。



本遺構は、丘陵の東斜面に「コ」字形に段切りを行って平坦面を造成している。遺構の規模は南北長約4m、東西幅約3.5mで、西壁での遺構肩から平坦面までの深さは約40cmである。本遺構の平坦面は、SS6埋土の⑤層を削平した後、X層類似の粘質土で貼床(④層)を施して造っている。平坦面でピットなどは確認していない。SS5の埋土(③層)は上方から流入した自然堆積層で、包含層(Ⅱ'層)に近似している。埋土中からの遺物の出土は全く見られなかった。

出土遺物がないため、遺構の時期は不明であるが、SS6より新しい時期のものである。

第91図 SS5



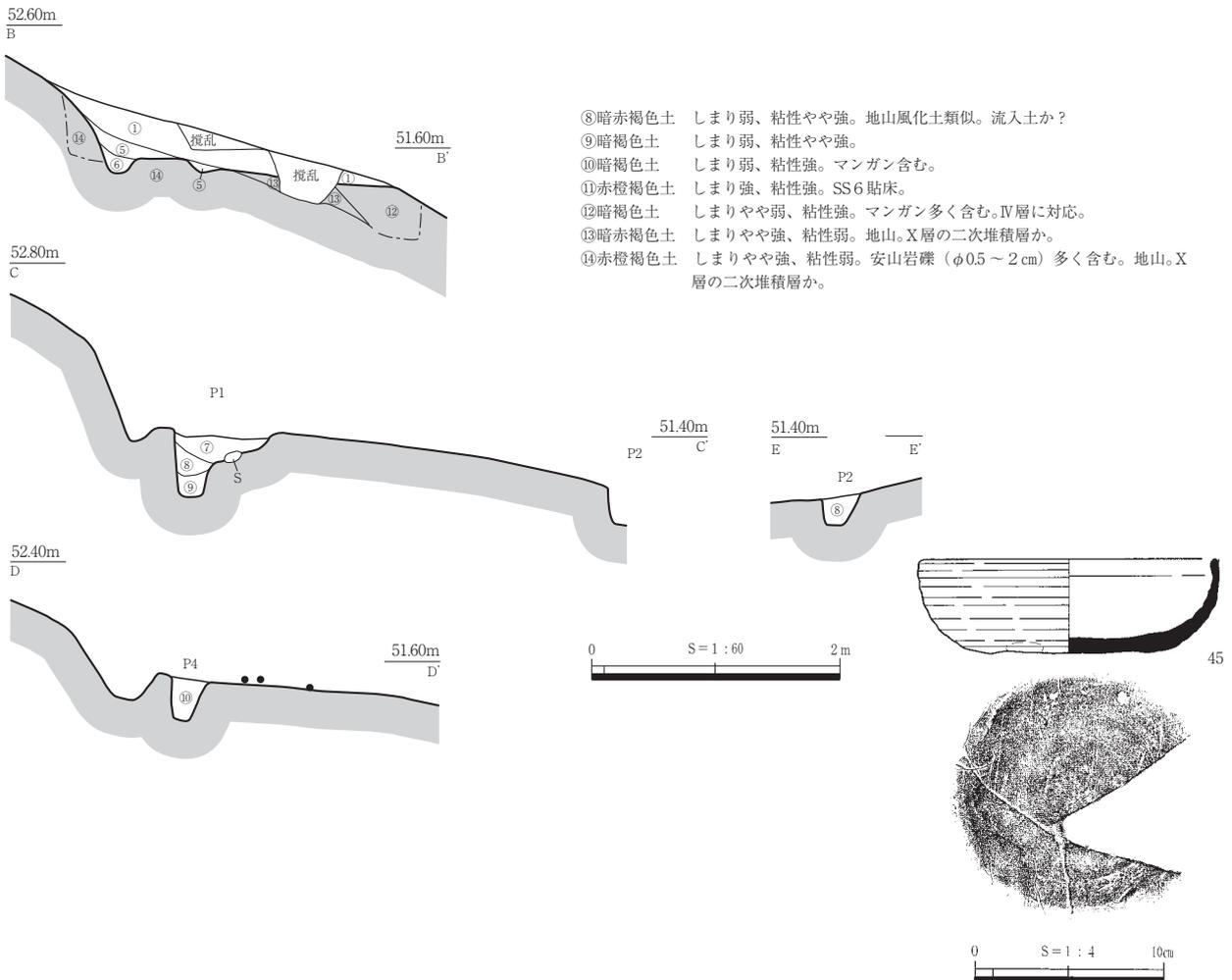
第92図 SS6 (1)

SS6 (第92・93図、表37・43、PL.53・68)

丘陵東斜面の中腹、F4・F5グリッドに位置しており、周辺の標高は50.5～52mを測る。SS5に南半部の遺構埋土と遺構肩を大きく切られている。また、平坦面中央部では近年の炭窯掘削による攪乱を受けている。なお、本遺構下の層(⑫層)は遺物包含層となっていたため、平坦面東側の貼床の遺存しない部分を遺構床面と認識できずに大きく掘り下げてしまった。

本遺構は、丘陵の東斜面に大きく「コ」字形の段切りを行って平坦面を造成している。遺構の規模は南北長約8m、東西幅約4.5m(最大残存部)で、遺構肩から平坦面までの深さはSS5に切られていない部分で約50～60cmを測る。本遺構の平坦面は、地山(X層)または遺物を包含する斜面部流土堆積層(⑫層)を削平した後、⑫層上に部分的に粘質土を用いて貼床(⑪層)を施している。平坦面では、ピットを4基確認した。これらが掘立柱建物を構成する柱穴である可能性は高いと考えているが、平坦面の南東部を掘削してしまったため確実ではない。P1・P2・P4を側柱と想定すると、桁行1間(5.3m)、梁間1間(3.5m)の掘立柱建物が推定できる。こう考えた場合、P3は桁方向の建物中軸線が通る位置にあたるので、これも掘立柱建物を構成する柱穴となる可能性が高い。なお、このように想定した柱配置や規模は、先述のSB1・SS2と類似している。また、平坦面の中央東寄りで検出した床面の被熱赤化範囲も、掘立柱建物を想定した場合には、SB1やSS2と同じく、建物中央に位置していたと推定できる。

出土遺物は、床面直上で確認した須恵器坏45のみである。3片に割れた状態で出土したが、完形に



第93図 SS6(2)

近い状態に接合している。体部は強い回転ナデで調整して、口縁内面を肥厚させており、底部には回転糸切りの痕跡を留めている。本遺構は出土遺物から、8世紀後半のものと考えられる。

#### 4 土坑

本遺跡で検出された土坑のなかには、埋土に多量の炭化物および焼土粒が混入する、壁面及び底面に被熱痕跡が認められる、といった特徴をもつものが17基ある。平面円形あるいは隅丸方形を呈すこれらの土坑は、底面よりも壁面を中心に被熱痕跡を顕著に残すという点でも概ね共通する。同様な土坑は本遺跡も所在する琴浦町の別所中峰遺跡、中道東山西山遺跡などで調査されており、上記の諸特徴から簡易な「伏せ焼き」法を用いて木炭を焼いた「製炭土坑」として評価・報告されている(大野編2004、高尾編2005)。なお、埋土中の混入物や壁・底面の被熱痕跡は遺構ごとに差異があり、一様に製炭土坑と断定できないが、ここではその可能性が推定されるものも含めて報告する。

これらの製炭土坑の年代は、SK1・4・12から出土した炭化材の年代測定によって7世紀後半から9世紀後半の値が得られていることや(第5節2参照)、SK16から8世紀後半代に位置づけられる須恵器が出土していること、集落形成の時期もこれと同時期であることから考えて、奈良時代から平安時代前期に収まるものと判断した。

##### 【参考文献】

- 大野哲二編2004『松谷中峰遺跡・別所中峰遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書91 (財)鳥取県教育文化財団  
高尾浩司編2005『中道東山西山遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書101 (財)鳥取県教育文化財団

#### SK 1 (第94図、PL.54)

調査地北西隅A9グリッド、標高61.1mの丘陵尾根部の傾斜変換点に位置する。1.3m南東にSK2がある。Ⅶ層上面で炭化物を含有する不整六角形プランを検出したため、土層観察用のベルトを設定し、調査を行った。平面形は長軸1.36m、短軸1.18mの不整六角形を呈し、検出面からの深さは26cmを測る。底面は平坦で、壁面のほぼ全てが被熱を受け硬化している。

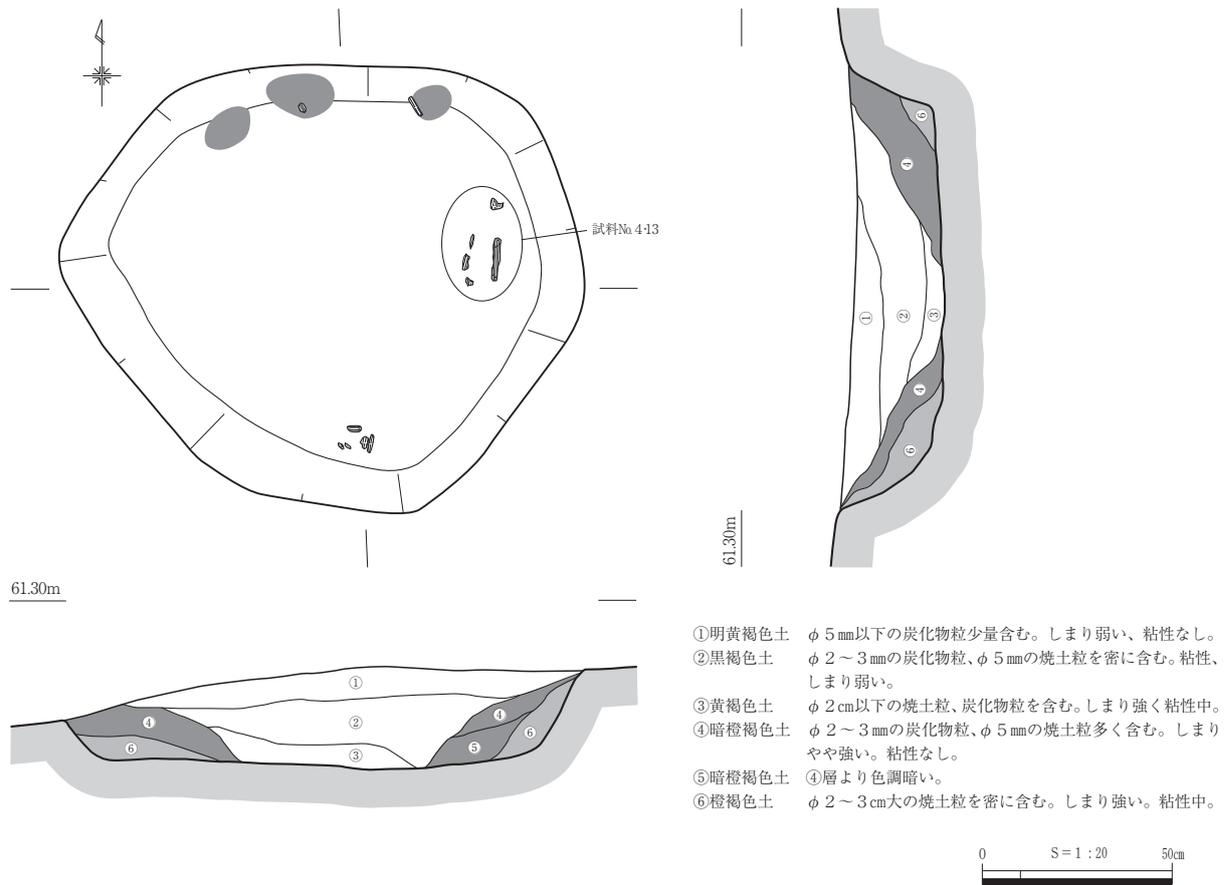
埋土は①～②層が検出面に相当するソフトローム層に近似する。壁際の④・⑤層は炭化物、⑥層は焼土粒、炭化物が多く含まれる。とくに北壁で炭化物を密に含む5～8cmほどの範囲が3ヶ所認められ、東壁と南壁では炭化材が散在していた。これらの炭化材(試料No.4)の放射性炭素年代測定を行ったところ、7世紀後半から9世紀初頭という測定結果が得られている。また、これとあわせて行った樹種同定では、シイノキ属であることが分かった。

#### SK 2 (第95図、PL.54)

調査地北西隅B9グリッド、標高61.2mの丘陵尾根部の傾斜変換点に位置する。1.3m北西にSK1がある。Ⅶ層上面で微量な炭化物を含む不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。平面形は長軸1.03m、短軸1.04mの不整円形を呈し、検出面からの深さは23cmを測る。底面は平坦で、壁面のほぼ全てが被熱を受け硬化している。

埋土上層①は微細な炭化物粒をわずかに含有し、下層③は炭化物・焼土粒を密に含む。壁際に焼土粒を多く含む④層が堆積する。③層上部の50×30cmの範囲に炭化材が多く散在している。

遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。



第94図 SK 1

**SK 3 (第96図、PL.54)**

調査地北西B9グリッド、標高61.5mの丘陵平坦面に位置する。Ⅶ層上面で炭化材を含んだ不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。平面形は、長軸82cm、短軸78cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で7cmを測り掘り方は浅い。底面の形状は平坦で、南西側に径16cmの樹根の攪乱を受けている。壁面での被熱面は認められなかった。

埋土は暗灰褐色土の単層で、長さ2cmほどの炭化材を多く含む。遺構と埋土の遺存状態は不良であるが、平面形態と埋土の特徴から製炭土坑と判断した。

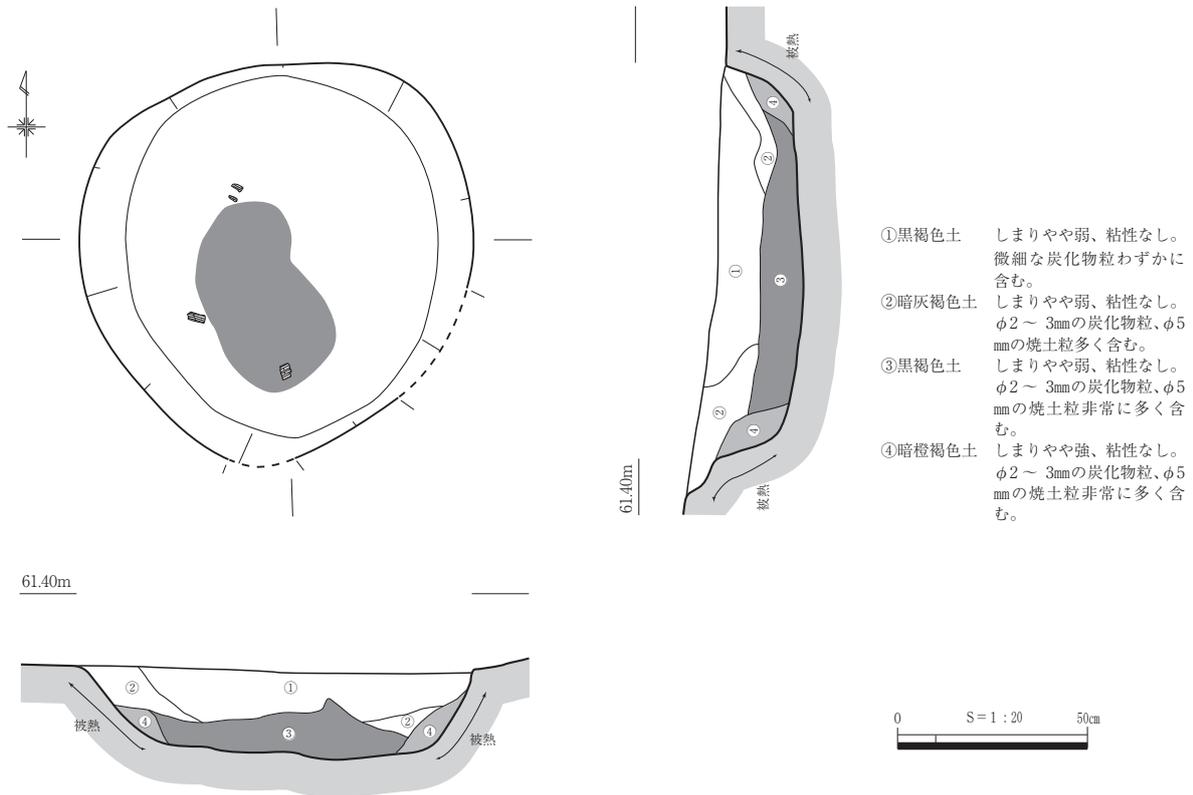
遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

**SK 4 (第97図、PL.55)**

調査地北西C9グリッド、標高61.5mの丘陵平坦面に位置する。南西側約1.5mにSK18がある。Ⅶ層上面で炭化物・焼土粒を含んだ不整楕円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。平面形は長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは最大26cmを測る。掘り方は、西側から南側で幅10～20cmのテラスを設け、底面は緩やかな播り鉢状となっている。

埋土はソフトロームに近い明黄褐色土(①層)と炭化材・焼土粒を密に含む暗灰褐色土(②層)に分かれる。②層の北壁・西壁付近と中心部の4ヶ所には長さ5cm以下の炭化材が集中する。壁面での被熱面は認められなかった。

炭化材(試料No.5)の放射性炭素年代測定を行ったところ、7世紀後半から9世紀初頭という測定結



第95図 SK2

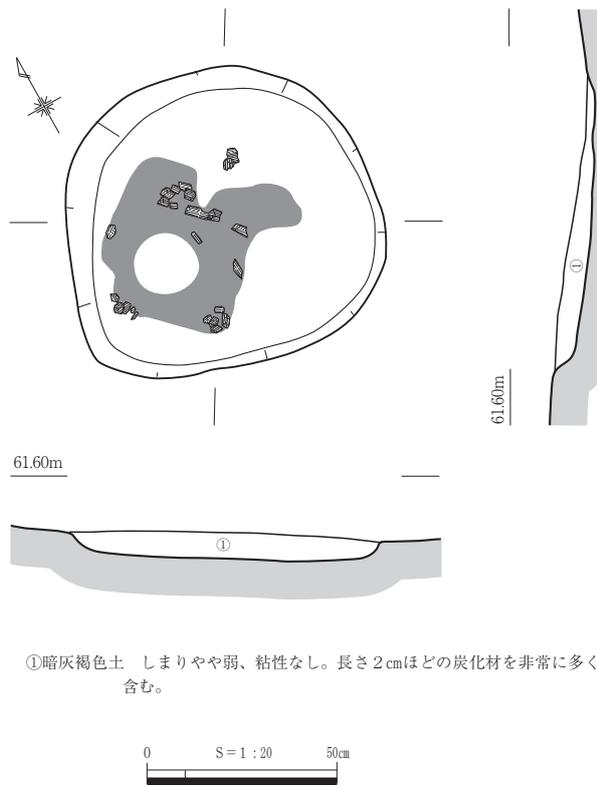
果が得られている。

SK5 (第98図、表43、PL.55・68)

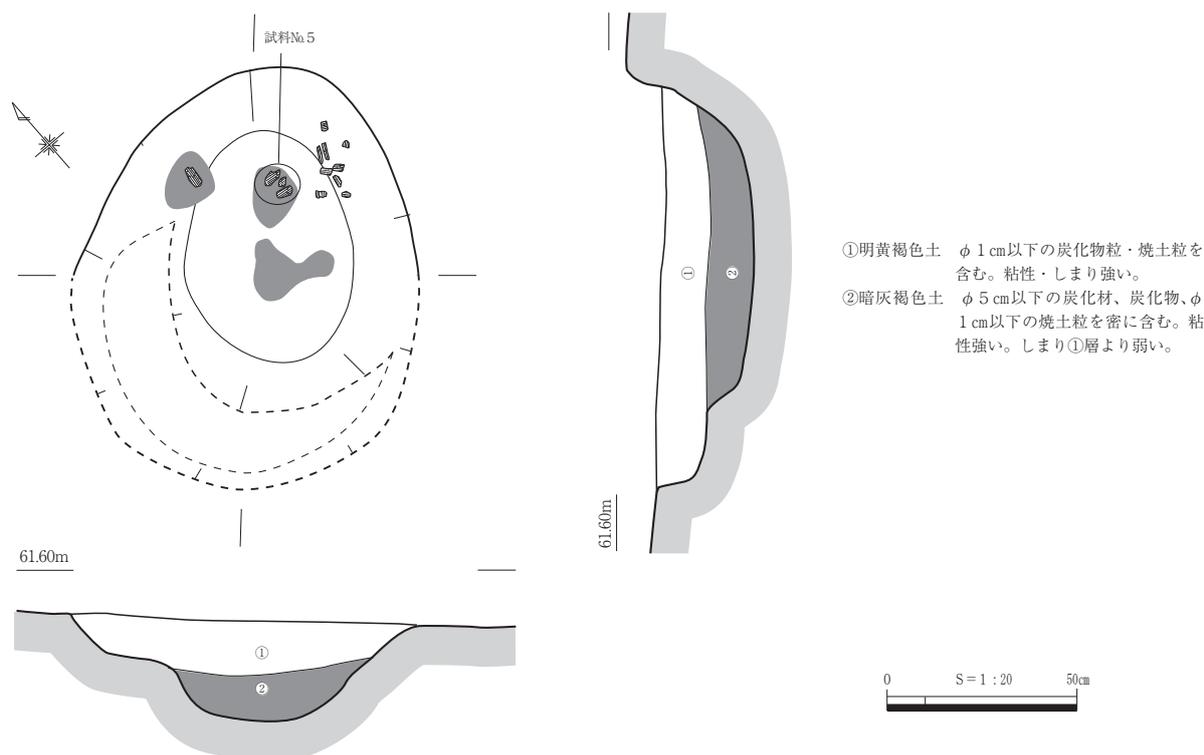
調査地西方C9グリッド、標高61.7mの丘陵平坦面に位置する。北側2.4mにはSK19がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。平面形は長軸1.08m、短軸94cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大20cmを測る。底面の形状は平坦で、壁面での被熱面は認められなかった。

埋土は4層に分層できた。②・③層は多量の炭化物・焼土粒を主体とする層であり、南西壁際から底面直上の④層は地山に近い粘質土が堆積する。②層上面には炭化材が集中する20×10cmの範囲が3ヶ所確認された。土師器甕片46は埋没過程で混入したと見られる複合口縁甕で、古墳時代前期のものである。

遺構の時期は、古墳時代前期以降と推定する。



第96図 SK3



第97図 SK4

**SK 6 (第99図、PL.55)**

調査地西方D8グリッド、標高61.4mの丘陵平坦面に位置する。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ不整隅丸方形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

平面形は長軸1.52m、短軸1.12mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。底面は平坦で、北壁面のほぼ全てが被熱を受け硬化している。

埋土は多量の炭化物を主体とする暗灰褐色土の単層であった。①層は炭化材が土壌化した層で、北壁寄り80×50cmの範囲は炭化物が集中して認められた。

遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

**SK 7 (第100図、PL.56)**

調査地西方E9グリッド、標高61.7mの丘陵平坦面に位置する。北東側約7mにSK6がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ隅丸方形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

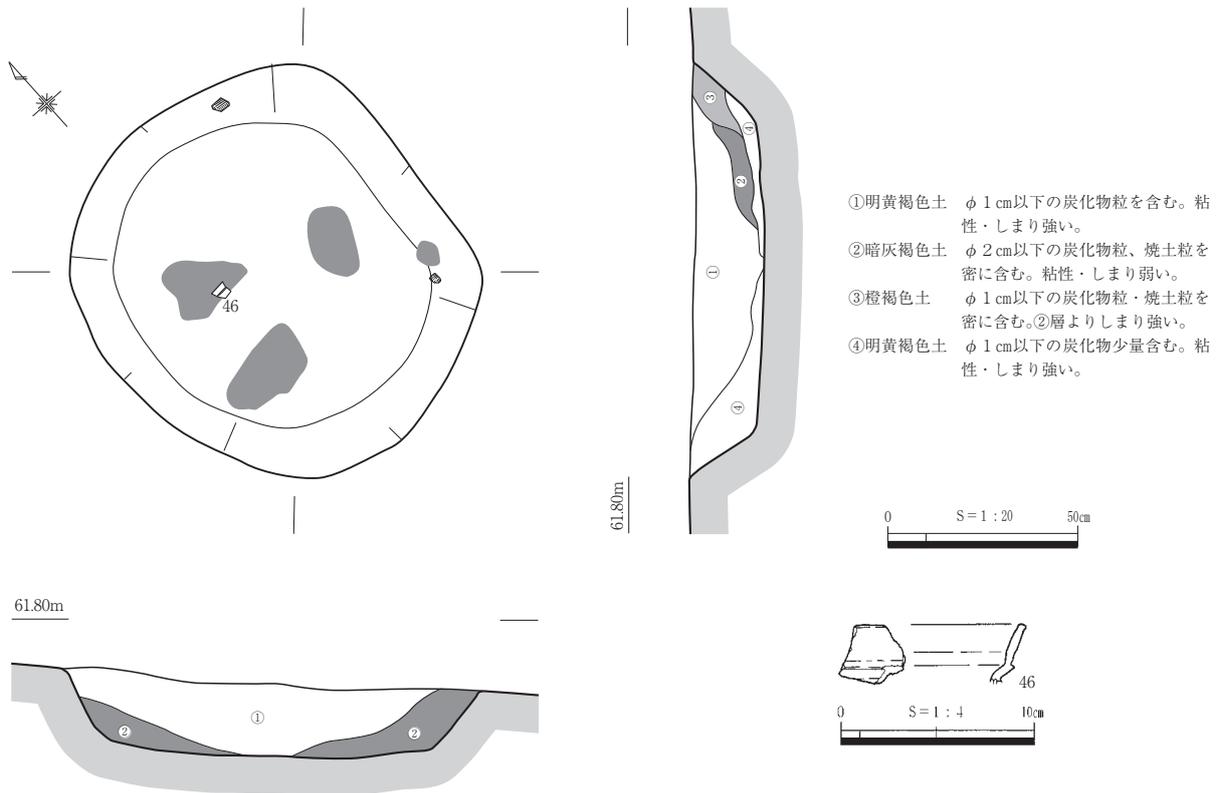
平面形は、長軸80cm、短軸70cmの隅丸方形で、検出面からの深さは最大8cmを測る。底面の形状は平坦で、北東側に50×40cmの範囲で攪乱を受けている。壁面には被熱痕跡は認められなかった。

埋土は2層に分層できた。底面直上の②層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材小片や焼土粒も混入している。①層にも炭化物がわずかに含まれるが、自然流入土と判断される。

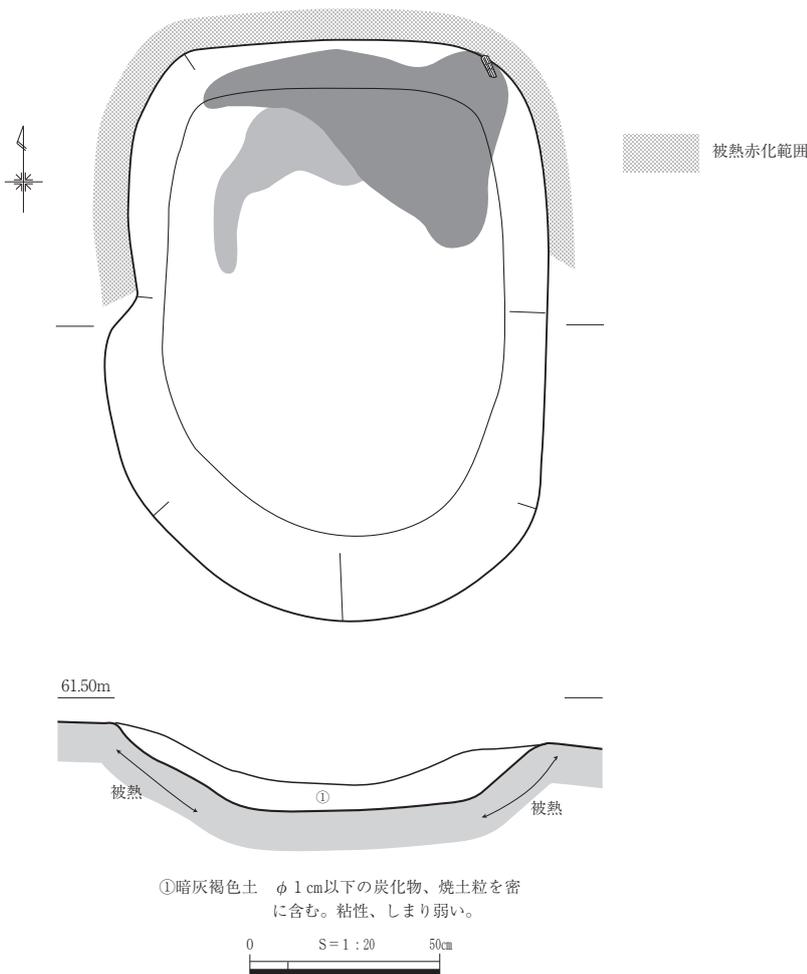
遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

**SK 8 (第100図、PL.56)**

調査地西寄りE8グリッド、標高61.6mの丘陵平坦面に位置する。南西約4mにSI2がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ隅丸方形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。平



第98図 SK5



第99図 SK6

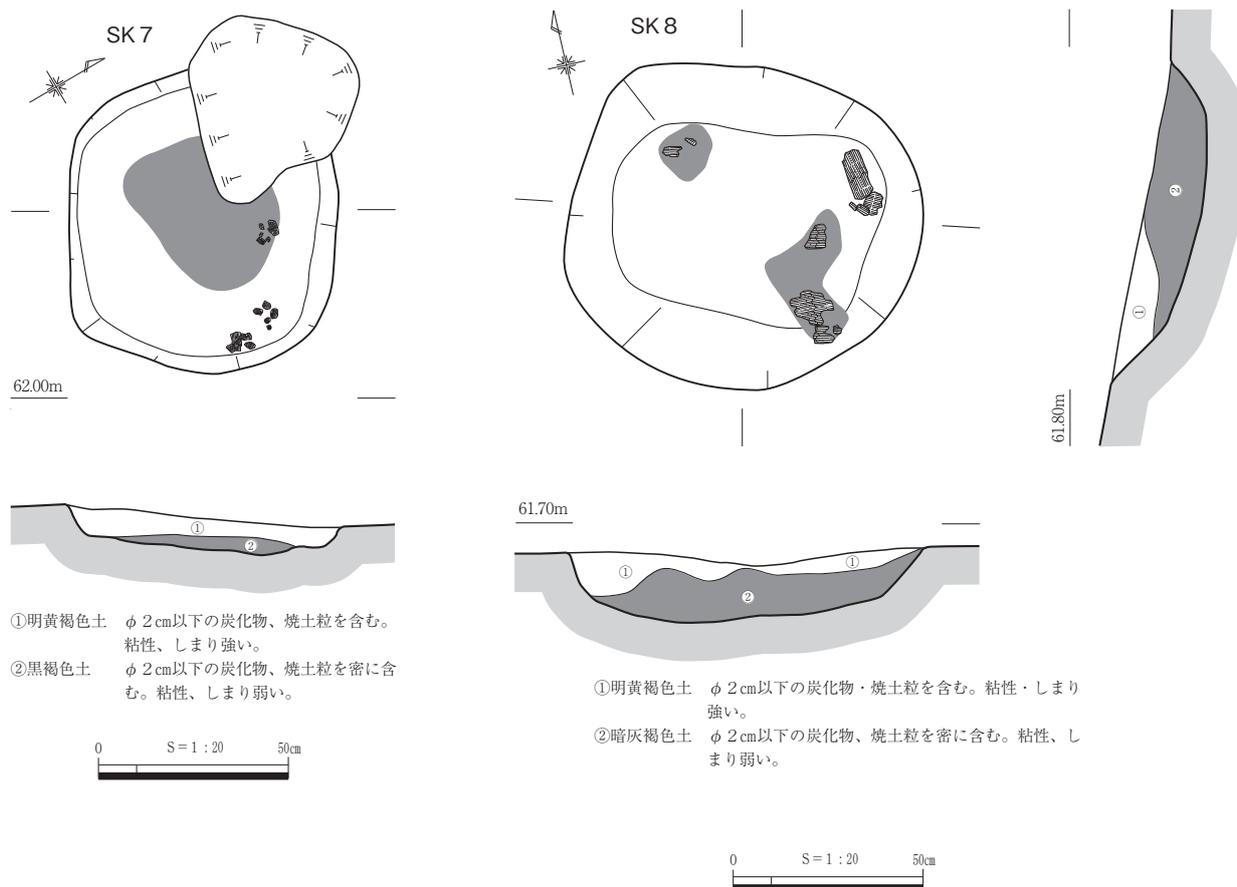
面形は、長軸90cm、短軸85cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大18cmを測る。底面の形状は緩やかな掘り鉢状を呈し、壁面に被熱痕跡は認められなかった。

埋土は2層に分層できた。底面直上の②層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材片や焼土粒も混入している。東壁寄りには2ヶ所の炭化材が密集する範囲が確認された。①層にも炭化物がわずかに含まれるが、自然堆積と判断される。

遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

### SK9 (第101図、PL.56)

調査地南西F8グリッド、標高62.1mの丘陵平坦面に位置する。北側約6.5mにSK8がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ隅丸方形プ



第100図 SK7・8

ランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

平面形は、長軸1.16m、短軸94cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大12cmを測る。底面の形状は平坦で、北西側に40×32cmの範囲で攪乱を受けている。壁面には被熱痕跡は認められなかった。埋土は炭化物や焼土粒を含有する明黄褐色土のみである。

遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

#### SK10(第102図、PL.56・57)

調査地南西F8グリッド、標高62.4mの丘陵平坦面に位置する。北東約2mにSK9がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

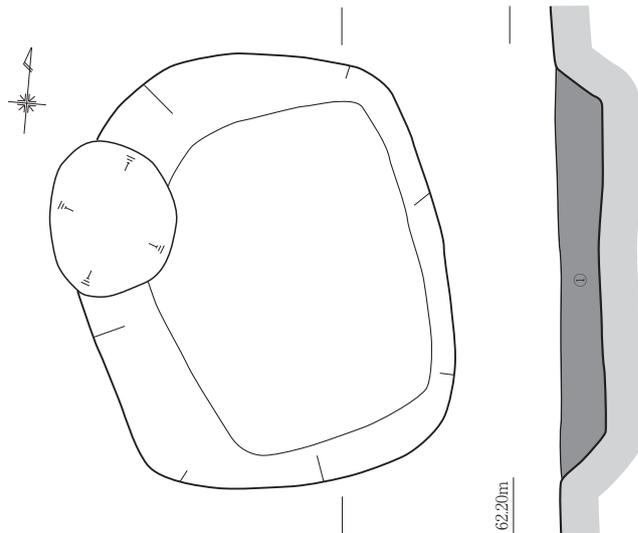
平面形は、長軸1m、短軸90cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大10cmを測る。底面の形状は平坦で、壁面に被熱痕跡は認められなかった。

埋土は2層に分層できた。上層の①層は、多量の炭化物を主体とする層で、焼土粒も混入している。遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

#### SK11(第103図、PL.57)

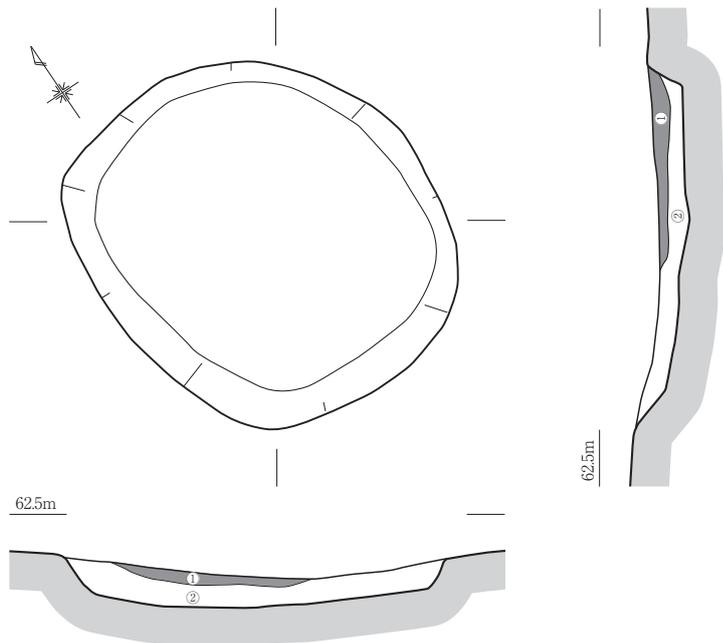
調査地南西F8グリッド、標高62.5mの丘陵平坦面に位置する。北側約1mにSK10がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

平面形は、長軸92cm、短軸72cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大10cmを測る。底面の形状は緩やかに湾曲しており、壁面に被熱痕跡は認められなかった。



①明黄褐色土 φ 1cm以下の炭化物を多く含む。焼土粒少量混じる。粘性中、しまり強い。

第101図 SK9



①黒褐色土 φ 3cm以下の炭化材・焼土粒を多く含む。粘性・しまり弱い。  
②明黄褐色土 φ 1cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり強い。

第102図 SK10

平面形は、長軸1.22m、短軸1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大20cmを測る。底面は平坦で、西側壁面隅は被熱によって硬化していた。

埋土は5層に分層できた。このうち底面直上の③層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材片

埋土は2層に分層できた。上層の①層は、多量の炭化物を主体とする層で、焼土粒も混入している。遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

SK12(第104図、PL.57)

調査地南端G7グリッド、標高61.9mの丘陵平坦面に位置する。西方約7mにSK11、北東約5mにSK14がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

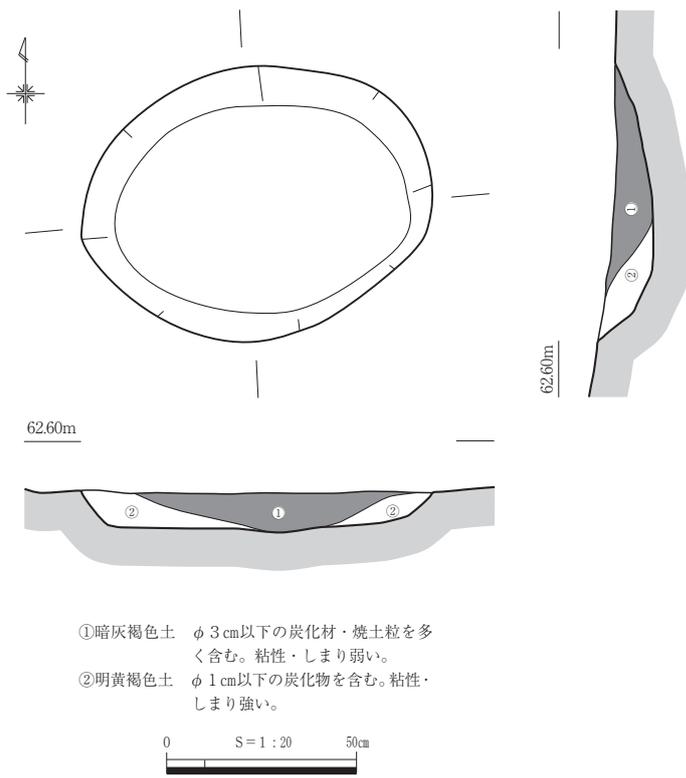
平面形は、長軸1.04m、短軸98cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大30cmを測る。底面の形状は緩やかに湾曲しており、西側と北側の壁面は被熱によって硬化していた。

埋土は3層に分層できた。このうち底面直上の②層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材片や焼土粒も混入している。①層にも炭化物がわずかに含まれるが、自然堆積と判断される。

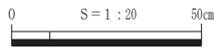
②層中の炭化材(試料No.6)について放射性炭素年代測定を行ったところ、7世紀後半から9世紀後半という測定結果が得られている。また、樹種同定では、シイノキ属であることが分かった。

SK13(第105図、PL.58)

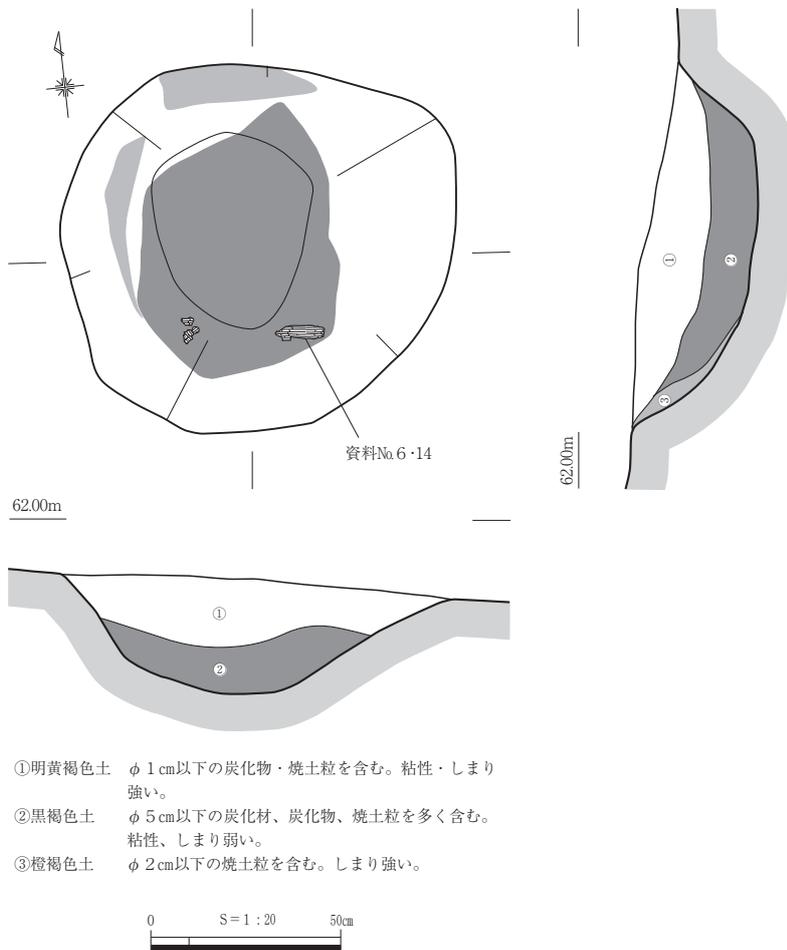
調査地南端G7グリッド、標高61.4mの丘陵上傾斜変換点に位置する。北西約8mにSK12、北約10mにSK14がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ隅丸方形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。



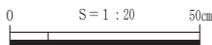
- ①暗灰褐色土 φ 3 cm以下の炭化材・焼土粒を多く含む。粘性・しまり弱い。
- ②明黄褐色土 φ 1 cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり強い。



第103図 SK11



- ①明黄褐色土 φ 1 cm以下の炭化物・焼土粒を含む。粘性・しまり強い。
- ②黒褐色土 φ 5 cm以下の炭化材、炭化物、焼土粒を多く含む。粘性、しまり弱い。
- ③橙褐色土 φ 2 cm以下の焼土粒を含む。しまり強い。



第104図 SK12

や焼土粒も混入している。壁面際に堆積する④層は焼土である。上層にも炭化物がわずかに含まれるが、自然堆積と判断される。

遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

SK14(第106図、PL.58)

調査地中央南寄りF7グリッド、標高61.7mの丘陵上緩斜面上に位置する。南西約5mにSK12、北東約8mにSK15がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ隅丸方形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

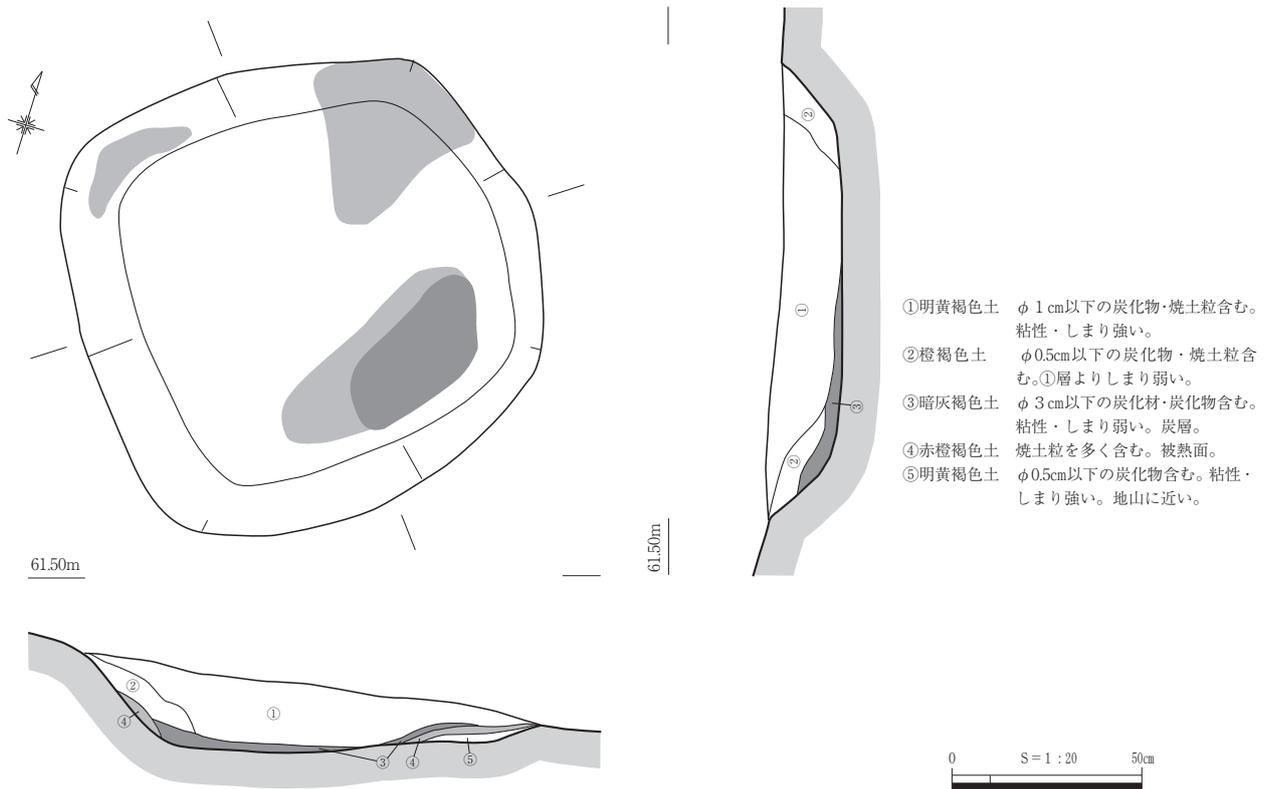
平面形は、長軸1.06m、短軸92cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大22cmを測る。底面は平坦で、南北壁面は被熱によって硬化していた。

埋土は3層に分層できた。このうち底面直上の③層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材片や焼土粒も混入している。上層でも炭化物がわずかに含まれるが、自然堆積と判断される。

遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

SK15(第107図、PL.58)

調査地中央E6グリッド、標高61.9mの緩斜面上に位置する。北東約4mにSK12、南側約3mにSS2がある。Ⅶ層上面で炭化物を含んだ隅丸方形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。

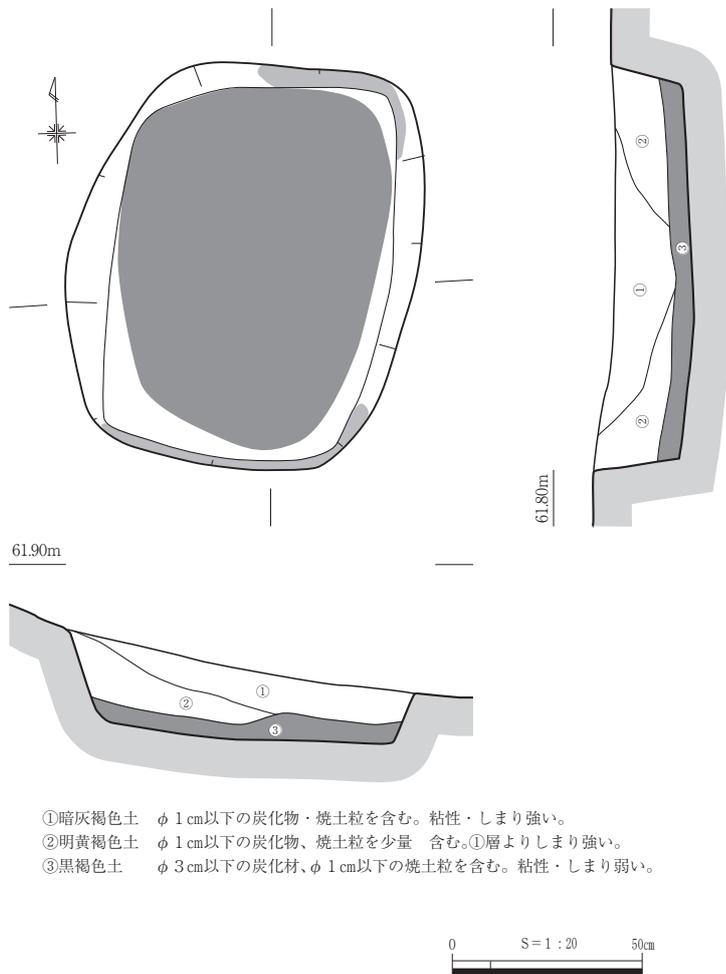


第105図 SK13

平面形は、長軸84cm、短軸76cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大14cmを測る。底面は平坦で、壁面には被熱痕跡は認められなかった。

埋土は2層に分層できた。このうち底面直上の②層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材片や焼土粒も混入している。①層にも炭化物がわずかに含まれるが、自然堆積と判断される。

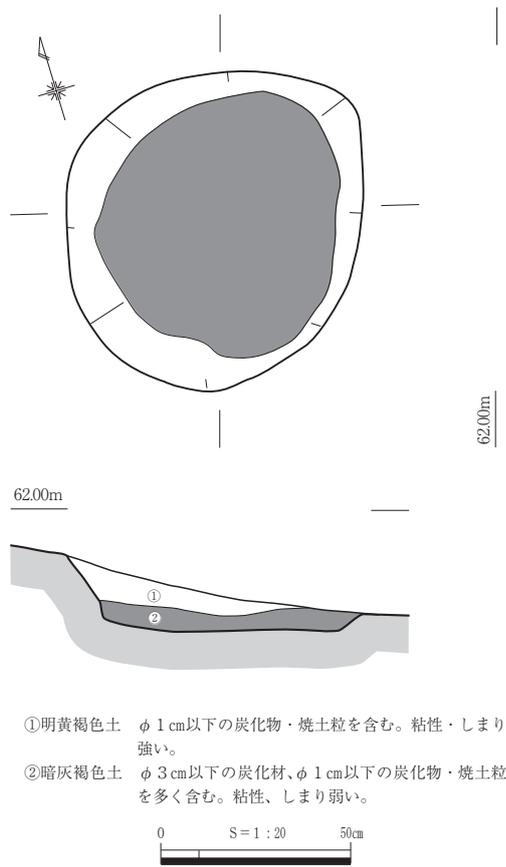
遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。



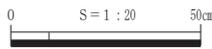
第106図 SK14

SK16(第108図、表43、PL.58・59・68)

調査地中央E6グリッド、標高60.1mの緩斜面上に位置する。SS1と重複し、土層の観察から本遺構が新しいと判断した。Ⅶ層上面でSS1と炭化物を含んだ不整円形プランを検出したため、土層観察用ベルトを設定し調査を行った。平面形は長軸1.24m、短軸1.1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大14cmを測



- ①明黄褐色土 φ 1 cm以下の炭化物・焼土粒を含む。粘性・しまり強い。
- ②暗灰褐色土 φ 3 cm以下の炭化材、φ 1 cm以下の炭化物・焼土粒を多く含む。粘性、しまり弱い。



第107図 SK15

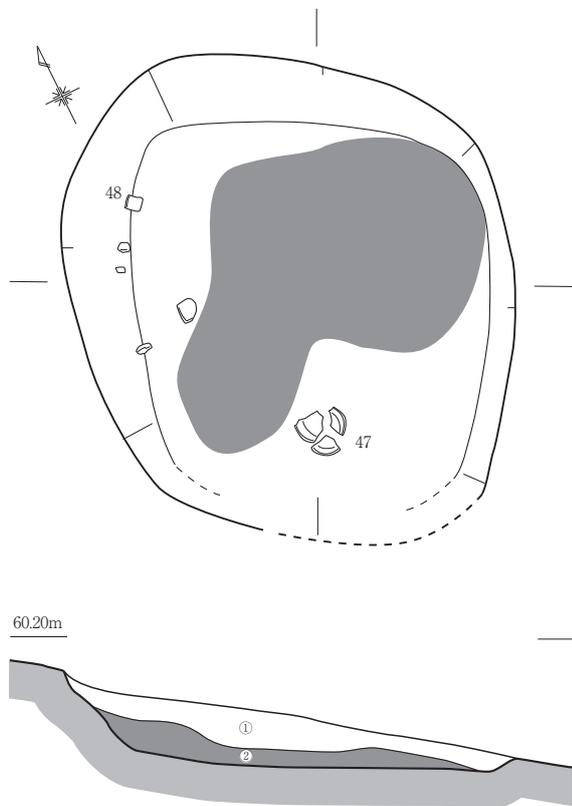
る。底面の形状は平坦で、壁面に被熱痕跡は認められなかった。

埋土は2層に分層できた。②層は多量の炭化物・焼土粒を主体とする層であり、炭化材片や焼土粒も混入している。①層中から出土し、ほぼ完形に復元できた須恵器坏47を図化している。47は体部が湾曲して立ち上がり、底部に回転糸切痕跡を残す坏身である。このほか、古墳時代の土師器高杯48や、SI 1出土の弥生土器甕1の破片も出土している。いずれも埋没過程で混入したと思われるが、47は遺構の時期を示す可能性がある。

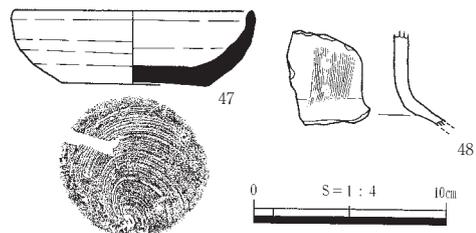
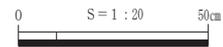
遺構の時期は、出土遺物から奈良時代後半と推定する。

SK17(第109図、PL.59)

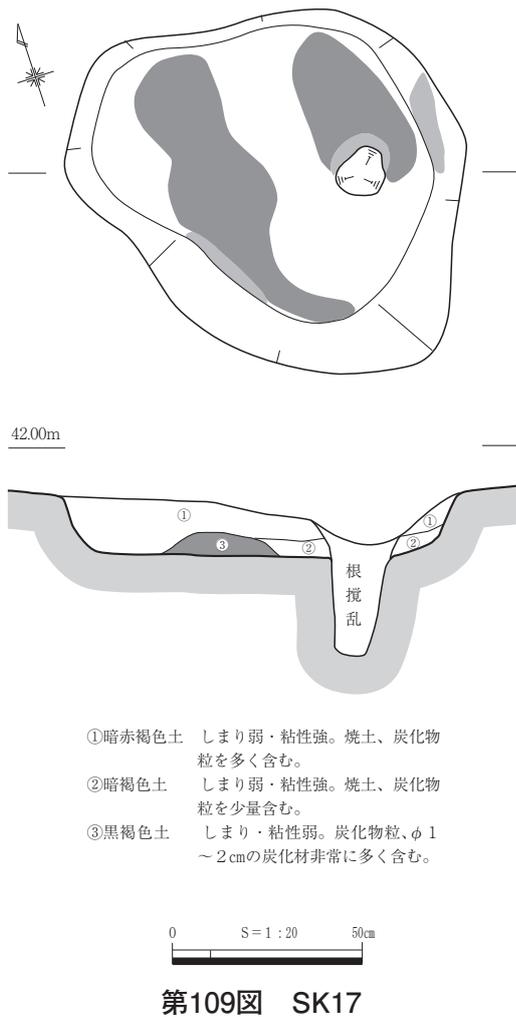
調査地東F2グリッド、標高41.9mの丘陵下平坦面に位置する。VI層上面で炭化材を含んだ不整形プランを検出したため、土層観察



- ①明黄褐色土 φ 1 cm以下の炭化物・焼土粒を含む。粘性・しまり強い。
- ②暗灰褐色土 φ 3 cm以下の炭化材、φ 1 cm以下の炭化物・焼土粒を多く含む。粘性強・しまり弱い。



第108図 SK16



第109図 SK17

ど遺存状態が良いわけではない。須恵器壺49は胴部以下が逆位で出土している。土師器甕52は谷に沿うように南北に並んだ3つの集中箇所から分散して出土しているので、包含層堆積時に谷筋に沿って移動したものであると思われる。古墳時代前期中葉の土師器壺53も集中箇所が東西に分かれているので、西方の斜面側から流れてきたものと思われる。

49～52は、いずれも遺構が検出された時期と同じ8世紀代後半に位置づけられよう。このうち、特に原位置性が高いと思われるものは51である。この平坦面でなんらかの活動が行われていた結果残されたものであろう。ほかは、こうした可能性以外に、丘陵東斜面部の遺構などから転落した可能性や、平坦部の南側の谷上方から流下してきた可能性も考えうる。いずれにしても、古代において丘陵東斜面部およびその下の平坦部の利用が盛んであったことを示している。

#### その他の包含層出土土器(第112図、表43・44、PL.69・70)

包含層出土の古代の土器は、ほとんどが丘陵上平坦部から出土した弥生時代～古墳時代の土器と異なり、調査地内から満遍なく出土している。図示したものでは、54～57・66が丘陵上平坦部から、58～60が丘陵東斜面部から、61～65・67・68が東斜面下の平坦部から出土している。なお、丘陵上平坦部のものはSB1周辺の平坦部北東部で、東斜面部のものは段状遺構周辺の斜面南部で出土しており、遺構との関連性が強い。

図示したものは、須恵器坏(54～62)、須恵器高台坏(63・64)、須恵器壺(65)、土師器甕(66～68)

用ベルトを設定し調査を行った。平面形は、長軸1.1m、短軸90cmの不整形円形を呈し、検出面からの深さは最大で14cmを測る。底面の形状は平坦で、北西側に径12cmの樹根の攪乱を受けている。北東・南西壁面で被熱痕跡が認められた。

埋土は3層に分層できた。このうち③層は多量の炭化物を主体とする層であり、炭化材片や焼土粒も混入している。

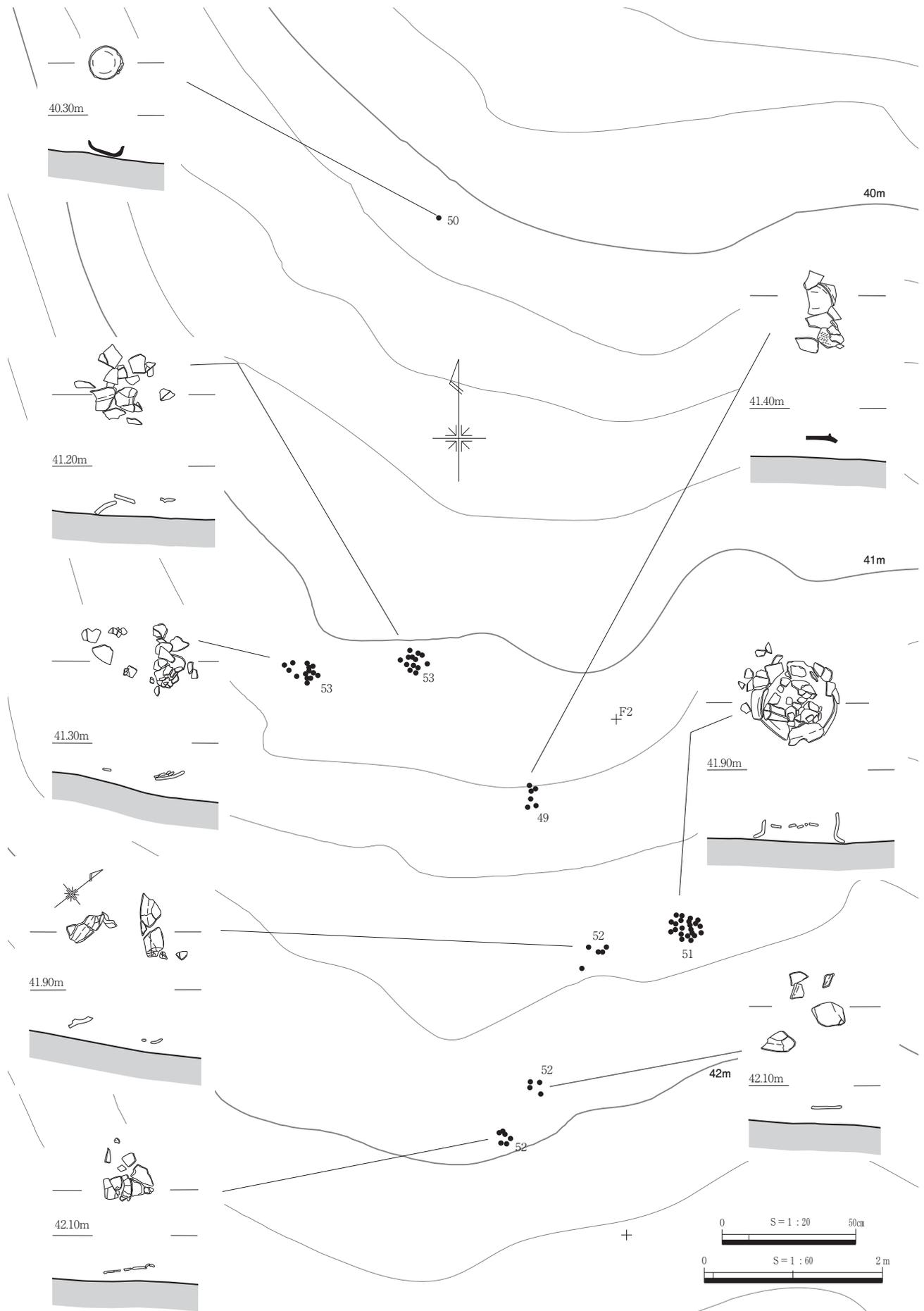
遺構の帰属時期は、奈良時代と推定する。

#### 5 遺構外の遺物

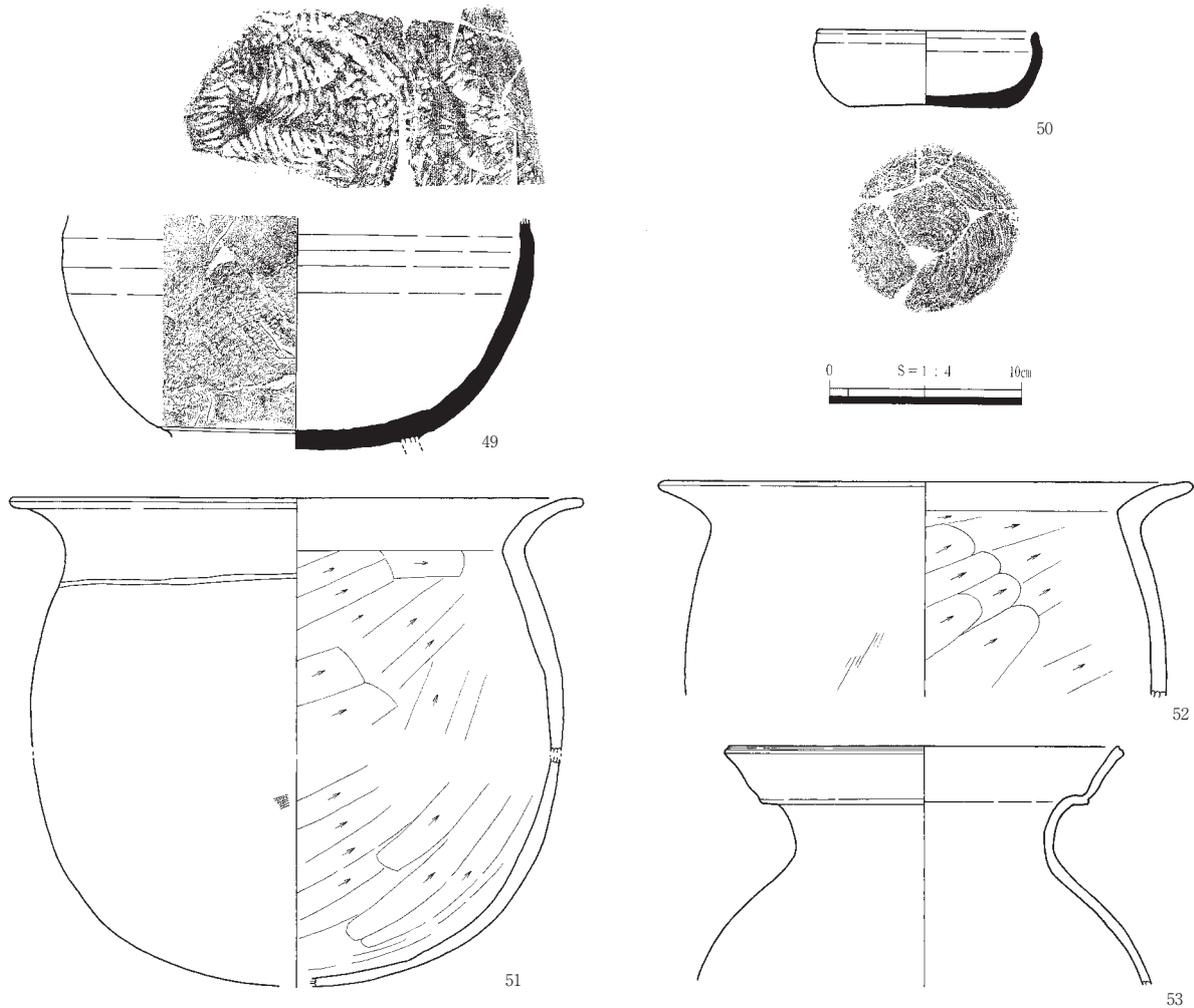
##### 東斜面平坦部土器集中(第110・111図、表43、PL.60・65・68)

東斜面部下の平坦面、F1・F2グリッドの遺構検出面付近で土器片の小規模な集中を数箇所確認した。これらは平坦部中央の谷地形部分に分布している。いずれの集中箇所も同一個体の破片がそれぞれまとまったもので、これらの土器は、53を除き、すべて古代のものである。

このうち、須恵器坏50のみが完形で出土している。土師器甕51は逆位で置かれたものがそのまま潰れたような状況で出土しており、胴部破片が欠落していたものの、全形が判明する状態まで接合できた。以上の2個体以外はそれほ



第110図 東斜面平坦部遺物出土状況



第111図 東斜面平坦部出土遺物

である。60のように一部時期の下るものも見られるが、ほとんどが遺構と同時期の8世紀後半代のものであろう。

## 第4節 その他の調査成果

### 1 土坑

ここでは時期不明の土坑を報告する。

#### SK18(第113図、PL.59)

丘陵上平坦面のC9グリッドに位置する。1m北東にSK4がある。周辺の標高は61.5mである。

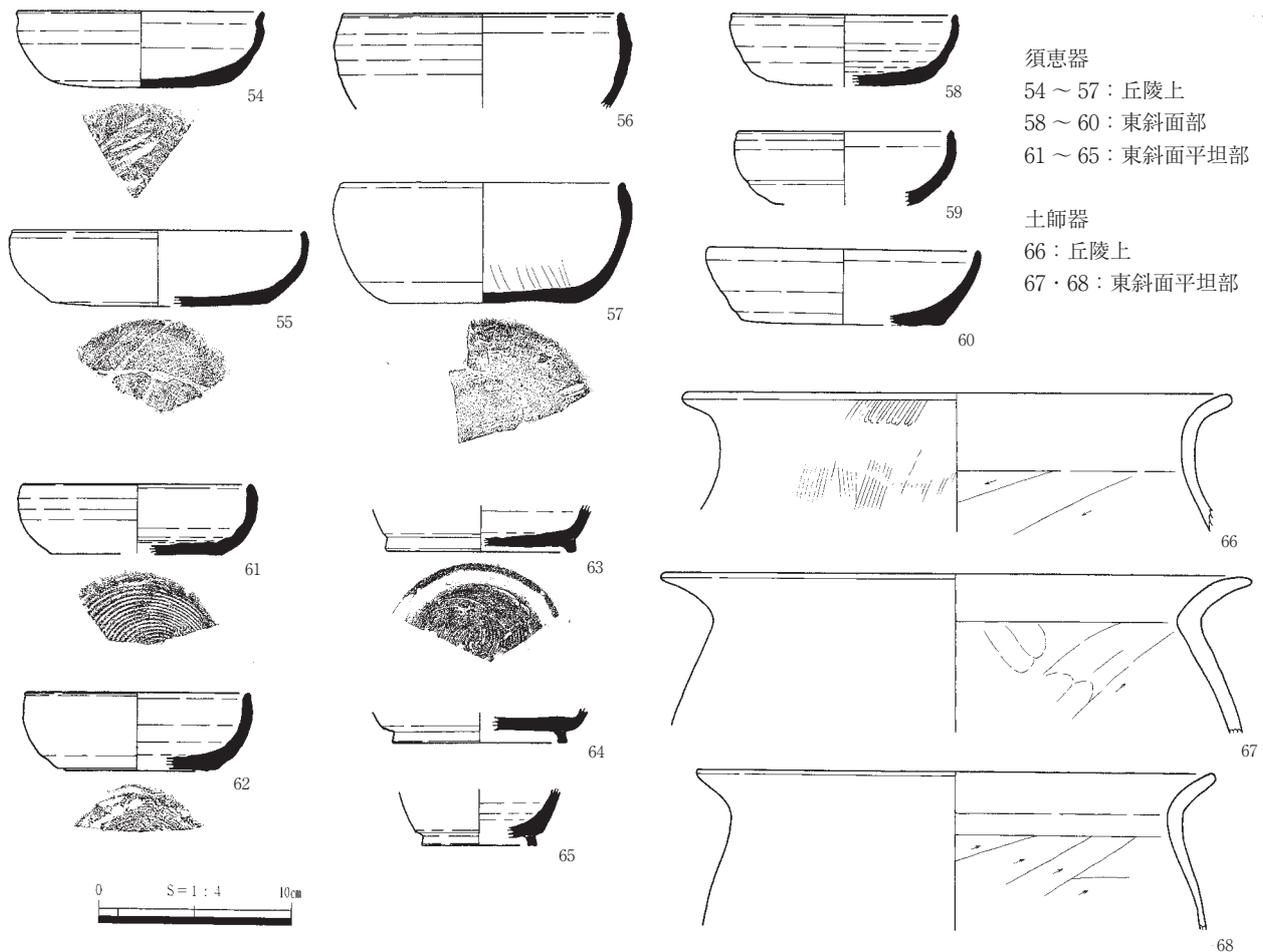
平面形は径90×70cmのやや不整な楕円形で、深さは40cmである。埋土は黄褐色系土が斜位に入っており、人為的な埋め戻しの可能性がある。遺構の用途は不明である。

遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

#### SK19(第113図、PL.59)

丘陵上平坦面のC9グリッドに位置する。3m北にSK18がある。周辺の標高は61.5mである。

平面形は径1m×70cmの楕円形で、深さは20cmである。埋土は明黄褐色土の単層である。



第112図 遺構外出土遺物(古代)

遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

**SK20(第113図、PL.59)**

丘陵上平坦面のF9グリッドに位置する。遺構南側でSI3を切る。周辺の標高は62.4mである。平面形は径1.1m×90cmの不整な円形で、深さは15cmである。埋土は暗褐色土の単層である。

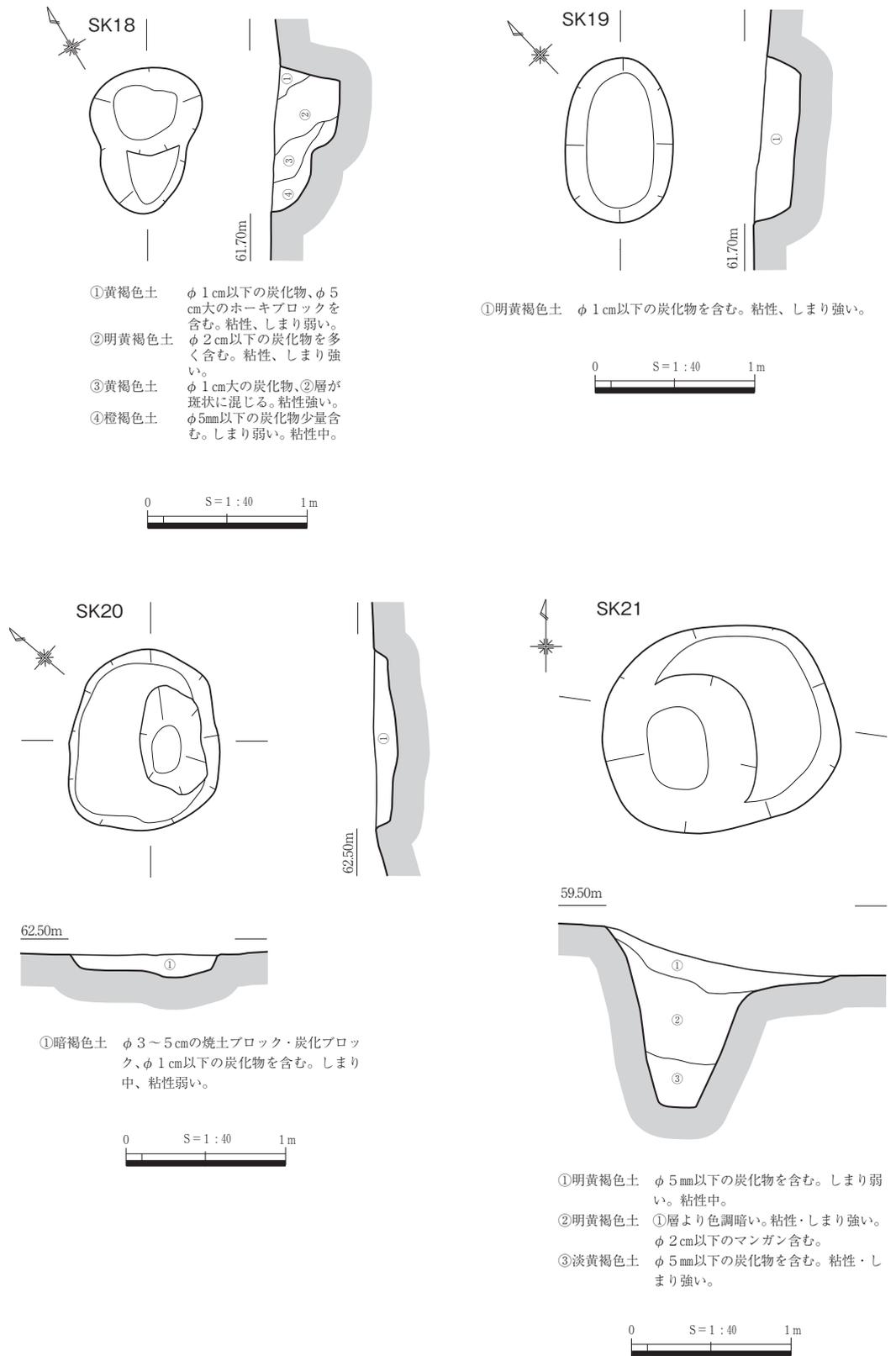
遺物は出土していないが、SI3との切り合い関係から古墳時代前期以降のものと判断した。

**SK21(第113図、PL.59)**

D6グリッドの丘陵上平坦面から東斜面にかけての緩斜面に位置する。周辺の標高は59mである。

平面形は径1.5×1.3mの円形で、深さは1.1mである。埋土は黄褐色系土が3層にわたって堆積しており、自然堆積によるものと考えられる。このうち②層にはマンガン粒が含まれているため、埋没過程で土坑内が滞水した時期があったようである。遺構の形態からは、落とし穴の可能性が考えられる。ただし、底面ピットは確認していない。

遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。



第113図 SK18～21

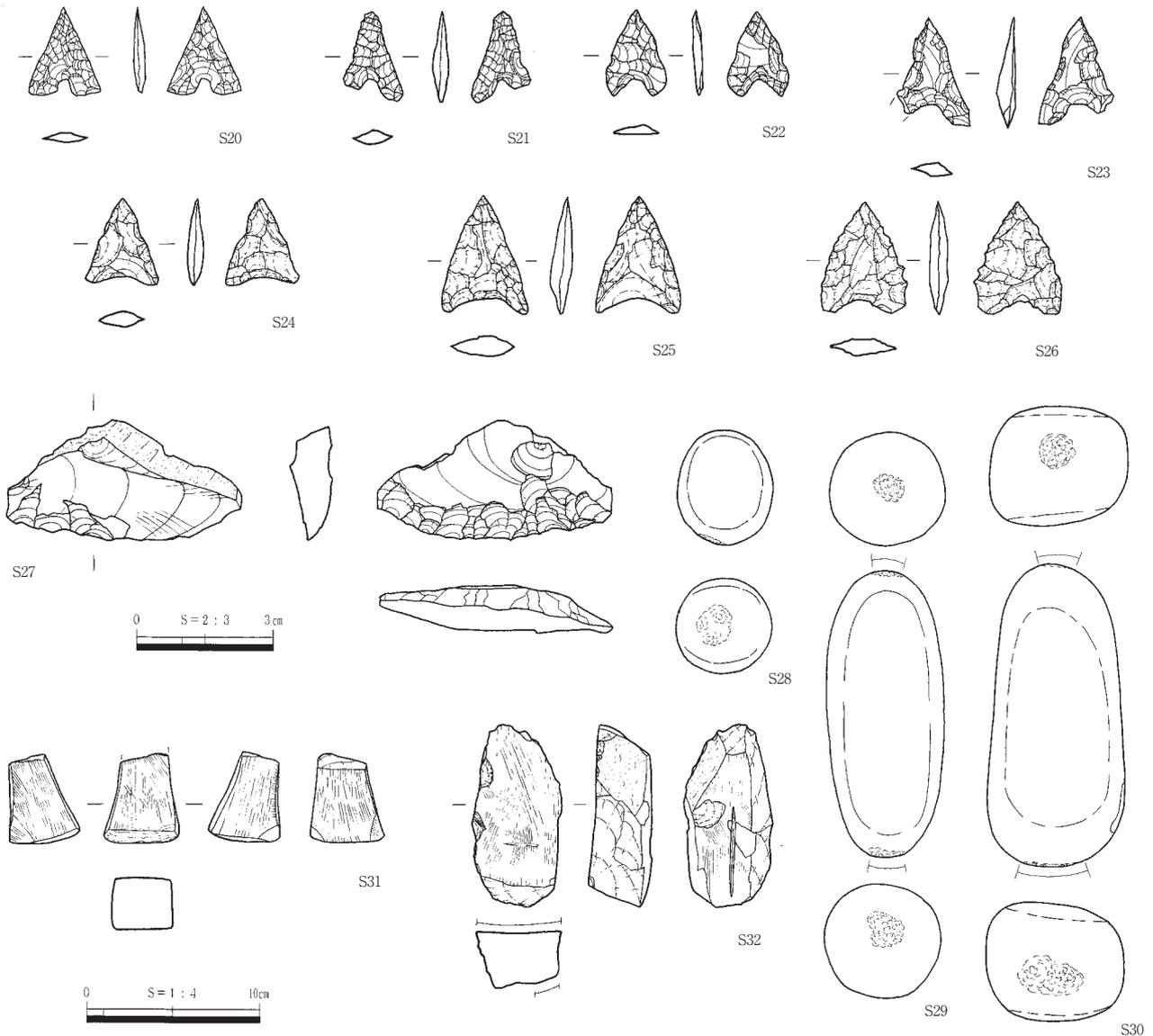
2 遺構外の遺物(第114図、表46、PL.71)

ここでは、遺構外出土の時期不明遺物として、石器を図示した。

S20～S26は石鏃で、S20～S23が黒曜石製、S24～S26がサヌカイト製である。すべて丘陵上平坦部からの出土である。形態や大きさから見て、黒曜石製石鏃は縄文時代に帰属する可能性が考えられる。S27は黒曜石製スクレイパーで、主剥離面側を中心に二次調整が加えられている。縄文時代のものの可能性がある。東斜面平坦部からの出土である。

S28～S30は安山岩の円礫を利用した敲石。S31・S32は細粒花崗岩製の砥石である。S28～S31は丘陵上平坦部からの出土、S32は東斜面部からの出土である。

このほか、図示していない黒曜石製の石器類が少量出土しており、器種の内訳は、石鏃破片2点、加工痕のある剥片1点、剥片4点、碎片2点、石核(小形の残核)1点である。



第114図 遺構外出土石器

## 第5節 自然科学分析の成果

## 1 梅田東前谷中峯遺跡出土炭化材放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ  
 小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫  
 Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

## (1)はじめに

梅田東前谷中峯遺跡は、鳥取県東伯郡琴浦町に所在し、標高60m前後の小丘陵上に立地する弥生時代から古代にかけての集落遺跡である。堅穴住居と土坑より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadze、Jorjolianiが行い、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、中村が作成した。

## (2)試料と方法

測定試料の情報、調製データは表38のとおりである。

試料は炭化材6点である。試料No.1(PLD-8939)は、弥生時代後期と考えられる堅穴住居(SI1)中央のピット(P5)内より検出された。試料No.2(PLD-8940)は、弥生時代後期と考えられる堅穴住居(SI2)支柱穴(P4)より検出された柱材である。SI2は焼失住居である。試料No.3(PLD-8941)は、古墳時代前期と考えられる堅穴住居(SI3)埋土中層より検出された。試料No.4~6(PLD-8942~8944)は、製炭土坑と考えられる時期不明の土坑3基(SK1、SK4、SK12)より、それぞれ検出された。炭化材は、いずれも部位が不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表38 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-8939	遺跡名：梅田東前谷中峯遺跡 遺構：SI2-P5(堅穴住居ピット)内 試料No.：1	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位年輪数不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム：1N,塩酸:1.2N)
PLD-8940	遺跡名：梅田東前谷中峯遺跡 遺構：SI2-P4(堅穴住居ピット)柱材 試料No.：2	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明3年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム：1N,塩酸:1.2N)
PLD-8941	遺跡名：梅田東前谷中峯遺跡 遺構：SI3(堅穴住居) 試料No.：3 層位：埋土中層	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪含む5年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム：1N,塩酸:1.2N)
PLD-8942	遺跡名：梅田東前谷中峯遺跡 遺構：SK1(土坑) 試料No.：4 その他：製炭土坑	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明3年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム：1N,塩酸:1.2N)
PLD-8943	遺跡名：梅田東前谷中峯遺跡 遺構：SK4(土坑) 試料No.：5 その他：製炭土坑	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明5年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム：1N,塩酸:1.2N)
PLD-8944	遺跡名：梅田東前谷中峯遺跡 遺構：SK12(土坑) 試料No.：6 その他：製炭土坑	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明5年輪前後 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム：0.2N,塩酸:1.2N)

### (3) 結果

表39に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した $^{14}\text{C}$ 年代、 $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第115図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代(yrBP)の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal3.10(較正曲線データ：INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表39 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-8939 試料No: 1	-28.00 $\pm$ 0.12	1890 $\pm$ 22	1890 $\pm$ 20	<u>75AD (68.2%)</u> 130AD	<u>60AD (91.4%)</u> 180AD 190AD (4.0%) 220AD
PLD-8940 試料No: 2	-27.84 $\pm$ 0.14	2002 $\pm$ 22	2000 $\pm$ 20	<u>40BC (68.2%)</u> 25AD	<u>50BC (95.4%)</u> 60AD
PLD-8941 試料No: 3	-28.49 $\pm$ 0.22	990 $\pm$ 22	990 $\pm$ 20	<u>1010AD (54.8%)</u> <u>1050AD</u> 1100AD (11.5%) 1120AD 1140AD (1.8%) 1150AD	<u>990AD (67.7%)</u> <u>1050AD</u> 1080AD (27.7%) 1160AD
PLD-8942 試料No: 4	-27.17 $\pm$ 0.15	1259 $\pm$ 21	1260 $\pm$ 20	<u>690AD (58.9%)</u> <u>750AD</u> 760AD (9.3%) 775AD	<u>670AD (92.6%)</u> <u>780AD</u> 790AD (2.8%) 810AD
PLD-8943 試料No: 5	-28.66 $\pm$ 0.13	1257 $\pm$ 21	1255 $\pm$ 20	<u>690AD (58.5%)</u> <u>750AD</u> 760AD (9.7%) 775AD	<u>670AD (95.4%)</u> 810AD
PLD-8944 試料No: 6	-27.07 $\pm$ 0.23	1244 $\pm$ 21	1245 $\pm$ 20	<u>690AD (50.8%)</u> <u>750AD</u> 760AD (13.7%) 780AD 790AD (3.7%) 800AD	<u>680AD (95.4%)</u> 870AD

**(4) 考察**

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2 $\sigma$ 暦年代範囲に注目して年代を整理する。2 $\sigma$ 暦年代範囲は、95.4%の確率で年代がこの範囲に収まることを意味する。

試料No.1 (PLD-8939)の2 $\sigma$ 暦年代範囲は、60-180calAD(91.4%)および190-220calAD(4.0%)、試料No.2 (PLD-8940)の年代範囲は、50calBC-60calAD(95.4%)であり、SI1とSI2の年代を弥生時代後期とする発掘調査所見と整合的であった。

試料No.3 (PLD-8941)の2 $\sigma$ 暦年代範囲は、990-1050calAD(67.7%)および1080-1160calAD(27.7%)である。SI3の年代は古墳時代前期と判断されているが、試料No.3は埋土中層より検出されているため、試料は竪穴住居の埋没過程で堆積したと考えられる。

試料No.4 (PLD-8942)の2 $\sigma$ 暦年代範囲は、670-780calAD(92.6%)および790-810calAD(2.8%)、

試料No.5 (PLD-8943)の年代範囲は、670-810calAD(95.4%)であり、SK1とSK4の年代は7世紀後半から9世紀初頭の範囲が示された。

試料No.6 (PLD-8944)の2 $\sigma$ 暦年代範囲は、680-870calAD(95.4%)であり、SK12の年代は7世紀後半から9世紀後半の範囲が示された。

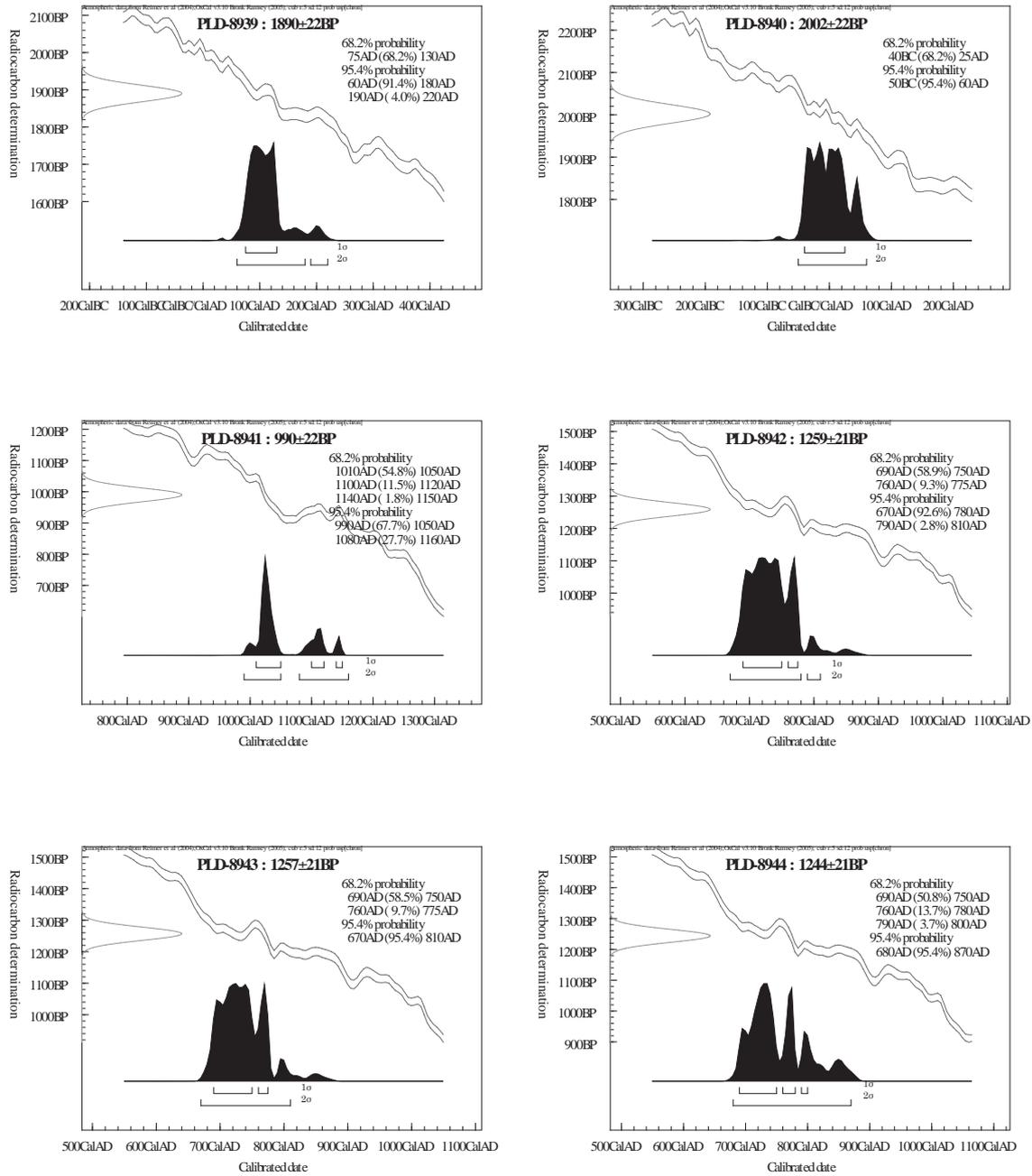
**参考文献**

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代 . 3-20.

Ramsey, C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Ramsey, C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第115図 暦年較正結果

## 2 梅田東前谷中峯遺跡出土炭化材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### (1)はじめに

梅田東前谷中峯遺跡は、東伯郡琴浦町梅田地内の小丘陵上に立地する遺跡である。調査では、弥生時代後期あるいは古墳時代前期の竪穴住居跡などが検出された。ここでは、このうち弥生時代後期の竪穴住居跡とAMS年代測定により古代と考えられる土坑から出土した炭化材について樹種同定を行った。

### (2)試料と方法

試料は、弥生時代後期の竪穴住居跡から出土した炭化材6試料と土坑SK1および土坑SK12から出土した炭化材各1試料である(表40)。

これら炭化材は、3断面(横断面・接線断面・放射断面)を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を十分に乾燥させた。さらに、伝導性ペースト(銀)を塗布した後、金蒸着した。観察および同定は、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV型)を使用し、写真撮影を行った。

表40 出土炭化材とその樹種

試料No.	遺構名	位置	時期	樹種	備考
7	SI 2	P4柱材	弥生時代後期	クスノキ	焼失住居
8		床面		シイノキ属	
9		床面		シイノキ属	
10		床面		クワ属	
11		床面		シイノキ属	
12		床面		スギ	
13	SK 1	内部	PLD-8942;670-780calAD (92.6%)	シイノキ属	製炭土坑
14	SK12	内部	PLD-8944;680-870calAD (95.4%)	シイノキ属	製炭土坑

### (3)結果および考察

炭化材の樹種を検討した結果、弥生時代後期の竪穴住居跡から出土した炭化材は、P4柱材が常緑広葉樹のクスノキであり、その他床面から検出された炭化材が常緑針葉樹のスギ、常緑広葉樹のシイノキ属と落葉広葉樹のクワ属であった。

一方、AMS年代測定により古代と考えられる土坑SK1およびSK12から検出された炭化材は、いずれも常緑広葉樹のシイノキ属であった。

### (4)樹種記載

#### (1) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 PL.72 1a-1c (No.12)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で1分野に2個ある。

スギは、本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材は、やや軽

軟で加工は容易である。

(2) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 PL.72 2a-2c(No.14)

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し徐々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイ(*C.cuspidata*)と福島県と新潟県佐渡以南に分布するスタジイ(*C.cuspidata* var. *sieboldii*)がある。

(3) クワ属 *Morus* クワ科 PL.72 3a-3c(No.10)

年輪の始めに大型で丸い道管が単独あるいは1-2個複合して1-数列並び、晩材部では小型で角張った道管が数個～多数集合する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で1-5細胞幅、3-40細胞高である。

クワ属の樹木は、自生するものでは国内の温帯～暖温帯に広く分布し林縁などの向陽地や谷沿い・河畔の適湿地にみられるヤマグワ、主に中国地方以西に分布するケグワなどがある。材は、やや重硬で韌性に富み、加工はやや困難である。

(4) クスノキ *Cinnamomum camphora* Preal クスノキ科 PL.72 4a-4c(No.7)

単独または放射方向に2個複合した中型の管孔が晩材に向い徐々に径を減じながら散在し、周囲状柔組織と大きな油細胞が顕著な散孔材である。道管の穿孔は単一であり、内腔にはかすかならせん肥厚がある。放射組織は異性2細胞幅、3-20細胞高である。

クスノキは、本州の中部以西・四国・九州の暖帯に生育する常緑高木で長命で大木となる。材は、精油分を含み耐水性・耐朽性・耐虫性に優れている。

## 第6節 梅田東前谷中峯遺跡の総括

調査の結果、梅田東前谷中峯遺跡は弥生時代後期、古墳時代前期、奈良時代後半期に小規模な集落が営まれていたことが明らかになった(第116図)。本節では時期ごとに集落の構成を確認し、周辺遺跡の動向とあわせて本遺跡の性格を考えてみたい。

### 1 梅田東前谷中峯遺跡の集落構成

#### 弥生時代後期後葉

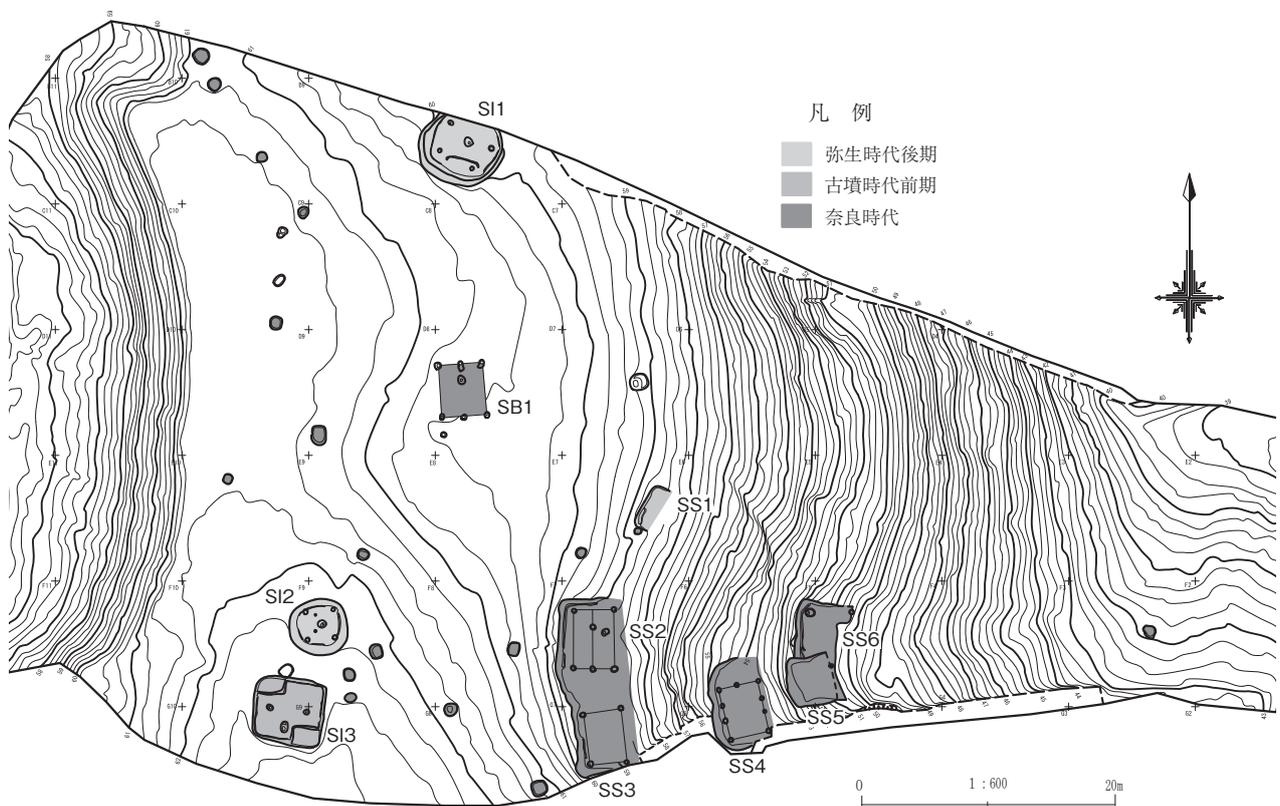
弥生時代後期後葉の主な遺構はSI1・SI2の竪穴住居2棟である。SI1は5本柱で五角形プランをもつ竪穴住居で、鉄器が3点出土した点で注目されよう。SI2は4本柱で隅丸方形プランをもつ、床面積8.5㎡のやや小型の竪穴住居で、いわゆる焼失住居である。

両者の確実な共時存在を示す資料はないが、あえて時期的な前後関係を想定する根拠もないため、ここでは同時並存した可能性が高いと見ておく。なお、本遺跡では調査前の表面観察で竪穴住居を明瞭に確認できたことを受けて、未調査部分の丘陵上を踏査したが、類似する窪地は一箇所も確認できなかった。このため、調査地外には竪穴住居は存在しない可能性が高い。ただし、土坑や掘立柱建物といった、竪穴住居以外の遺構が調査地外に広がる可能性は十分考えられる。

このように、この時期には竪穴住居2棟からなる極めて小規模な集落が営まれていたと考えられる。この集落に居住していた集団は、「単位集団」(近藤1959)ないしは「世帯共同体」(都出1989)として把握されるものであったと考えられる。

#### 古墳時代前期中葉～後葉

古墳時代前期の遺構はSI3の竪穴住居1棟のみである。この住居は屋内高床部を有する点で注目さ



第116図 時期別遺構配置図

れる。高床部が床面の対角に2ヶ所設けられる類例の少ない形態である。なお、住居の基本形態は、方形プランで2本支柱穴をもつ該期に一般的なもので、床面積も23.0㎡と平均的な規模であった。

遺構が調査地外に展開する可能性は残すものの、集落の規模は極めて小さかったと考えられる。該期も弥生時代後期後葉と同じく、最小単位の集団での居住がなされていたと考えられる。

### 奈良時代後半期

奈良時代後半期の建物には、掘立柱建物1棟(SB1)、段状遺構5基(SS2～6)がある。段状遺構のうち4基には掘立柱建物が伴っているので、調査地内の掘立柱建物は全部で5棟となる。このうち、SB1のみが丘陵上平坦部に築かれ、他は東斜面部に築かれている。斜面に建物を建てようとするれば当然平坦面の造成が必要となるので、掘立柱建物が5棟、丘陵上と斜面に立地を違えて築かれていると考えてもよいだろう。実際、SB1とSS2・3・6の掘立柱建物はピットの配置や火処の位置、遺物の出土状況が類似しているので、同様の機能を有していた可能性が高い。

SS5とSS6は切り合っており、SS6→SS5の順に築かれる。また、SS6の下面は奈良時代の遺物も含む包含層となっており、古代集落の形成初期にはSS6は築かれていなかった可能性が高い。ただし、出土遺物ではSS6と他の遺構群には時期差は見られない。したがって、SS5のみが後出のもので、その他の遺構は構築時期に前後があるかもしれないが、機能していた時期は重なり合っていると考えられる。なお、丘陵東斜面の調査地南側では段状遺構の地表面で見られたようなテラス地形がいくらか認められるので、同様の遺構が調査地外に存在する可能性がある。

このほかに、この時期に帰属する可能性が高い製炭土坑が17基(SK1～17)ある。これらによって生産された木炭は、鉄器製作などに用いる工業用燃料となった可能性が高いと考えている。ただし、調査では直接鍛冶に関連する遺構・遺物は確認していない。調査地外に鍛冶関連遺構がある可能性もあるだろうが、鉄滓1点すら確認できていないのでその可能性は低いと思われる。

## 2 周辺遺跡の展開と梅田東前谷中峯遺跡

### 弥生時代中期～古墳時代前期の周辺遺跡

近隣の遺跡からは弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構が数多く検出されている。これらは、いずれも至近距離に位置し、それぞれ緊密な関連をもって展開していたものと考えられる。

本遺跡から丘陵を一つ挟んだ西側の丘陵上に位置する梅田萱峯遺跡は弥生時代中期後葉～後期中葉の集落で、特に中期後葉の竪穴住居は26棟あり、集落規模がかなり大きかったことが明らかになっている(湯村・小山編2008)。細分時期ごとに竪穴住居数を見てみると、IV-1期は14棟で、10棟程度の併存が考えられている。続くIV-2～3期は12棟で、8棟程度の同時存在が想定されている。また、IV-3期には集落内に墳丘墓が造営されており、梅田萱峯遺跡中期集落の特異性を物語っている。その後、後期には集落は縮小しており、竪穴住居数は後期前葉で5棟(最大同時存在数4)、後期中葉では1棟のみである。後期集落が未調査部分に続く可能性も皆無ではないが、現時点では一つの単位集団による居住がなされていたと考えられる。

梅田東前谷中峯遺跡の東隣の丘陵上に位置する筥津乳母ヶ谷第2遺跡では、弥生時代後期後葉の竪穴住居11棟、掘立柱建物3棟、古墳時代前期初頭～前葉の竪穴住居3棟、掘立柱建物6棟などが確認されている(大川・濱本2007、小口・濱本2007)。いずれの時期とも、一時期3～4棟の竪穴住居で集落が形成されていたと考えられており、一つの単位集団が居住していたと捉えられる。

梅田萱峯遺跡と同一丘陵上に約1km離れて存在する八重第3遺跡でも弥生時代後期中葉～古墳時代前期の集落が確認されている(富長・江原1987)。弥生時代後期の竪穴住居は約11棟で、細分すると後期中葉が4棟、後期後葉が5棟となる。限られた範囲の調査のため不確実ではあるが、いずれの時期とも2～3棟ほどの竪穴住居からなる居住単位を2つ以上構成していたようである。このように、八重第3遺跡は上述の3つの後期集落とは異なり、複数の単位集団からなる集落と考えられる。

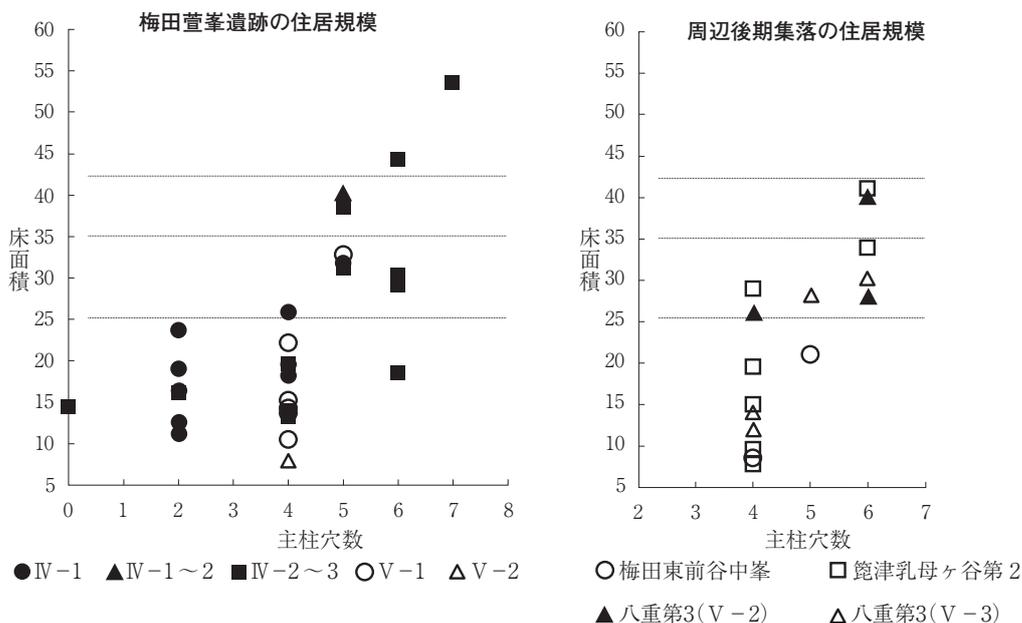
このほか、勝田川右岸の八幡遺跡からは弥生時代後期後葉の溝が見つかったので、こうした沖積地にも集落が存在していた可能性が高いが、その具体的な姿は不明である。また、饒津乳母ヶ谷第2遺跡から尾根を一つ挟んだ東側の丘陵上には、弥生時代後期後葉の墳丘墓と竪穴住居が1棟確認された湯坂遺跡が存在している。

このように、周辺地域での弥生時代中期～後期の集落変遷は、中期後葉に集住度の高い梅田萱峯集落が形成され、後期にこれが解体した後、複数の単位集団によって居住される八重第3遺跡と、一単位集団によって居住される小規模集落が複数出現するという流れで理解できそうである。この過程について、梅田東前谷中峯遺跡の性格を明らかにするため少し立ち入って考えてみたい。

**弥生時代中期集落から後期集落への変遷**

梅田萱峯遺跡の中期後葉集落と後期の各集落を比較した場合、まず集落規模において大きな格差が見られる。梅田萱峯遺跡の竪穴住居数は、中期後葉の時間幅で捉えた場合には総数26棟に上っており、後期後葉の住居数が最も多い饒津乳母ヶ谷第2遺跡の倍以上の数がある。また、同時存在の住居が10棟前後で、複数の居住単位から構成されるというあり方からも、後期集落とは質的な差を有していると考えられよう。このように、梅田萱峯遺跡の中期後葉集落は単位集団の「集合体」(近藤1983)としての性格をもっていたと考えられる。

梅田萱峯の中期集落の集合体は、後期には一つの単位集団で構成される小集落へと分散化しているように見える。後期集落の中で唯一、集合体的な構成をもつ可能性のある八重第3遺跡は、梅田萱峯中期集落に迫るだけの規模であった可能性もある。ただし、遺構密度は梅田萱峯中期集落に比して低いため、集落規模はこれより小さく見積もられるだろう。また、八重第3遺跡は後期前葉の遺構遺物



第117図 竪穴住居規模の比較

を欠いており、梅田萱峯遺跡の中期後葉の集合体的集落をそのまま受け継いでいるわけではない。周辺には後期前葉の遺跡が少ないため詳細は不明だが、後期前葉の集落は、梅田萱峯遺跡に見られるように、一旦分散化ないしは小規模化していると考えておこう。こうした分散化、小規模化を経て、後期中葉以降集落がいくらか拡大し、集合体化したものが八重第3遺跡であったと考えられる。

次に、集落内の竪穴住居に目を移してみると、梅田萱峯中期集落と後期集落とではその構成のされ方が異なっていることが分かる(第117図)。特に注目されるのは、梅田萱峯遺跡の中期集落に構成されている超大型(53.7㎡、44.3㎡)の竪穴住居である。後期集落にはこうした住居は見出せない。この点から見ても、梅田萱峯中期集落と後期集落には質的な差があると思われる。すなわち、集合体的な集落である梅田萱峯遺跡には遺跡内でも大きな格差をもって竪穴住居が構成されており、集落内での集団構成の複雑化や組織化が進行していたと推察できる。さらに住居以外の遺構のあり方もこれを裏付けており、集落内には独立棟持柱をもつ掘立柱建物や、大型の貯蔵施設と見られる方形土坑群、そして墳丘墓が存在することから、周辺地域における梅田萱峯遺跡の優位性と、集落内での首長層の伸張がうかがえよう。これに対し、後期集落の場合、構成住居数の多い集落では、大型(36～41㎡)、やや大型(25～35㎡)、中型(8～24㎡)および小型(8㎡以下)と大小の住居がほぼバランスよく組み合わせ、これに1～2棟の掘立柱建物をともなって集落が形成されていたようである<sup>(1)</sup>。こうした後期集落の住居規模の構成と、超大型を除いた中期後葉集落の住居規模の構成とを比べてみると、両者間で類同性が高いことが分かる。したがって、後期集落は、八重第3遺跡も含めて中期後葉集落の「一般的」な部分のみからなっているととも考えられる。この一般的な居住単位が分立し、単独ないしは複合(八重第3遺跡)して居住域を形成したのが後期集落だと捉えることも可能であろう。

梅田周辺の丘陵地域における中期集落から後期集落への変遷を以上のように考えたが、当然ながら両者に直接の系譜関係があるかどうかは明らかにはできない。しかし、少なくとも、中期後葉段階に集住的な集落が解体した後、近隣地域に後期集落が分立するという現象には、社会的に連続性があると考えられる。これに積極的な評価を与えるならば、生産単位として自立性を高めた単位集団が、新たな生産領域を開発しながら周辺地域に分散していったものと考えられよう。こうした前提に立てば、梅田東前谷中峯遺跡は、谷間に延びる狭い沖積地を谷水田として開発し、その近傍に居住地を構えることで形成された集落であったと評価できるだろう。

このような流れを踏まえると、集落が分散化し、小規模化することが必ずしも地域社会の「衰退」を示しているわけではないと言える。特に後期後葉の集落は小規模ながらも、その数は確実に増加しており、地域社会全体で見れば集団規模は拡大していると思われる。そして、その地域集団内において優位を占めた単位集団が存在していたことも、湯坂遺跡での墳丘墓の存在から明らかである。このような後期後葉における集落の増加現象は他の地域でも起こっており、なかには集落の著しい大規模化が起こる地域も見られる<sup>(2)</sup>。梅田周辺の丘陵域遺跡群ではこうした様子うかがえないものの、後期後葉に生じた変化はこれらの他地域と連動した社会変化であったと考えられるだろう。

#### 奈良時代の周辺遺跡

奈良時代においても本遺跡と筧津乳母ヶ谷第2遺跡、梅田萱峯遺跡との関連性は非常に高い。

筧津乳母ヶ谷第2遺跡では本遺跡と同様に斜面地を利用した集落が営まれている。奈良時代には段状遺構5基が造られており、そのうち最大2基が同時存在の可能性がある。斜面地に集落が形成され始めたのは古墳時代後期後葉で、これ以降、奈良時代後半期ごろまで集落が継続しており、梅田東前

谷中峯遺跡と併存していた可能性が考えられる。このように、梅田東前谷中峯遺跡と篔津乳母ヶ谷第2遺跡の古代集落は、至近距離に位置し、共通の立地で類似遺構が築かれている点からみて、近縁性が非常に高いと言えよう。

梅田萱峯遺跡は、立地の面では梅田東前谷中峯遺跡や篔津乳母ヶ谷第2遺跡と異なり、尾根上の平坦面に古代集落が営まれている。未調査地に集落が広がる可能性が極めて高く、その全容は不明であるが、調査範囲内からは竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟などが見つまっている。いずれも奈良時代後半期に属するもので、梅田東前谷中峯遺跡と併存していた可能性は高い。

篔津乳母ヶ谷第2遺跡、梅田萱峯遺跡ではともに鍛冶関連遺構が確認されている。篔津乳母ヶ谷第2遺跡の段状遺構からは、部分発掘ながら鍛冶関連遺物が大量に発見されており、未発掘部分に鍛冶炉が存在していた可能性が高いと考えられている。この遺構は7世紀代から8世紀代にかけて継続しており、梅田東前谷中峯遺跡の集落とも併存していた可能性がある。一方、梅田萱峯遺跡では奈良時代後半期の掘立柱建物をともなう鍛冶炉が確認されており、小規模な鍛冶が行われていたと推定されている。鍛冶には燃料となる木炭の供給が欠かせないが、両者とも調査地内では製炭土坑は確認されていない。ともに未調査地に集落が広がるため単に調査地内で見つからないだけかもしれないが、梅田東前谷中峯遺跡で検出された製炭土坑の多くが該期に帰属する可能性の高いことを積極的に評価すれば、本遺跡で生産された木炭がこうした鍛冶遺構に供給されていたと考えることも可能であろう。これらの遺跡との直接の関係がなくとも、梅田東前谷中峯遺跡で生産した木炭は近隣の鍛冶遺構を有する遺跡へと搬出していた可能性があると考えている。これを証明することは難しいが、いずれにしても、本遺跡や篔津乳母ヶ谷第2遺跡、梅田萱峯遺跡に見るように、周辺丘陵に展開する奈良時代の遺跡は工業生産に関連する領域を含みながら集落を形成していたと考えられる<sup>(3)</sup>。

#### 【註】

- (1) 床面積を基準とした竪穴住居規模の区分には、妻木晩田遺跡の住居の統計的な分析から導き出された馬路晃祥氏の分類を参考にしている(馬路2006)。
- (2) 加勢蛇川下流域周辺の丘陵部や淀江平野周辺の丘陵部などでは、後期後葉に遺跡数が急増するだけでなく、笠見第3遺跡や妻木晩田遺跡などに代表されるように、集落が著しく大規模化している。
- (3) これら丘陵地の遺跡と対照的な遺跡として、勝田川右岸の八幡遺跡があげられる。この遺跡では7世紀後半から8世紀代にかけて掘立柱建物10棟、竪穴住居5棟などが築かれている。総柱の高床建物を含み、出土遺物に墨書土器、転用硯があることから、一般的な集落とは異なった行政機能をもった官衙関連遺跡と評価されている(野口編2005)。

#### 【引用文献】

- 大川泰広・濱本利幸2007『篔津乳母ヶ谷第2遺跡Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書12  
 小口英一郎・濱本利幸2008『梅田萱峯遺跡Ⅲ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書19  
 小口英一郎・濱本利幸2007『篔津乳母ヶ谷第2遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書15  
 近藤義郎1959「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1 考古学研究会  
 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店  
 高尾浩司・浅田康行2007『梅田萱峯遺跡Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11  
 都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店  
 富長源十郎・江原俊雄1987『八重第3遺跡』中山町教育委員会  
 野口良也編2005『八幡遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書99 (財)鳥取県教育文化財団  
 馬路晃祥2006「竪穴住居からみた妻木晩田遺跡の集落構造」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書-第8・11・13次調査-』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 鳥取県教育委員会  
 湯村功・小口英一郎・濱本利幸2007『梅田萱峯遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16  
 湯村功・小山浩和編2008『梅田萱峯遺跡Ⅳ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書22

表41 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(1)

遺物番号	挿図図版	遺構地区層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
1	第74図 PL.61	SI1 床直他 SK20 埋土中	弥生土器	甕	口径※16.7 器高△18.3	外面口縁部上半平行沈線後ナデ消し。口縁部下半平行沈線。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁による押し引き波状文。概して風化。内面口縁部ヨコナデ。頸部横方向ミガキ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1mm大の砂粒含む)	良好	外面にぶい黄橙色。内面明黄褐色
2	第74図 PL.61	SI1 9・10層	弥生土器	甕	器高△3.8	外面口縁部8条以上の平行沈線。頸部ヨコナデ。内面ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
3	第74図 PL.61	SI1 9+11層	弥生土器	甕	口径※18.4 器高△4.1	外面口縁部風化のため調整不明。頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
4	第74図 PL.61	SI1 5+9層	弥生土器	甕	器高△4.9 底径 4.5	外面縦方向ミガキ。底部ヨコナデ。内面上方向ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも浅黄色
5	第74図 PL.61	SI1 9・10層	土師器	甕	口径※14.8 器高△ 5.8	外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ後ナデ。	密(1mm大の砂粒含む)	やや不良	外面黄橙色。内面黄橙色~にぶい黄橙色
6	第74図 PL.61	SI1 9・10層	土師器	甕	口径※16.0 器高△ 6.7	外面ヨコナデ。内面風化のため調整不明瞭。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
7	第74図 PL.61	SI1 5~8層	土師器	甕	口径※31.2 器高△ 7.6	外面ナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面明黄褐色
8	第74図 PL.61	SI1 5~8層	土師器	甕	器高△6.1	外面ヨコナデ。内面口縁部~頸部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	やや粗(1mm大の砂粒多く含む)	良好	内外面とも黄橙色
9	第74図 PL.61	SI2 14層	弥生土器	甕	口径※17.2 器高△ 5.4	外面口縁部風化のため調整不明。頸部ヨコナデ。内面口縁部丁寧なナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
10	第77図 PL.62	SI2 14層	弥生土器	甕	器高△3.8	外面風化のため調整不明。内面口縁部~頸部ナデか。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	粗(1~3mm大の砂粒多く含む)	良好	外面黄橙色。内面浅黄橙色。
11	第77図 PL.62	SI2 1~2+11層	弥生土器	甕	口径※13.0 器高△ 3.7	内外面とも風化のため調整不明。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面明黄褐色
12	第77図 PL.62	SI2 11層	弥生土器	小型壺	口径※8.8 器高※7.6	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部上半ケズリ、下半ケズリ後ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
13	第80図 PL.63	SI3 床面直上	土師器	甕	口径※13.8 器高△13.5	内外面とも風化著しい。内面頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	不良	内外面とも黄橙色
14	第80図 PL.63	SI3 床面直上	土師器	高坏	器高△12.8 底径※12.8	内外面とも風化著しい。外面筒部タテハケが認められる。	密(1mm大の砂粒含む)	不良	内外面とも黄橙色~明赤褐色
15	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	甕	口径※14.4 器高△ 3.9	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
16	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	甕	器高△ 3.8	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも橙色
17	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	甕	器高△ 3.6	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも淡黄色
18	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	壺	口径※16.0 器高△ 4.8	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	密(1mm以下の砂粒含む)	やや不良	外面にぶい黄橙色。内面浅黄橙色
19	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	壺	口径※19.0 器高△ 6.8	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	密(1mm大の砂粒含む)	やや不良	内外面とも黄褐色
20	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	壺	器高△ 4.6	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも橙色
21	第82図 PL.64	SS1 2層	弥生土器	低脚坏	口径※8.4 器高△3.6	外面風化のため調整不明。内面ケズリ後ナデ。底部焼成前穿孔	密	良好	内外面とも黄褐色
22	第83図 PL.64	F8 II層	弥生土器	甕	口径※17.6 器高△5.8	外面口縁部7~8条の平行沈線。頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面明黄褐色

表42 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(2)

遺物番号	挿図版	遺構地区層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
23	第83図 PL.65	F9 II層	弥生土器	甕	口径※17.4 器高△ 5.9	内外面とも風化著しい。外面口縁部わずかに多条化した平行沈線が認められる。	粗(1~3mm大の砂粒多量に含む)	やや不良	内外面ともにおい黄橙色
24	第83図 PL.65	C9 II層	弥生土器	甕	口径※14.0 器高△ 4.4	外面口縁部3条以上の平行沈線。頸部ヨコナデ、貝殻腹縁による押し引き波状文。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
25	第83図 PL.64	C6 II層	弥生土器	甕	口径※14.8 器高△ 5.1	外面風化著しい。口縁部平行沈線認められる。肩部貝殻腹縁による押し引き波状文。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも明赤褐色
26	第83図 PL.64	G7 II層	弥生土器	甕	口径※17.5 器高△ 5.3	外面口縁部多条化した平行沈線。頸部ナデ。内面風化のため調整不明。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗(3mm以下の砂粒多く含む)	良好	外面黄灰色。内面浅黄色
27	第83図 PL.64	E8 II層	弥生土器	甕	口径※15.6 器高△ 4.8	外面口縁部乱れた平行沈線。頸部ヨコナデ。内面口縁部工具によるナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	外面黒褐色。内面褐灰色
28	第83図 PL.64	F9 II層	弥生土器	甕	口径※18.2 器高△ 4.4	外面口縁部貝殻条痕による波状文。内面風化のため調整不明。	粗(1~5mmの砂礫を含む)	良好	内外面とも灰白色
29	第83図 PL.64	F9 II層	弥生土器	甕	口径※15.2 器高△ 5.5	外面口縁部多条化した波状文。一部ナデ消し。頸部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面ともにおい黄橙色
30	第83図 PL.64	B9 II層	弥生土器	甕	器高△ 4.7	外面口縁部乱れた平行沈線後一部ナデ消し。頸部ヨコナデ。内面ミガキ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも明黄褐色
31	第83図 PL.64	B9 II層	弥生土器	甕	器高△ 4.6	外面口縁部7条平行沈線。頸部ヨコナデ。内面口縁部~頸部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
32	第83図	F2 II層	弥生土器	高坏	器高△4.0 底径※9.2	外面裾部多条化した平行沈線。内外面風化著しい。	やや粗(2mm以下の砂粒多く含む)	やや不良	内外面とも浅黄橙色
33	第83図 PL.65	E6 II層	土師器	壺	口径※21.5 器高△10.4	内外面風化のため調整不明。内面頸部以下ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面ともにおい黄橙色
34	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	口径※13.2 器高 4.2 底径 8.4	外面回転ナデ。体部下ケズリ後ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密	良好	内外面ともにおい褐色~灰褐色
35	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	口径※12.4 器高 4.4 底径 8.2	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部風化のため調整不明。	密	やや不良	内外面とも灰色~明褐色
36	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	器高△4.0 底径 8.5	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部回転ナデ後不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む。7mm大の礫わずかに含む)	良好	内外面とも灰色
37	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	器高△ 4.3	内外面とも回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも緑灰色
38	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	皿	口径※16.0 器高△ 2.2	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも青灰色
39	第85図 PL.66	SB1-P7 埋土中	土師器	甕	口径※25.6 器高△ 6.6	外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
40	第87図 PL.68	SS2 4層	須恵器	坏	口径※13.2 器高※ 4.3 底径※ 8.6	外面体部回転ナデか。風化著しい。底部回転糸切り後不整ナデ。内面体部回転ナデか。底部風化のため調整不明。	密	不良	内外面とも灰オリーブ色
41	第87図 PL.68	SS2 4層	須恵器	坏	口径※14.6 器高△ 2.9	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも褐灰色
42	第87図 PL.68	SS2 4層	須恵器	坏	器高△1.8 底径※8.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	褐色

表43 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(3)

遺物番号	挿図図版	遺構地区層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
43	第87図 PL.67	SS2-P7 埋土中	土師器	甕	口径 20.5 器高△19.0	外面口縁部ヨコナデ。肩部風化のため調整不明。最大径付近タテハケ。以下斜方向ハケ。内面口縁部風化著しい。ナデか。頸部以下上方向ケズリ。底部左方向ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
44	第90図 PL.67	SS4 床面直上+ SS4-P6 埋土中	土師器	甕	口径※26.6 器高△17.8	外面口縁部~頸部ヨコナデ。体部上半タテハケ。下半斜~タテハケ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下横方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒含む)	やや不良	内外面とも橙色
45	第93図 PL.68	SS6 床面直上	須恵器	坏	口径 15.7 器高 5.1 底径 10.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後不整ナデ。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密	やや不良	外面橙色~灰黄色。内面灰黄褐色~灰黄色
46	第98図 PL.68	SK5	土師器	甕	器高△3.1	内外面ともヨコナデ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	外面明黄褐色。内面浅黄橙色
47	第108図 PL.68	SK16	須恵器	坏	口径 12.3 器高 4.1 底径 7.55	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも灰色
48	第108図 PL.68	SK16	土師器	高坏	器高△4.8	外面タテハケ。内面筒部ケズリ後ナデ。裾部ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色
49	第111図 PL.68	F2 II'層	須恵器	壺	器高△13.3	外面体部上半回転ナデ。下半格子目叩き。底部ヘラ切り後ナデ。内面体部回転ナデ。下半に一部当具痕。底部当具痕。	密	良好	外面灰色。内面灰~灰白色
50	第111図 PL.68	E2 II'層	須恵器	坏	口径 11.4 器高△ 4.1	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	不良	内外とも灰オリーブ色
51	第111図 PL.68	F2 II'層	土師器	甕	口径 29.0 器高※25.9	外面口縁部~頸部ヨコナデ。肩部2条の沈線。体部ナデ。一部布目痕。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部右方向ケズリ。肩部以下上方向ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面にぶい黄橙色
52	第111図	F2 II'層	土師器	甕	口径※30.4 器高△12.1	外面口縁部~肩部ヨコナデ。以下タテハケが認められる。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右上方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面ともぶい黄橙色
53	第111図 PL.65	E2 II'層	土師器	壺	口径※20.6 器高△12.4	内外面とも口縁部ヨコナデ。頸部以下風化のため調整不明。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも明黄褐色
54	第112図 PL.69	C6 II層	須恵器	坏	口径※13.0 器高 5.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後一部ナデ。内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも暗青灰色
55	第112図 PL.69	F7 表土	須恵器	坏	口径※15.4 器高 4.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	不良	内外面とも黄灰色
56	第112図 PL.69	C7 II層	須恵器	坏	口径※14.5 器高△ 5.1	内外面回転ナデ。外面一部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも灰色
57	第112図 PL.69	C・D7 II層	須恵器	坏	口径※14.6 器高 6.4 底径※ 9.6	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部から体部下半回転ナデ放射状指ナデ。底部不整ナデ。	密	良好	内外面とも灰色
58	第112図 PL.69	F4 II'層	須恵器	坏	口径※11.6 器高 3.8 底径※ 8.1	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後ナデ。内面体部回転ナデ。底部回転ナデ後不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも灰色
59	第112図 PL.69	東斜面部 南側表採	須恵器	坏	口径※11.2 器高△ 4.9	内外面回転ナデ。	密	良好	内外面とも緑灰色
60	第112図 PL.69	F4 II'層	須恵器	坏	口径※14.4 器高 4.0	外面体部回転ナデ。底部風化のため調整不明。内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	不良	内外面とも黄灰色~褐色
61	第112図 PL.69	D2 II'層	須恵器	坏	口径※11.8 器高 3.8 底径※ 9.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面ともオリーブ灰色

表44 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(4)

遺物 番号	挿図 図版	遺構 地区 層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
62	第112図 PL.69	E2 II'層	須恵器	坏	口径※11.5 器高 4.2 底径※ 8.2	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後ナデ。 内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面とも明赤褐色～赤灰色
63	第112図 PL.69	E2 II'層	須恵器	高台坏	器高△2.2 底径※9.8	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。 内面体部～底部回転ナデ。見込み当具痕ナ デ消し。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面とも灰色
64	第112図	D2 II'層	須恵器	高台坏	器高△1.6 底径※9.1	外面体部回転ナデ。底部ヘラ切り後ナデ。 内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面とも
65	第112図 PL.69	D2 II'層	須恵器	小型壺	器高△2.9 底径※5.9	内外面回転ナデ。	密(2mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面灰黄色
66	第112図 PL.70	E7・8 II層	土師器	甕	口径※30.6 器高△ 7.8	外面口縁部ヨコナデ。頸部以下タテハケ。 内面口縁部～頸部ヨコナデ。以下ケズリ。	密(1mm大の砂粒 含む)	良好	内外面とも橙色
67	第112図 PL.70	F2 II'層	土師器	甕	口径※31.0 器高△ 8.1	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ後一 部ナデ。	やや粗(1～3mm 大の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
68	第112図 PL.70	F2 II'層	土師器	甕	口径※27.0 器高△ 8.2	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外とも明赤褐色

表45 梅田東前谷中峯遺跡出土鉄器観察表

掲載 番号	挿図 図版	遺構・層位	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
F1	第74図 PL.71	SI1 床面直上	鉈	△ 13.0	△ 1.9	0.3	14.0	鍛造品。刃部欠損。柄部が薄手。
F2	第74図 PL.71	SI1 床面付近	不明板状鉄製品	△ 4.7	△ 3.3	0.25	16.8	鍛造品破片。酸化土砂に覆われる。銹化により内部空洞化。
F3	第74図 PL.71	SI1 埋土下層	不明棒状鉄製品	△ 2.3	0.7	0.25	2.2	鍛造品。上下端とも欠損。

表46 梅田東前谷中峯遺跡出土石器観察表

掲載番号	挿図	グリッド	遺構	層位	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)*	備考
S1	第74図	B7・8	SI1	下層	石鏃	サヌカイト	3.1	1.8	0.3	1.1	裏面に素材面残。左脚部欠損
S2	第74図	B7・8	SI1	下層	石鏃	サヌカイト	2.6	1.5	0.3	1.1	表裏面に素材面残
S3	第74図	B7・8	SI1	1層	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	0.5	0.6	脚部古欠。風化顕著
S4	第74図	B7・8	SI1	中層	石鏃	黒曜石	△ 1.9	△ 1.6	0.3	1.0	先端・両脚古欠
S5	第74図	B7・8	SI1	上・中層	台石	安山岩	△ 16.1	△ 11.4	7.4	2000	明確な使用痕は確認できない
S6	第74図	B7・8	SI1	床直	磨石	安山岩	17.6	6.6	5.8	1070	一面に磨り面
S7	第74図	B7・8	SI1	上層	磨石	安山岩	8.8	6.1	3.1	240	ほぼ全面が磨り面
S8	第74図	B7・8	SI1	床直	磨石(?)	安山岩	12.3	6.5	2.8	330	明確な擦痕は確認できない
S9	第74図	B7・8	SI1	下層	敲石	安山岩	10.2	5.0	4.7	310	上下端に敲打痕
S10	第77図	F8・9	SI2	17層	石錘	安山岩	4.4	4.1	1.5	36.0	打ち欠き石錘
S11	第77図	F8・9	SI2	17層	敲石	安山岩	16.0	7.8	6.0	940	一端に敲打痕
S12	第77図	F8・9	SI2	1～2層	石鏃	サヌカイト	2.5	1.8	0.3	1.4	表裏面に素材面残
S13	第80図	G9他	SI3	床直	台石	安山岩	△ 24.1	△ 14.7	8.8	2650	明確な使用痕は確認できない
S14	第80図	G9他	SI3	19層	砥石	細粒花崗岩	9.6	8.3	5.9	720	砥石目極細。細かな擦痕多数
S15	第80図	G9他	SI3	下層	砥石	流紋岩質凝灰岩	13.7	4.1	3.1	180	砥石目極細。擦痕・傷痕多数。
S16	第82図	E6	SS1	検出面	敲石	安山岩	△ 5.3	6.6	6.2	270	一端に敲打痕・剥離痕
S17	第87図	F6	SS2	床付近	磨石(?)	安山岩	9.1	5.4	4.1	270	明確な擦痕は確認できない
S18	第90図	F・G5	SS4	3層	磨石	安山岩	10.4	6.5	5.6	550	一面に磨り面
S19	第90図	F・G5	SS4	3層	磨石(?)	安山岩	9.3	5.6	4.7	330	明確な擦痕は確認できない
S20	第114図	F9	-	II層	石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.5	
S21	第114図	E7	-	II層	石鏃	黒曜石	2.0	△ 1.3	0.4	0.5	脚部古欠
S22	第114図	C8	-	II層	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.5	表裏面に素材面残
S23	第114図	F7	-	II層	石鏃	黒曜石	2.4	△ 1.6	0.4	0.8	表裏面に素材面残。脚部欠損
S24	第114図	B8	-	II層	石鏃	サヌカイト	1.9	1.6	0.4	0.7	
S25	第114図	E7	-	II層	石鏃	サヌカイト	2.6	1.9	0.5	1.5	表裏面に素材面残
S26	第114図	G6	SS3	埋土中	石鏃	サヌカイト	2.5	1.9	0.4	1.5	表面に素材面残
S27	第114図	F3	-	II層	スクレイパー	黒曜石	2.6	5.2	1.0	11.6	刃部に微細剥離痕、摩滅あり
S28	第114図	D7	-	II層	敲石	安山岩	7.2	6.1	6.0	350	一端に敲打痕
S29	第114図	D6	-	II層	敲石	安山岩	16.7	6.9	6.6	1100	上下端に敲打痕
S30	第114図	D7	-	II層	敲石	安山岩	17.8	8.1	7.0	1600	上下端に敲打痕
S31	第114図	E7	-	II層	砥石	細粒花崗岩	△ 5.6	4.5	4.5	150	砥石目細。細かな擦痕あり
S32	第114図	F4	-	II層	砥石	細粒花崗岩	11.3	5.5	3.5	350	砥石目極細。擦痕・傷痕多数

\* 重量100g以上のものは10g単位で計量